

Inbetween Africa and Japan

Stories of Study Abroad Experiences
2016-2020

外大生の見たアフリカ、

アフリカ人学生を見た日本

留学体験記集二〇一六〜二〇二〇

大石高典・神代ちひろ 編

東京外国語大学

国際社会学部アフリカ地域専攻
現代アフリカ地域研究センター

Edited by Takanori Oishi & Chihiro Kumashiro

Tokyo University of Foreign Studies

African Area Studies, School of International and Area Studies
African Studies Center

裏表紙の写真：

Back cover photos:

左上：2019年5月、府中市のくらやみ祭に参加(シュクル・ムレカテテ)

Upper left : In May 2019, Participation in *Kurayami* Festival at Fuchu City in Tokyo.
(Shukulu Murekatete)

右上：フイエの山の上からの景色。「千の丘の国」と呼ばれるルワンダはどこに行っても緑豊かで美しい。(飯野真子)

Upper right: The view from the top of a mountain in Huye. Rwanda is known as the "Land of a Thousand Hills," and everywhere is lush and beautiful. (Mako Iino)

中央：チアリーディング部RAMSの仲間と(ウェンディ＝ローズ・ゴベンダー)

Center: With RAMS club mates. (Wendy-Rose Govender)

左下：ガーナ大学からの派遣留学生として外大に来ていたコフィと彼のおばあちゃん。私は全幅の信頼を置いているコフィとその家族の手引きで行動範囲を広げることができた。このような存在を持てるのが派遣留学のよいところである。(井出有紀)

Lower left: Kofi and his grandmother, who had been at TUFS as a exchange student from the University of Ghana. I could expand my range of activities with the help of Kofi and his family. Exchange student program allowed me to find to have such people in my life. (Yuki Ide)

右下：ワイヤーアーティストの師匠と(杉山翔洋)

Lower right: With a master wire artist. (Shoyo Sugiyama)

外大生が見たアフリカ、アフリカ人学生が見た日本
— 留学体験記集 2016～2020 —

Inbetween Africa and Japan:
Stories of Study Abroad Experiences 2016-2020



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

大石 高典

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

「アフリカ留学」という言葉には、魅惑的な響きがあります。同時に、何が起こるかわからないという意味で危険なおいを感じ取る人もいるかもしれません。20歳前後の若者にとって、アフリカへの長期渡航は、他地域への渡航に比較して相対的に高い旅費、ともすると流動的な政治情勢、マラリアなどの感染症リスクなどを考慮すると、敷居が高いものだと思います。しかし、学生たちは深く悩んだ末に、あるいは拍子抜けするほどあっさりとして、アフリカへ出かけていきます。アフリカを目指す学生たちは、現地で何を見つけ、何を学ぶのでしょうか。東京外国語大学に国内初の学部レベルでのアフリカ地域研究を掲げた学科ができて、あと2年で10年を迎えます。この冊子には、2016年から2020年にかけて、アフリカに長期間出かけていった経験を持つ学生による20本の留学体験記を掲載しています。寄稿者たちの渡航先は、セネガル、ガーナ、ケニア、タンザニア、ウガンダ、ブルンジ、ルワンダ、ジンバブエ、南アフリカ、モザンビーク、ザンビア、マダガスカル、スーダンの13ヶ国におよんでいます。これらは、アフリカ54か国の一部に過ぎませんが、それでも日本の大学生が「アフリカで学ぶ」という経験の多様性と今後のポテンシャルを物語っていると思います。

サブサハラ・アフリカ地域の多くの大学は、欧米のブランド化された教育機関とは異なり、特別なプログラムを作って世界中から富裕な留学生を集め、大学運営の資金源にするなどといったことはしていません。体験記を読んでいただくと、派遣先の協定校や自ら見つけた受け入れ先で、学生たちは現地の仲間たちと出会い、机を並べ、日常生活を共にする中で、同時代のありのままのアフリカに触れてきたことが分かると思います。「留学体験記」の中には、学生たちがアフリカで働いたり、フィールドワークを行った経験の記録も含めました。そのため、構成としてはおもな活動内容別に、留学編／インターン編／ボランティアと旅行編の3つに分けましたが、この区分はあくまで便宜的なものです。というのも、大学の教室で与えられたカリキュラムに沿って学ぶという狭義の留学であっても、学生たちはしばしばキャンパスを飛び出して、企業やNGOへのインターンやボランティアを行ったり、自分の関心のための現地調査に挑戦したり、モノづくりに弟子入りしたり、現地で起業を試みたり、何か国ものアフリカ諸国を回る長期旅行をしたりといった様々な「脱線」をしています。道なき道を開拓する「オフロード留学」とも言えるこれらの試行錯誤に、「アフリカ留学」のひとつの特徴と学生たちの意気込みが表れているように感じます。

一方、日本からアフリカに留学する学生が次第に増えているのに比べ、アフリカから日本に留学する学生の数は、特に学部レベルではまだまだ少数です。東京外国語大学では、ここ数年民間に資金援助を要請したり、クラウドファンディングを立ち上げることによって、このアンバランスを是正する取り組みを行ってきました。冊子の後半では、そういった枠組み

を使って、アフリカ諸国（ガーナ、ルワンダ、南アフリカ）から東京外国語大学に派遣され、学んだ6名の留学生による体験記を英文で収録しています。

この冊子に所収の文章は、もともとアフリカ地域専攻のウェブサイトにも順次掲載してきたものですが、一部の日本語による記事の英訳と冊子化は、2020年11月に採択された文部科学省の「世界展開力（アフリカ）」事業による助成で可能になりました。この小さな冊子が媒介となって、さらなる出会いと交流の輪が広がっていくことを期待しています。

Preface

In this booklet, you will find articles on study abroad experiences by (1) Tokyo University of Foreign Studies (TUFS) students who have traveled to Africa, and (2) African students who have come to TUFS, for extended periods between 2016 and 2020. While Africa may appear insignificant for many Japanese students, those from TUFS have traveled 13 countries, including Senegal, Ghana, Kenya, Tanzania, Uganda, Burundi, Rwanda, Zimbabwe, South Africa, Mozambique, Zambia, Madagascar, and Sudan in the past five years. There has been a gradual increase of Japanese students studying in Africa. However, the number of Africans studying in Japan is still small, especially at the undergraduate level.

TUFS has over the past few years been working to correct this imbalance by seeking financial support from the private sector and launching crowdfunding programs. Six international students from African countries (Ghana, Rwanda, and South Africa) were sent to TUFS to write about their daily experiences on campus and beyond. By reading these articles, you will find out how students from both regions have explored Africa and Japan. They demonstrate how exchange facilitates mutual understanding between foreign and host students. In addition, it also allows the former to share their daily lives with local people, ensuring a holistic understanding of the host society.

All articles in this booklet were originally posted on the website of the TUFS Department of African Area Studies. There are 20 articles written by Japanese students. We could not translate all of them into English because of budget limitations. So, we selected six representative articles among them for translation. A grant from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) under the “Inter-University Exchange Project (Africa)” program, which has just been adopted in November 2020, ensured translation and publication of the booklet. I hope that this small booklet will serve as a medium to further expand the circle of encounters and exchanges through two-way students exchange between TUFS and partner institutions in the African continent.

Takanori OISHI, Ph.D.

Associate Professor,

Graduate School of International Studies, Tokyo University of Foreign Studies

この冊子に出てくる大学／場所
Places and Universities referred in the articles in this booklet



地図 1: アフリカ
Map 1: Africa

地図中の囲み番号は、以下のように機関や場所の所在を示しています。
Each number in the Map1 indicates localization of Institutions and place as follows.

第1部・留学編

- ①プロテスタント人文・社会科学大学（ルワンダ共和国フエ市）：内田、飯野、梅津、深澤
- ②ザンビア大学（ザンビア共和国ルサカ市）：池田
- ③ジンバブエ大学（ジンバブエ共和国ハラレ市）：杉山
- ④プレトリア大学（南アフリカ共和国プレトリア市）：高山、ヨハネスブルグ：三原
- ⑤セネガル共和国ダカール市：野間、川口
- ⑥マダガスカル共和国アンタナナリボ市：宮城
- ⑦ブジュンブラ市（ブルンジ共和国）
- ⑧エドゥアルド・モンドラーネ大学（モザンビーク共和国マプト市）
- ⑨ガーナ大学：井出、ガーナ共和国北部：田口（ガーナ共和国）
- ⑩スーダン共和国ハルツーム市：池田

第2部・インターン編

- ⑪ケニア共和国マシング県：吉田
- ⑫南アフリカ共和国ケープタウン市

第3部・ボランティア・旅行編

- ⑬アルーシャ、ダルエスサラーム（タンザニア連合共和国）：山城
- ⑭ウガンダ共和国カンバラ市：川瀬、西川

Part 1 Study abroad

- ①Protestant Institute of Arts and Social Science: PIASS (Huye, Rwanda)
- ②University of Zambia (Lusaka, Zambia)
- ③University of Zimbabwe (Harare, Zimbabwe)
- ④University of Pretoria, Johannesburg (South Africa)
- ⑤Dakar (Senegal)
- ⑥Antananarivo (Madagascar)
- ⑦Bujumbura (Bulundi)
- ⑧Eduardo Mondlane University (Maputo, Mozambique)
- ⑨University of Ghana, Accra; Northern Ghana (Ghana)
- ⑩Khartoum (Sudan)

Part 2 Internship

- ⑪Masingaprefecture (Kenya)
- ⑫Cape Town (South Africa)

Part 3 Teaching volunteer/ Tembea

- ⑬Arusha, Dar esSalaam (Tanzania)
- ⑭Kampala (Uganda)



地図 2: Japan

Map 2: 日本

地図中の都市名は、東京外国語大学と、英文編でアフリカからの留学生が訪問・滞在した都府県・都市の位置を示しています。

Land names in the map indicate localization of prefectures and cities, as well as TUFS campus, referred in English part of this booklet.

目次

Contents

はじめに／Preface	i
地図／Maps	v
I. 東京外国語大学からアフリカへ	
From TUFU to Africa	
和文編／Japanese Part	
1 留学編	
1.1. ルワンダ	
内田 歩「ルワンダで平和構築を学ぶ」	5
飯野真子「ルワンダ留学のたいへんざっくりとしたまとめ」	10
梅津知花「ルワンダ留学＋帰国後体験記 ～ジェノサイド和解とルワンダで会った人たち～」	16
深澤智子「With コロナのルワンダ留学記」	23
1.2. ザンビア・ジンバブエ・南アフリカ	
池田梨穂「アフリカで学ぶこと、働くこと～ザンビア留学とスーダン勤務～」	31
杉山翔洋「ジンバブエ体験記」	37
高山咲希「南アフリカ共和国・プレトリア大学留学体験記」	41
三原尚人「ヨハネスブルグの街角で構築したネットワークが世界中と繋がる」	48
1.3. 仏語圏への語学留学	
野間 武「セネガルでフランス語を学ぶ」	57
宮城 由「マダガスカル体験記」	63
1.4. フィールドワーク	
河野賢太「アフリカ最大の資源は天然資源ではなく・・・？ ～日本から最も離れた国・ブルンジで思ったこと～」	71
塩崎諒平「モザビ大冒険記」	76
井出有紀「書を捨てよ、村へ入ろう～フィールドワーク留学のすすめ～」	88
2 インターン編	
吉田菜摘「アフリカインターン体験談」	97
川口里紗「セネガル滞在記 ～よく働き、よく遊ぶ～」	102
田口暢亮「農業商社スタートアップ「Degas」での社会事業インターン」	110
鳥居紗衣「ケープタウンで働く～2年間の体験記～」	125
3 ボランティアと旅行編	
山城典子「タンザニアでのボランティア体験談 ～子どもたちに教えるという体験を通して得たもの～」	133

川瀬康太郎「アフリカ 5 カ国滞在記～ボランティアと旅の 7 カ月間～」	137
西川佑太「ウガンダ共和国でのボランティア・探究記」	153
II. 東京外国語大学から協定校へ、協定校から東京外国語大学へ	
From TUFU to Partner Universities, from Partner Universities to TUFU	
英文編/English Part	
1 University of Ghana <=> Tokyo University of Foreign Studies	
Report on My Study at Tokyo University of Foreign Studies	167
by Charles Acheampong Agyebeng	
Throw Away the Book, and Let's Enter the Village: Recommendation of Fieldwork during Studying Abroad	171
by Yuki Ide	
2 Protestant Institute of Arts and Social Sciences <=> Tokyo University of Foreign Studies	
Essay about My Stay in Japan	181
by Shukulu Murekatete	
Report on My Stay in Japan	185
by Elie Rodrigue Icishatse	
Essay on My Stay in Japan	189
by Octave Gahirwe Kabera	
My Stay in Japan	197
by Hélène Mikanda Alinethu	
My Study in Rwanda and after Returning Home: The Post-genocide Reconciliation and Some People I Met in Rwanda	201
by Chika Umetsu	
3 University of Pretoria <=> Tokyo University of Foreign Studies	
My Stay in Japan	211
by Wendy-Rose Govender	
A Network Built on a Johannesburg Street Corner Connecting to the World	213
by Naoto Mihara	
4 Tokyo University of Foreign Studies => University of Zambia, University of Zimbabwe and Eduardo Mondlane University	
Studying and Working in Africa: Studying in Zambia and Working in Sudan	221
by Riho Ikeda	
My Experience in Zimbabwe	228
by Shoyo Sugiyama	
Great Mozambique Adventure	232
by Ryohei Shiozaki	

I . 東京外国語大学からアフリカへ
From TUFS to Africa

和文編／ Japanese Part

1. 留学編

1.1. ルワンダ

ルワンダで平和構築を学ぶ

内田 歩

アフリカ地域研究専攻 2015 年度入学

1. はじめに

こんにちは、東京外国語大学国際社会学部アフリカ地域専攻 4 回生の内田歩です。私は、2017 年 9 月～2018 年 8 月まで、平和構築を勉強するためルワンダに留学していました。外大の授業では 2 年半アフリカについて学んできたものの、実際にはアフリカに行ったことがなかったため自分の目で見て確認したい、現地の学生たちと議論してみたいという思いが次第に強くなり、1 年間アフリカに住むことを決めました。今回はルワンダで経験したことを少しだけシェアさせていただきます。

2. ルワンダを選んだ理由

以前からルワンダのジェノサイド後の和解に関心を持っていたため、現地の学生たちと議論できる機会のあるルワンダの大学に行きたいと思ったのが一番の理由です。その他には、治安がとても良く日本人の先生が大学で教鞭をとっていたためアフリカ留学に反対していた家族を説得しやすかったこと、著しい変化を遂げているといわれるルワンダなら開発の現場も見ることができるといったことなどが理由として挙げられます。



写真 1：友人の家に続く道。毎日片道 2 時間かけて街まで歩いているそうです。

3. 奨学金について

私は「トビタテ!留学 JAPAN」(注 1) という、文部科学省と民間企業が連携して若者を支援

注 1：トビタテ！留学 JAPAN <https://www.tobitate.mext.go.jp>

している留学制度を利用しました。大学の成績などは関係なく、実現可能かつ面白みのある留学計画の提出と自分のやる気次第で採用してもらえるので、十分な額支援してもらえる奨学金制度を探している人にはおすすめです。

4. 大学での授業

2017年9月から2018年の8月までの約1年間、Protestant Institute of Arts and Social Sciences (PIASS) (注2)というルワンダの大学に在籍し、平和構築を学んでいました。

<PIASS 大学で履修できる授業の例>

- Negotiation and Mediation
- Reconciliation in Theory and Practice
- Source and Dynamics of Conflict in Africa
- Religion, a Source of Conflict and a Resource for Peace
- Psychosocial Trauma and Healing
- Peace and Conflict Sensitive Development
- Nonviolence in Theory and Practice
- Global governance and International Organizations など

特に印象に残っているのは「和解」(Reconciliation in Theory and Practice) についての授業です。それまで一緒に授業を受けてきて信頼関係が築けていたからこそできた、アフリカの学生たちとの本気・本音の議論はとても心に残っています(写真2)。何よりも、真剣に自分の国やアフリカの平和のために将来働きたい、という熱い思いをもって平和構築を学ぶ友人たちと出会えたことに感謝です。



写真2：授業の様子。ディスカッションが多く、ルワンダ人だけでなく、ブルンジ、コンゴ、南スーダン、タンザニアなどアフリカ諸国からの生徒がともに学びます。

注2：ピアス大学 (Protestant Institute of Arts and Social Sciences) <http://www.piass.ac.rw>

5. ボランティア

毎週水曜日の午前中に、小学校で英語の授業のお手伝いをしていました。私がお手伝いしていた小学校は比較的優秀な子たちが集まっています、授業はすべて英語で行われていました。ルワンダでは初等教育就学率が 90%を超えと言われていますが、田舎の学校に行くと子どもの数に対して教室や先生の数が足りなかったり、家庭の事情などで途中から学校に来ることができなくなったりしてしまう生徒がまだまだ多くいるのが現状です。それにしても、子どもがかわいいのはやっぱり世界共通です～（写真3）。



写真3：小学校の子どもたち。

週に一度、水曜日の午後には 14 人からなる女性グループと一緒に活動をしていました。ジェノサイドの被害者と、加害者を家族にもつ女性たちが生活収入の向上と和解・関係の再構築を目的に、ともに作業しているグループです（写真4）。アフリカの布を使ったブックカバーや自分たちが育てた花を使ったアクセサリーを日本で販売するために、毎週協力して作品を製作しています。1年間関わらせていただいて、最初の頃よりもだんだん女性たちの間にお互いを思いやる温かい雰囲気が出てきたことを実感し、とても嬉しかったです。和解のために活動を続ける女性たちから多くのことを学びました。



写真4：女性たちが手に持っているのがアフリカの布キタゲを使って作ったブックカバーです。

6. インターン

World Vision Rwanda で2ヶ月間インターンシップをさせていただきました。フィールドに行く機会が多く、本当に村の奥の奥まで訪ねて現地の人たちと交流したり、開発の現場を自分の目で見ることは貴重な経験でした。一方で、現地の人々が本当に必要なものを見極めることと、それをプロジェクトにして実施する難しさも目の当たりにしました。衝撃的で印象に残っているのは、貧困家庭の子どもたちに誕生日プレゼントのうさぎを配ったことです(写真5)。うさぎは繁殖させて売ったり(一羽300円くらい)、自分たちで食べたりします。



写真5: 誕生日プレゼントのうさぎと子どもたち。

7. 寮生活

留学生活が半分終わり、残りの半分でもっとアフリカの友人と仲良くなりたい、彼らのことを知りたいと思い、大学の学生寮に入ってみました。ルワンダ、ブルンジ、コンゴからきた女の子たちとくだらないことから真剣な議論までたくさんおしゃべりをして、ふざけて笑って、毎日米と豆を食べて、一緒にお祈りをして素敵な時間を過ごすことができました(写真6)。今までの人生の中で一番笑っていた時期な気がします。電気がたまにつかないのも、ダニと南京虫との戦いも、毎朝のバケツ一杯の水浴びも、今では全部懐かしくて楽しい思い出です。



写真 6: 寮の仲間たちと。

8. おわりに

千の丘を吹き抜ける風の匂い、友達と見上げた満天の空、突然泣き出した友人の声や、純粹に必死に生きる人々のきらきらした目、忘れられない瞬間をいまでもふと思い出します。ルワンダで学んだことを、これとこれを学んだ、と限定的に言語化するのは私にとってすごく難しいことなのですが、自分の目で見たこと肌で感じたこと、そういう感覚的なものやその時々心に起こった感情などを、特に大切に自分の中にとっておきたいと思っています。アフリカは、ルワンダは私にとってたくさん大切な人が生きている場所。何らかの形でこれからも関わっていきたいです。

このまま大学を卒業していいのかと漠然な不安を抱えている人、自分の目でアフリカをみたい人はとりあえず飛び込んでみることをおすすめします。

最後までお読みくださってありがとうございました！

ルワンダ留学のたいへんざっくりとしたまとめ

飯野 真子

アフリカ地域研究専攻 2016 年度入学

日本に帰国して、3ヶ月あまりが経ちました。ここ東京で送る大学生活が、ルワンダ渡航前に感じていたよりはるかにせわしく、余裕がないように感じています。帰国前まで、東京が恋しいとずっと考えていたのが不思議なほどです。

一年間東京の実家を離れて「留学生活」がしてみたい、というのは、大げさに聞こえるかもしれませんが、中学生の頃から思い描いていた夢でした。日常から遠く離れ、海外の価値観や文化に直に触れながら学ぶことにずっと憧れがありました。

残念ながら高校在学中の留学はかなわず、国際協力への興味と、とにかく留学に行きたいという思いから、東京外国語大学に進学しました。大学入学時から漠然と、先輩たちもやっついて楽しそうだから、一年間休学してアフリカに行くんだ、と思っていました。

夢が叶い留学を終え帰国した今、留学生活を振り返る余裕もないくらいのスピードで時が流れているように感じます。



写真1：フイエの山の上からの景色。「千の丘の国」と呼ばれるルワンダはどこに行っても緑豊かで美しい。

ルワンダ・フイエでの新生活は、新しいことばかりで1日1日がとても刺激的でした。フイエは、首都のキガリから車で3時間ほどのところにある小さな街です（わたしに言わせればとても小さな街ですが、キガリに次ぐ人口の多さを誇る、第二の都市とも呼ばれているようです・・・）。東京では、欲しいと思ったものは家から出ずともすぐに手に入る、美味しいおやつもそこらじゅうにあるといった生活を送っていたため、他の日本人留学生たちと話してみてもようやく、自分が超都会育ちでその生活をスタンダードと思うのはおかしい、と自覚

しました。

フイエの大きな星空は今でもよく恋しく思います。停電するともともと少ない町あかりが消えるので、とりわけ多く星が見え、それを見上げながら「都会の暮らしが好きだけど、田舎で暮らすっていうのもなかなか良いな・・・」といつも考えていました。



写真 2： フイエ街中の大聖堂付近の写真。

留学生活前半の 5 ヶ月間は、日本人留学生と二人暮らしをしていました。実家を離れて暮らしたことがない者同士、毎日片道 40 分歩いてマーケットと一緒に買い物に行き、一緒に試行錯誤しながらご飯を作って、「美味しいね美味しいね」と言いながら食べて、寝る直前までおもしろい時間を過ごし、共同生活ラスト二ヶ月は毎晩それぞれ下手なギターとウクレレを弾きながら好きに歌うという、振り返ると涙が出そうになるほど良い共同生活でした。生活しているうえでお互いいろいろ感じるころはありましたが（たぶん）、それでも振り返れば最高でした。



写真 3： フイエ街中のマーケットの写真。

食材や生活用品はここで、キニヤルワンダ語で値段交渉してから購入する。

また、その後帰国までの6ヶ月半ほどは大学付属の寮に入寮しました。狭すぎる生活空間(1部屋に3-4人でだいたい3-4畳くらい)で、アフリカ大陸各地から集結した皆(ルワンダ人2人、ブルンジ人2人、コンゴ人3人、マラウイ人1人、ナイジェリア人1人)と寝食をともにするというのは、何物にも変えがたい宝物のような経験でした。お互いを尊重しあいながらも、家族のように寄り添い合える、素敵な関係性の中で生活させてもらい本当に幸せでした(ごはんだけにはたいへん苦勞しましたが・・・)。寮を離れた今、同じ屋根の下で過ごした皆のことを考えると、わたしも皆との日々を忘れずに、笑顔で、大切な人を大切に想いながら頑張ろうと思います。



写真4: ルワンダ人の友人の家に招待された時に出してくれた家庭のお料理。



写真5: 留学生の皆が寮で日本人留学生のためのお別れパーティーを開いてくれた時の写真。

わたしは、派遣留学という形で Protestant Institute of Art and Social Sciences (PIASS) の平和紛争研究学科で約1年間学ばせていただきました(詳しくは、前年に留学していた内田歩さんの記事をご覧ください)。ルワンダでの学びについて、正直に言えば、留学先で平和構築を学ぶということについて、特にこだわりのようなものではありませんでした。しかし、1994年のルワンダジェノサイドについて勉強すればするほど、わたしにとって「平和構築を学ぶ」ということが大切な意味を持つようになりました。

隣人どうしが殺し殺され、諸々のプロセスを経て和解するというのは到底信じられないことです。もし自分の家族が皆殺しにされたら、加害者のことをゆるすことすらできないだろ

う、と何度も考えました。しかし信じられないとは言っても、ウムチョニャンザの女性たちとともに活動させていただいたことをはじめとして、まさにジェノサイドの加害者と被害者が和解のプロセスにあるのを目撃する機会が幾度か与えられました。

ウムチョニャンザとは、1994年のジェノサイド後の和解を目的に、加害者を家族に持つ女性と被害者側の遺族である女性たちが一緒に、アフリカの布でブックカバーやカバンを作ったり、お花を植えたりといった活動をしているグループです（こちらについても詳しくは内田歩さんの記事をご覧ください）。お互いにしっかりと向き合い、対話をかさね、ともに同じ方向へ向かって歩んでゆく、その姿を見て、たいへん勇気をもらいました。

ウムチョニャンザの女性たちとともに5月に参列させてもらった、ジェノサイドの Commemoration Ceremony（追悼式典）は特別でした。そこでようやくジェノサイドが現実であったことを痛々しいほどに感じ、ゆるし・和解の尊さを知りました。もちろん和解というプロセスにたどり着けているのは当事者の方々のごく一部でしょうが、和解の「可能性」を目の当たりにできたことで視野が大きく広がりました。



写真6: ウムチョニャンザの皆さんと、Commemoration Ceremony に参列させてもらった時の写真。

そもそもわたしがルワンダに興味を持ったきっかけは、デニ・ムクウェゲ医師の『女を修理する男』を観てコンゴ紛争及び DR コンゴとルワンダの関係性について勉強したことでした。その影響で、当初からルワンダについていちばん興味があったことは、1994年のジェノサイドが実際はフツ族とツチ族が双方向に殺戮し合った「ダブル・ジェノサイド」であったという説についてでした。

むろん「ダブル・ジェノサイド」という言葉がルワンダ国内で使用されるのは聞いたことはありませんし、残念ながら学生と個人的にこのことについて語り合うこともできませんでした（ぜひ話してみたかったです）。しかし授業内で学生の幾人かからジェノサイド・イデオロギー法（フツ族はジェノサイドの加害者でツチ族は被害者であり、それ以外の真実は存在しないと、RPF [ツチ族によって結成された旧反政府勢力であり現政権] の犯した戦争犯罪についての議論、批判を封じ込める法律）などについて貴重な意見を聞くことができたこと等はたいへん良い経験になりました。

また、課題として配布された Yuko Otake さんの *Unspeakability* についての論文[注 1]（政府勢力（ツチ族）がムサンゼでフツ族の大量虐殺を行い、それについて語ることを許されない人々についての論文）も衝撃的でとても印象深かったです。ジェノサイドから復興した奇跡の国、といえども、大きな課題が残されているということがもっと認知されても良いのではないのでしょうか。本当の意味で自由にものを言える国になる日が早く来ることを、心から願っています。



写真 7: 美しいキブ湖。対岸に見えるのはコンゴ民主共和国。

ルワンダでお世話になった佐々木和之先生ご夫妻、PIASS でともに学びともに生活した学生たち、先生方、ウムチョニャンザの女性たち、ピースインターナショナルの先生方と生徒たち、教会の皆さん、テイラーさんたち、そのほかいろいろな場面でわたしを支えてくださった方々のことを本当に恋しく思っています。

すぐ卒業してルワンダを離れてしまう学生などとまたいつ会えるかわからないのが辛い、とこぼしたところ、ある学生が「わたしたちは皆 *citizens of the world*（世界市民）だから大丈夫だ」と言ってくれました。ルワンダで築いたつながりを今後も必ず大切にして、地球上のどこかで頑張り続けている皆に、感謝の気持ちを忘れず、関わり続けていければと思います。

注 1: Otake, Y. (2019). Suffering of silenced people in northern Rwanda. *Social Science and Medicine* 222, 171-179.



写真 8: PIASS の講義棟の前で、平和紛争研究学科 1 年生の皆と。

ルワンダ留学＋帰国後体験記

～ジェノサイド和解とルワンダで会った人たち～

梅津 知花

西南ヨーロッパ地域専攻 2016 年度入学

1. はじめに

国際社会学部イタリア語科4年梅津知花です。2018年10月から2019年9月まで、ルワンダ共和国に留学していました。早いもので帰国して10カ月が経ちましたが、ふとした瞬間にルワンダを思い出します。アルバイト先で大量の食品の廃棄処理をすれば、街で会うたびに100ルワンダフラン（約10円）をせがんできた子供たちを思い出します。

また、コーヒーを飲めば、よく行っていたコーヒーショップの店員さんを、バナナやゆで卵を食べれば、朝ご飯を食べに行っていたキオスクのお姉さん（自己紹介していないのになぜか私の名前を知っていた）を思い出します（写真1）。この留学体験記を書くために、さらに色々なことを思い出していると、ルワンダのあの空気感が懐かしく、帰りたくなってきます。



写真1：フイエにあるコーヒーショップのカフェラテ。自分の名前を言ったことはないのに、ここの店員のお兄さんにもなぜか名前と呼ばれる。日本では、エチオピア産コーヒー豆が良く売られているが、たまにルワンダ産コーヒー豆が売られているのを見ると嬉しくなる。

私は、ゼミで平和構築を専攻し、武力紛争や武力を伴わないが問題となっている衝突が起こる原因や要因、そしてそれらを解決するにはどうしたらいいかなどを学んでいます。留学先にルワンダを選んだのは、ジェノサイドを経験し、国民間の和解が現在も進められているルワンダであれば、当事者に近い環境で平和構築を勉強できると考えたからです。

ルワンダでは、プロテスタント人文・社会科学大学（Protestant Institute of Arts and Social Sciences : PIASS）との交換留学制度を利用し、平和紛争学部で勉強しました（写真2）。その

他に、ジェノサイド後の和解のための活動を行っている現地 NGO でのインターンシップ、和解のための女性協働グループでのお手伝い、アフリカ布で制作したオーダーメイド服を日本で販売するソーシャルビジネスのスタッフとしての仕事なども行いました（写真3）。

その中でも特に和解に関して印象に残っているエピソードを紹介したいと思います。



写真2: Alternatives to Violence Project のワークショップ。暴力に頼らず紛争解決を図る能力を養う。平和紛争学部以外の学生も参加する。ここで得られる知識というよりも、このワークショップに参加したということ自体が、問題を平和的に解決しようという意識を育むのではないかと思う。



写真3: JICA の青年海外協力隊員さんが企画した原爆の展示会。他の学生を誘って訪問した。

2. 謝罪や和解をしたくてもできない

ルワンダでお世話になった佐々木和之先生（注1）ご夫妻が関わられているウムチョ・ニャンザ（キニャルワンダ語で「ウムチョ」は「光」、「ニャンザ」は活動地域名）という女性協働グループの活動に私も関わらせていただきました。ウムチョ・ニャンザは、ジェノサイドの被害者と、殺人や殺人幫助の罪で有罪が確定した加害者を夫に持つ女性から成るグループで、花の栽培・販売、ブックカバーや洋服、小物の製作を他のメンバーと協力して行うことで、現金収入と和解を目指しています（写真4）。



写真4: ウムチョ・ニャンザの女性たち。普段はとても和やかに仕事をしている。追悼式に参加した時は、そのいつもの穏やかさからは分からない悲しみが伝わってきて、私も辛かった。

この活動には、今までにルワンダに留学した学生も関わってきましたが、私の滞在中の活動はこれまでとは違う動きだったのではないかと思います。これまでは、女性たちがメインの活動が多かったと思いますが、私が滞在していた時は、刑務所に収容されている夫たちとの活動も始まりました（注2）。

数人の女性メンバーが、ウムチョ・ニャンザとして初めて刑務所を訪問し、収監されているメンバーの夫と話をしました。この貴重な機会に私も同行させていただきました。被害者側の方が刑務所を訪問することはそれまで一度もなかったようで、刑務所で働く人たちも驚いていたと聞きました。

その訪問で印象的だったのは、刑務所に収容されている方たちが、「自分の代わりに妻が和解活動に関わってくれてありがたい」「自分たち自身もきちんと謝罪をして和解をしたい」と

注1: 2005年からルワンダで現地NGOと協力し和解プロジェクトに関わっていらっしゃる。2011年にはPIASSの教員として平和紛争学部設立に携わり、現在も同大学で教鞭をとられている。

注2: 「ウムチョ・ニャンザ」プロジェクトの計画として、和解を女性たちの中で完結させるのではなく、いずれは和解の輪を彼女たちの子供たち、男性、そしてコミュニティに広げようとしている。子供たちを対象とした活動は2017年から始まった。一方で男性たちを対象とした活動は、女性や子供向けの活動との兼ね合いもあると思うが、刑期を終えてコミュニティに帰ってくる男性がこれから増加することを見据えて最近始まった。

おっしゃっていたことです。ウムチョ・ニャンザのように刑務所を訪問する団体はあまりないので、刑務所にいる限り和解のチャンスがないことを残念がっていました。

刑期中に何かチャンスがないだろうかと思う一方で、被害者の中には、加害者を見たくもないという方もいるかもしれません。和解の問題を考えると、双方の立場に立って、バランスをとることが想像以上に難しいものであると思いました。近くに当事者がいて思いが伝わってくるからこそ、意識して双方の意見を聞かないとどちらかに偏りそうだと感じました。

3. 加害者と被害者

私の留学中は、ウムチョ・ニャンザの女性たちの被害者・加害者認識が変わった時期でもあったと思います。彼女たちは、虐殺資料館への訪問を自分たちの意志で決め、実際に訪問しました。しかし、これがきっかけで体調を崩してしまった女性がいました。この方の夫は加害者として刑務所に収監されていました。

しかしながら、彼女の親戚にはツチもいて、ジェノサイド時に犠牲になった人がいたそうです。彼女は微妙な立場に立っていました。彼女が体調を崩したことをきっかけに、他のメンバーたちが、加害者や被害者への認識を変えました。

被害者側の女性は、「これまでは被害者である自分たちが語ったり、ケアを受けたりすることが多かったと思う。しかし、加害者側の人にも語りやケアが必要なのではないか。」とおっしゃっていました。私自身にとっては、ルワンダのジェノサイドが、関係者を加害者と被害者に容易に分けることができない問題であることを実感した出来事になりました。

加害者側として分類されていたとしても、親戚が犠牲になっているかもしれません。また、夫が刑務所に収監されていることで、女性が経済的・社会的・心理的負担を負っているかもしれない、そのような女性はある意味で被害者であるかもしれないと思うようになりました。

4. どうやって赦すの？

留学中は加害者サイドに関して気づくことが多かったのですが、帰国してから被害者側が「赦す」という行為がいかに難しいものであるのかを考えるようになりました。私は帰国後、ある友人との関係がうまくいかなくなりました。その人は謝ってくれましたが、なかなか快く赦すということができていません。

ジェノサイドの経験と私個人の経験はもちろんまったく異なるものですが、赦すということの難しさを実感し、ルワンダの人はどうして赦す気持ちになったのだろうかともた考えるようになりました。ルワンダで和解をした方たちのことを思い出しながら、少し時間はかかりますが、関係を修復できればいいと思っています。

5. 留学を一言で表すと…

ルワンダでの留学を一言で表すと「愛」です。ストレート過ぎて若干照れ臭い気もしますが、愛について考え、周りからの愛をとっても感じた時期でした（写真5）。現地 NGO の最初の研修でスタッフがおっしゃっていたのが、Love yourself(あなた自身を愛しなさい)でした。



写真5：家のオーナーのお手伝いさんカラマンティエとその子供シンティア。カラマンティエがシンティアを叱っている声や笑い声、お祈りをする声が壁越しに聞こえてきた。私が滞在中にウガンダに引っ越してしまった。新しい電話番号を知らないで、連絡をとることが難しい。シンティアは小学校に通い始めたのだろうか。カラマンティエは今も陽気な笑い声を響かせているのだろうか。

誰かの役に立ちたい、助けたい、和解をしたい、という気持ちがあっても、自分自身を大切にできなければ他の人を大切にすることもできない。当たり前のことのように、自分のことは二の次になってしまうことが多いので、この言葉を心に留めておきたいと思っています。

また、同じ時期に留学をした日本人学生、PIASSの他の学生、一緒にご飯を食べていた他のアフリカからの留学生、半年間同じ敷地で暮らしたオーナーとそのお手伝いさんと子供などからの愛を感じながら一年過ごすことができました（写真6；写真7）。



写真6：留学生コミュニティが開いてくれたフェアウェル・パーティー。留学後半は、昼と夜ご飯を一緒に食べていた。基本的に、米、豆、芋、キャベツ、キャッサバなどを食べていた。たまにお肉料理が出るときは、皆が平等に食べられるようにお肉を分けるミート・キーパーがいた。そして、いつもは食べ終わるとすぐ帰る人も、その日は余ったお肉をもらうために遅くまで残っていた。



写真7:日本人留学生。ルワンダや他のアフリカ諸国からの学生との関わりだけではなく、日本からの留学生との関わりも私にとっては大事なものだ。ルワンダで感じたことや日本の社会問題など様々なことについて語り合った。

今年に入って、新型コロナウイルス感染が拡大する中で、ルワンダで一緒に過ごした多くの学生から私や日本を心配するメッセージをもらいました。留学期間が終わっても、ルワンダに私を気遣う人がいて、私が逆に元気か尋ねたくなる友人たちがいるということはとても嬉しいことだと思いました。

6. 帰国後

私が帰国をするとすぐに、PIASS からオクターブとヘレンが交換留学生として日本にやってきました。特にヘレンとは、ご飯やお茶をしたり、買い物に行ったり頻繁に会っていました。正直、ルワンダ留学中は、ヘレンと二人で長く話したことはありませんでした。

しかし日本で話す機会が増え、ヘレンの家族や出身国のコンゴ民主共和国のこと、私が知らなかったPIASSでのアフリカ諸国からの留学生コミュニティの人間関係など、多くのことを話してくれました。私のヘレンに対する印象も、ルワンダで会っていた時と、日本で会っていた時では変わりました。

オクターブとヘレンと一緒にやりたかったことや行きたかったところがまだまだ残っているので、また、日本に帰ってきてほしいと思っています(写真8)。



写真 8: 2019-2020 年交換留学生として TUFSS に来ていたヘレン、私と同時期に留学していた飯野真子さんと高尾山登山。私の地元である山形にも一緒に行きたかったが、新型コロナウイルス感染拡大により断念。ヘレンとは色々な話をしたが、その中でも家族の話題が多かった。とても個性豊かな家族に私も会ってみたいので、ヘレンの故郷に行きたい。



写真 9: 連絡をすると「When will you come back to Rwanda? (いつルワンダに戻ってくるの?)」と必ず尋ねてくる友人レイチェル。できることならすぐにでも行って、イキヴグト(飲むヨーグルトのようなもの)を飲みながら話をしたい。

7. 最後に

連絡をするたびに、「いつルワンダに帰ってくるの?」と尋ねてくる友人がいます。これまでは「今年の夏にいくよ」と伝えていたのですが、新型コロナウイルスの感染拡大によって行くことができなくなり、とても残念です(写真 9)。

今は、「状況が改善したら行く」としか伝えられずにいます。具体的にいつ行くと伝えられるような日が早く来ることを願うばかりです。

With コロナのルワンダ留学記

深澤 智子

東南アジア第2地域専攻 2017年度入学

1. はじめに

皆さん、初めまして。国際社会学部タイ語専攻3年の深澤智子です。私は2019年10月からルワンダ共和国に留学していました（写真1）。

タイ語科出身の私がなぜルワンダに行ったのか、その理由は後ほど説明しますが、私はアフリカ留学という人生最大の挑戦に、人生最高のワクワク感を抱いていました。「これからどんな生活が待っているんだろう！」と期待を胸に飛び込んだルワンダ生活。しかしいざ蓋を開けてみると、新型コロナウイルスの影響により半年で帰国するという誰1人として想像していなかった結末に終わりました。

これまで多くの先輩方がルワンダ留学を経験されましたが、私の場合はコロナ禍での留学ということで今までとは少し違うものでした。そこで本稿では大学での学びやボランティア活動についての内容は割愛し（詳しくは内田歩さん、飯野真子さん、梅津知花さんの体験記をご覧ください）、コロナ禍でどのような生活を送っていたのか、そして留学を通じて何を感じたのかについてお話しさせていただきたいと思います。



写真1：別名「千の丘の国」とも呼ばれるルワンダは、緑豊かで長閑な国です。

2. ルワンダを選んだ理由

本題に入る前に、私がなぜルワンダに留学したのかについて簡単に説明させていただきたいと思います。

留学先を決めるにあたり、私には3つのやりたいことがありました。それは、①紛争につ

いて学びたい、②国際協力に従事したい、そして③アフリカに行ってみたい、の3つでした。

これはどこで実現できるのかを留学支援センターの方に相談したところ、PIASS(Protestant Institute of Arts and Social Sciences：プロテスタント人文社会科学大学)を勧めていただいたのがルワンダとの出会いでした。その後外大で開かれたPIASS 留学の座談会に参加し、実際に留学された先輩方から話を聞いて「ここだ！」と留学を決意しました。

3. コロナ禍でのルワンダ生活

10月にルワンダへ降り立ち、そこから3ヶ月間は本当に充実した生活を送っていました。PIASSでの平和構築の学びやニャンザでのボランティア、休日には友人とコーヒーショップに行ったりキテンゲ（アフリカの伝統的な布）探しに出かけたり。まさか年末に偶然見かけた「中国で原因不明の肺炎症状相次ぐ」というニュースがここまで影響を及ぼすとは、当時は微塵も想像していませんでした。

ルワンダで新型コロナに関連する動きがあったのは、2020年3月に入ってからでした。公共施設やマーケットの入り口に簡易的な手洗い場が設置され、中に入る際に必ず手を洗いました。挨拶も握手やハグから肘タッチに変わり、日常が少しずつ変わっていく感じがしました。その後、3月14日に国内で初の感染者が確認されてから事態は急変します。

2日後に大学が休校となり、20日に空港閉鎖、22日からロックダウンと次から次へと規制がかかり、気付いたら外を自由に歩けない生活となっていました。食料品や日用品の買い出しは許可されていましたが、少人数での移動に制限され、街中には銃を携帯した警察官が見張っているなど非常に重苦しい雰囲気でした（写真2）。



写真2：ロックダウン中の大通り。普段は車や人が行き交う賑やかな場所です。

当時日本人留学生は私を含め5人いましたが、元々3月に帰国予定だった学生は空港閉鎖当日に滑り込みギリギリで帰国し（あの時は本当にドタバタでした...）、その他4人は全員ルワンダに残ることを決めました。というのも、空港閉鎖の通達があつてから実際に閉鎖する

までに2日しか猶予がなかったこと、そして空港閉鎖期間が1ヶ月と指定されていたのでその後どうにかなるのではないかと思っていたからです。しかしその後感染者数が拡大し、何日も籠城生活を送る中で「本当にこのままで大丈夫なのか」と徐々に不安を抱くようになりました。

最終的に私が帰国の決意をしたのは4月10日でした。理由として、大学の授業やインターン活動の再開に全く目処が立たず、自分自身が今の状況に大きな不安を感じたこと、そして「トビタテ！留学 JAPAN」(注1)という留学制度からの奨学金の給付が中止されてしまい、経済的に留学の継続が厳しくなったことがあります。その間も空港は閉鎖されていましたが、アフリカ各国の日本大使館職員の方々が臨時便の手配にご尽力くださり、最終的に4月18日に帰国の途につきました(写真3)。



写真3：ソーシャルディスタンスに気をつけながら手洗いの順番を待つ人々。

4. 帰国後の留学生活

無念の帰国となったものの、日本でもオンラインを通じてPIASSの授業を受けることができました。オンライン授業というと日本では多くの大学がZoomを使用していると思います。しかしPIASSではZoomではなく、WhatsAppというチャットアプリ(いわゆるLINEのようなもの)を使って授業を行なっていました。

「LINEでどうやって授業するの?」と思われる方もいらっしゃると思いますが、「百聞は一見にしかず」ということで当時の授業の様子をお見せしたいと思います。

先生がまず授業の資料を写真で送り(写真4)、音声機能で説明を行なった後にチャット形式でディスカッションを行う(写真5)という流れで行っていました。

映像による授業とは違い、「文字を打つタイムラグが生じる」「周りの生徒の様子が見えない」「議論が白熱すると収拾がつかなくなる」など様々な困難はありましたが、データ通信量の負担が少なかったり、文字に起こすことでいつでも振り返ることができたりしたという点ではチャットの方が学びやすかったと思います。

注1：「トビタテ！留学 JAPAN」 URL: <https://tobitate.mext.go.jp>

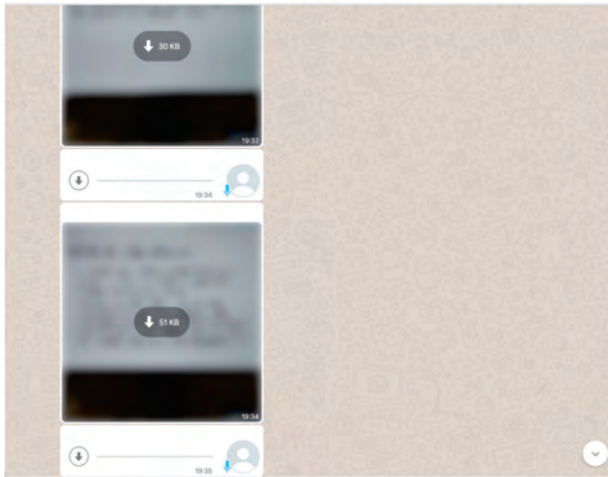


写真 4: まずは先生がボイスメッセージで資料内容の確認をします。

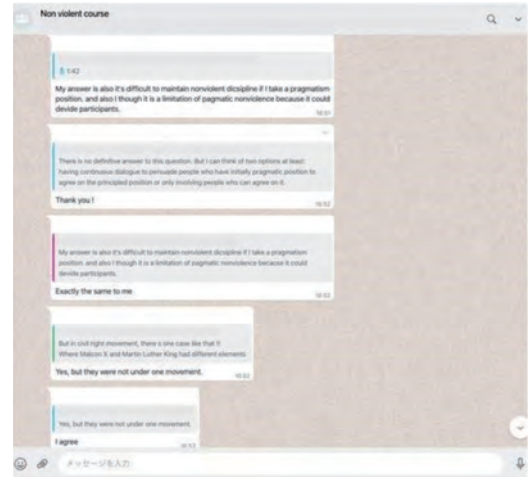


写真 5: その後、このようにチャットでディスカッションを行います。ちなみにこれは非暴力運動についての授業でした。

様々な機能を駆使してグループワークをしたりプレゼンテーションをしたりと、試行錯誤を重ねながら皆で授業を作っていく過程はとても面白く、貴重な経験でした。そして何より、帰国後も現地の学生と交流できる機会を持てたということが本当に嬉しかったです。

5. 留学を通じて考えたこと

周りからよく「半年での帰国なんて残念だったね」と言われますが、私はむしろ半年だけでも留学できて本当に良かったと思っています。もし留学時期が1年遅かったら、と思うとこの半年間の思い出を噛みしめずにはられません。とはいえ、これだけ半年間が充実していたのなら残りの半年間はまだ楽しかったらうな、と考えると少なからずやるせない気持ちにもなります。

そこで最後に私が半年間の留学で得た学びについて、特に印象的だったエピソードを2つシェアしたいと思います。

①ある時、日本に留学経験のあるブルンジ出身の学生が、日本で経験した出来事について次のように語ってくれました。

「電車に乗っていた時に突然電車が止まった。僕は何が起こったのかわからなくて周りに聞いてみた。すると人が線路に飛び込んで亡くなったって知ったんだ。自分は人が自ら命を絶ったということにショックでたまらなかったけど、それよりもショックだったのは、周りの人が時間を気にしたり上司に電話したり、中には自殺した人に怒っている人もいて、誰1人として自殺した人のことを心配していなかったことだ。」

1つの社会に浸かっていると、そこでの出来事がいつしか疑いようのない当たり前になってしまうように思います。決してそれらに正しいや間違いといった明確な答えがあるわけではありませんが、その中でも絶対に忘れてはいけないこと、見逃してはいけないことというのは少なからずあるのではないのでしょうか。彼の言葉は、私にそのことを教えて

くれました。これからは考えることを放棄せず、当たり前に縛られることなく、様々な世界に身をおきながら自分自身について振り返ることを忘れずに生きていきたいと思います。

②PIASS では様々な授業を受けましたが、その中で最も印象に残っている授業が「和解」の授業です。

授業の最終日、ジェノサイドを経験された1人の女性のご自身の体験について話をしてくれました。その女性は父親がジェノサイドの加害者であったため周囲の人から疎外され、虐げられ、後ろ指を指されながら生きてきたそうです。想像を絶する過酷な日々を過ごしてきた彼女が、最後に私たちに向けてこう言いました。

「Reconciliation is possible. (和解は可能である。)」

この言葉を聞いたとき、私は救われた気持ちになりました。日々ニュースで国や人が永遠に互いを傷つけ合う姿を見ながら「敵対する人たちがわかり合うなんて絶対に不可能だ」と思っていたからです。最初から和解に対する諦めが強かったため、和解の術を学んでもどこか懐疑的でした。しかし彼女が紡いだこの言葉は私の心に深く響きました。「人は必ず和解できる」という、本当は信じたかったことを「信じて大丈夫だ」と教えてくれたからです。

「和解は可能である。」

この言葉を胸に、平和を信じ、和解を信じながら今後も学びを続けていきたいと思います。

6. 最後に

留学を通じて得たものは幾つもありますが、その中でもルワンダで出会った人々とのつながりは今後も一生大切にしていきたい財産となりました。彼らは現地においてマイノリティである私たちを温かく受け入れ、気にかけて、そして大切にしてくれました。中には帰国の際に日本語でメッセージを送ってくれたり、私の両親に手紙を書ってくれたりする友人もいました。人との関係が希薄になりやすい現代にこれほど温かい人たちに出会えたことは、一生忘れることのできない思い出となりました(写真6)。

最後に、日本人留学生を家族のように迎え、支えてくださった佐々木先生ご夫妻、たわいもない話から深い話まで多くのことを語り合った日本人留学生、帰国した今でも「元気？」と連絡をくれ、気にかけてくれる PIASS の友人、この留学を通じて出会った全ての方々にこの場をお借りして深く感謝申し上げます(写真7)。

この状況が落ち着き、人々が自由に世界を行き来できるようになったら再び必ずルワンダを訪れ、半年間で叶わなかった思い出をたくさん作ってきたいと思います。



写真6：日本食パーティを開いた際、皆におにぎり作りを体験してもらいました。



写真7：帰国直前の1枚。彼らともう1度ルワンダで会えることを願っています。

1.2. ザンビア・ジンバブエ・南アフリカ

アフリカで学ぶこと、働くこと ～ザンビア留学とスーダン勤務～

池田 梨穂

アフリカ地域専攻 2014 年度入学

皆さんこんにちは。アフリカ地域専攻 4 年の池田梨穂と申します。2014 年入学で、先日ケープタウンでの素敵な生活について紹介してくれた鳥居紗衣（本冊子 125 頁）さんと同期入学です。

今回はこの場をお借りして私が留学と勤務で経験した 2 度のアフリカでの生活を、比較体験記という形で執筆させていただきます。アフリカに行ったことのない方、興味はあるけどなかなか一歩を踏み出せない方、これからの進路を考え中の方、皆さんに楽しんで読んでいただきご参考にしていただけますと幸いです。

【目次】

1. 2 度のアフリカ体験
2. 言語・宗教・文化
3. 留学生として・大使館職員として
4. 平和なザンビア・激動のスーダン
5. 振り返って

1. 2 度のアフリカ体験

はじめに、私のアフリカ経験について、いつ、どこで、どのような経緯で、どんな身分として過ごしたのかをご説明したいと思います。

私にとって最初のアフリカ生活は、3 年次秋の 2016 年 11 月から 2017 年 9 月までの約 10 ヶ月間のザンビア留学で幕を開けました。「アフリカに留学するなんてきっとすごい動機があるのだろうな」と思われがちですが、私の場合は、「せっかくアフリカについて学ぶなら本場だろう！」という安直な考えと、ザンビアに留学した先輩の話を聞いて本当に楽しそうだったから、という単純な理由だけでザンビアを選んだのを覚えています。

案の定最高に楽しいザンビアライフを終えた私が 2 度目のアフリカ生活の舞台として選んだ国は、スーダンでした（図 1）。4 年次秋の 2018 年 9 月から休学して、2 年間の契約のもと、鳥居さんと同じ在外公館派遣員（注 1）として現在も在スーダン日本国大使館にて勤務しています。派遣員制度についてはザンビア時代に出会った東京外大 OG の派遣員経験者の方から聞いて知り、学生のうちに実務経験が積めることのメリットの大きさを感じて応募を決めました。その中でスーダンを選んだ理由は、アフリカ文化とアラブ文化のちょうど交差点に位置し、幾度もの紛争を経験してきたこの国の文化と歴史に興味を持ち、深く知りたいと感じたからです。

注 1：外務省在外公館派遣員は、国際交流サービス協会（社）の職員として世界各地の日本大使館等に派遣



図1：ザンビアとスーダンの位置

2. 言語・宗教・文化

つぎに、ザンビアとスーダン、似ているようで全く異なるこの2国の言語や宗教、文化などの基本的な情報をご紹介します。

まずはザンビアから。1964年にイギリスから独立したザンビアの公用語は英語で、特に私の住んでいた首都ルサカではほとんどのザンビア人が英語を話せます。滞在序盤は彼ら特有のアフリカ訛りの英語への適応に一苦労しましたが、慣れてしまえばこちらのものです。学校教育も英語で行われ、私の留学先のザンビア大学（注2）でも全ての授業が英語によるものでした。加えてザンビアには70以上もの部族が存在し、そのそれぞれに独自のローカル言語があります。ザンビア人同士の会話によく使われる言語は英語ではなく、これらのローカル言語の中でも主要なニャンジャ語、ベンバ語、トンガ語などです。旧宗主国のイギリスの影響で、国民の大多数がキリスト教で、日曜日はみんなミサに行きます。首都ルサカは比較的発展が進んでおり、大きなショッピングモールが多数存在し、南アフリカ資本のチェーンのスーパーやアパレルショップがたくさん出店しています。街全体の標高が高いため気候も比較的穏やかで、当時の私のようなアフリカ初心者にとってはとても過ごしやすくオススメの都市です（図2）。



図2：ザンビア料理。白トウモロコシの粉をお湯で練って蒸したシマと付け合わせ。絶品。

され、事務補佐を行うポジションのこと。詳細は、国際交流サービス協会のウェブサイトを参照：
<http://www.ihcsa.or.jp/japanese/zaigaikoukan/hakenin-01/>

注2：ザンビア大学（University of Zambia）は、ザンビア共和国の国立大学。首都ルサカにある。東京外国語大学とは、交換留学を含む協力協定を結んでいる。公式サイト（英語）：<https://www.unza.zm/>

つぎにスーダン。独立は 1956 年とアフリカ諸国の中でも早く、イギリスからの独立だったもののそれ以前にエジプトの支配を受けていた影響で公用語はアラビア語、主な宗教もイスラム教です。彼らは 1 日に 5 回、聖地メッカの方角に向かって礼拝をします。礼拝の度に礼拝用の音声（コーランの音読）が大量で街に放送され、1 日の最初の礼拝は午前 4 時頃から始まります。最初のうちは毎日放送



図 3：スーダンの自宅からの風景。

に起こされていましたが、これも慣れてしまえば爆音の中でも眠り通すことができます（図 3）。また、イスラム教国特有の金曜、土曜が休みのカレンダーに慣れるのも大変で、慣れないうちは、木曜の終業後に「また来週」という台詞を聞く度に思いがけない幸福感に浸っていました。もちろんその分日曜に働くわけですが…。そして、イスラム教特有の文化といえばやはり、ラマダン（断食）です。イスラム暦と月の満ち欠けによって毎年日程が決まるのですが、今年は 5 月頭から 6 月頭の 30 日間でした。この期間は、日の出から日の入りまでの時間、水を含む一切を口にすることが許されません。私も挑戦してみましたが、見事に 1 日も我慢できず断念…。

3. 留学生として／大使館職員として

このように、一言で「アフリカ」と言っても、ザンビアとスーダンでの生活は言語や宗教、文化などにおいて全く異なる体験となりました。そして次に、私の「留学生としての」ザンビア生活、「大使館職員としての」スーダン生活の経験をお話したいと思います。



図 4：ザンビアでの青年海外協力隊の方の任地の小学校訪問。みんなカメラ大好き。圧がすごい。

ザンビア大学では開発学コースに所属し、ザンビアを中心とするアフリカにおける様々な分野の開発・発展の現状、その過程や問題点などを学びました。このような大学内での勉強ももちろん興味深かったのですが、私のザンビア留学の中で最も楽しく印象に残った経験は、大学外での日々でした。学生ストにより大学が閉鎖される期間やタームブレイク（学期の中間休暇）など、授業のない平日の日中を有意義に使うことができるのは、留学生の特権で最大のメリットだと考えます。仲良くなった青年海外協力隊の隊員の方々のいろんな任地を訪問して活動を見学したり（図4）、NGOの方々のフィールドワークにお手伝いとして参加したりと（図5）、現地で暮らす日本人が担う国際協力の最前線の現場をこの目で見て、肌で感じることができたこの経験は、その後の私にとってかけがえのないものとなりました。

この留学を通して、国連機関、大使館、政府系組織、民間企業、NGOなど、様々なバックグラウンドを持つ在留邦人の方々と知り合いお話を聞くことで、国際協力の形の多様性を感じ、自分のやりたいことや将来の進路などを考える上で非常に有意義な時間でした。生活面では常に断水と停電が日常茶飯事でしたが、この経験もサバイバル能力を培う機会となりました。今となっては世界中どこでも生きてゆけるという自信があります。



図5：ザンビアで活動する日本のNGOの5歳未満児検診にて、子供の体重をはかる現地ボランティア。乗せるのではなく吊るすスタイル。

スーダンでの主な仕事内容は、先日の鳥居さんの記事にあった通り出張者の便宜供与（航空券、ホテル、配車手配など）で、それに加えて会計補佐、イベント補佐、そしてその他細々とした庶務など多岐にわたる業務を担当しています。派遣員の仕事は外交の最前線を担う訳ではなく裏方で大使館の縁の下の力持ちのような存在ですが、だからこそ他の大使館職員が滞りなく仕事を進められた際やイベント等が成功した際の達成感はひとしおでした（図6）。この仕事を通して社会人として必要なビジネススキルはもちろんのこと、仕事の楽しさややりがいを感じることができています。また、平日の夜と休日は買い出しをしたり友達と過ごしたり趣味に費やしたりと、充実した時間を過ごしています。



図6：大使館の現地職員たちとの一枚。日本人職員12名に対し現地職員は25名。他の公館と比較しても多かった。

4. 平和なザンビア／激動のスーダン

アフリカを目指す皆さんにとっておそらく一番の懸念事項が現地の治安や情勢ではないかと思います。この観点ではザンビアとスーダンはまさに正反対の状況で、特にスーダンでの政変を現地でこの目で見ることができたのは大変貴重な機会だったと感じています。ザンビアは独立以降紛争などを1度も経験しておらず、国民も平和を愛しみな穏やかな印象を受けました（図7）。外務省の渡航危険度はアンゴラとコンゴ民主共和国との国境付近を除いて全土で外務省の海外安全情報で危険レベル「レベル1」となっており、通常の海外旅行において気をつけるべき事項（スリや置き引きに注意、夜間の一人歩きをしない等）に注意しておけば良い程度かと思います。



図7：チーム・ジャパン対チーム・ザンビアの野球大会。スコアラーとして参加。

一方、私が赴任してからのスーダンは歴史に残る激動の時間を経験しました。約30年続いたバシル元大統領の独裁が民衆のデモにより打倒されたのです。ハイパーインフレーションの物価高騰を受けて昨年（2018年）12月19日にアトバラという地方都市から反政府デモ

が拡散し、やがて軍を味方につけた彼らはずいに今年（2019年）4月6日、バシール元大統領を退陣に追い込みクーデターを成功させました。しかし民政移管を望む民衆と、クーデター後に発足した軍暫定評議会との交渉は簡単には合意に至りません。そして6月3日、軍本部前で座り込みデモを行っていた民衆に対し民兵たちが実弾を用いて発砲し、わずか数日間で100名以上が亡くなるという最悪の事態に発展しました。この時点で外務省の渡航危険度が全土で「レベル3」に上がり、JICA職員をはじめとした在留邦人の多くが国外退避となりました。実は私もこのタイミングで退避を余儀なくされ、現在は日本で状況の好転を待っているところです。ここ半年余りのスーダンの政変は今後の歴史に確実に刻まれ、私もその一部始終を目撃した一人として外交団という一歩引いた立場から、見たことや感じたことなどを発信していかなければならないと思っています（図8）。



図8：ナイル川クルーズの際に撮影。白ナイルと青ナイルの合流点を見ることができる。

5. 振り返って

ここまで私の2度のアフリカ体験をありのままに綴ってきましたが、留学と仕事のいずれかでアフリカを経験するのが良い！という結論を出したい訳ではありません。留学生なら自由に時間を使える一方で主体性や積極性が試され、仕事ならスキルを獲得でき外国組織の一員という俯瞰的な視点から国を見渡せる一方で時間的制約があります。皆さんがどのような経験を積みたいか、どのような能力を培いたいかによって答えは変わります。ただ一つ、「アフリカって面白い！！」と感じていただければとても嬉しいです（図9）。

末筆ながら、以上をもって私のアフリカ体験記とさせていただきます。ありがとうございました！

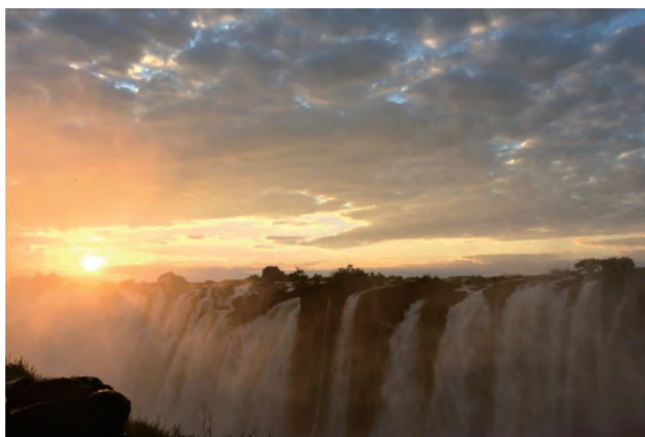


図9：ザンビアの世界遺産、ヴィクトリアの滝。
広大な自然に終始圧倒されっぱなし！

ジンバブエ体験記

杉山 翔洋

アフリカ地域専攻 2015 年度入学

1. はじめに

はじめまして。私は東京外国語大学の国際社会学部、アフリカ地域専攻 4 年に所属しております、杉山翔洋と申します。私は 3 年次課程の修了後の 2 月から 12 月までの間、大学の休学制度を利用してジンバブエ大学(University of Zimbabwe)に留学していました。ジンバブエに関する情報、特に留学に纏わる色々は英文・日文を問わずあまり出回っておりませんので、何かの一助になればと思い筆を取らせて頂きました。アフリカへの留学に興味がある方、またジンバブエの諸事情に関心がある方は、大変短いですが最後までお付き合いいただくと幸いです。

2. ジンバブエについて

少々の私見を交えながらお話しします。先の 2017 年に権力の座からロバート・ムガベ大統領を追放したジンバブエは、かなりのいざこざがありつつも、2018 年の総選挙の後にエマニュエル・ムナガグワ氏を大統領とする新たな体制へと移行しました。選挙前に暗殺未遂があったりまた選挙直後のデモで死人が出たりと色々ごたごたはありましたが、私がジンバブエを去る頃(2018 年 12 月)には、一応ではありますが政治的な落ち着きが戻りつつあるように思いました。

ジンバブエといえばハイパーインフレ(写真 1)を連想する方も多いのではないのでしょうか。私が留学中していた際、ジンバブエは貨幣に米ドルと代理通貨(ボンドノート、エコキャッシュと呼ばれるものです)を用いて各種の取引を行っておりまして、ほぼ問題なく日々の買い物が出来ました。しかしながらまだ経済は安定しているとは言い難く(これを書いている 2019 年 1 月ではガソリンをはじめとして殆どの物価が高騰しています)、状況も流動的ですので、注意をされた方が良いかと思えます。



写真 1: 2008 年当時に使用されていた 10 兆ジンバブエドル。勿論現在は使用できない。

また、個人的に特筆すべきジンバブエの点としては、治安の良さが挙げられると思います。ハラレの市街（写真2）は（推奨はしませんが）夜に出歩いても全く問題ないというレベルですし、また何か困ったことがあっても周囲の人に聞けばすぐに助けてもらえます。完全な無警戒で行くべきだとは思いませんが、私自身は留学期間中に身の危険を感じたことは一切ありませんでした。



写真2：ハラレ市街の写真。9月に撮影したので、ジャカラングの花が咲いている。

3. ジンバブエ大学について

あまり、ジンバブエ大学の情報がインターネット上に無いので少々言及をしておきます。ジンバブエ大学（University of Zimbabwe）は、その名が示す通りジンバブエ最大の大学であり、文理問わずほぼ全ての学部を網羅しているマンモス校です。寮の一部の機材やWifiなどには少々難度がありますが、それ以外の設備はほぼ全て揃っており（特にスポーツ施設が充実しておりバスケットやサッカーコート、陸上トラック、果てには武道場やプールまであります）、特に留学中に不自由することはありませんでした。中でも大学図書館は圧巻の一言で、ローデシア時代の公的記録文書や民族誌、人口統計資料などの極めて貴重な文献が豊富に揃っていたため、資料を探す際には非常な助けになりました。

アジア系の留学生は学部レベルでは全くおらず、大学院でも片手で数えるほどといった程度でした。逆にアフリカの他地域から来ている留学生はそれなりに多く、レソトやモザンビーク、南スーダンからの学生が医療系の学部によく在籍していました。ですので、留学生同士で会って話すまたは勉強するといった機会は、自分から探さない限りは殆ど無いと思います。

4. 留学準備

そこまで特殊なことはしておらず、必要な携帯品が全て揃ったのが出発の2週間前であったように記憶しています。ただ、各種の予防接種は留学に行く一年前（確か、5月辺りだったような気がします）から打つようにしていました。持って行って良かったものとしては、電気ポット、折り紙、コネクター、そしてインスタント食品。反対に、持って行かずに苦労し

たものには湯沸かし棒があります。というのも、ジンバブエでは水道からお湯がまず出ないため、水を予めバケツに汲んでから各種の機材で温める必要があるからです。一応現地で購入することも出来ますが、余力があれば持って行った方が良いでしょう。

また、これら個人での準備とは少し位相の違う話にはなりますが、学生ビザの取得はかなり注意を払って行うべきだと思います。学生ビザの確保にあたって、私はジンバブエの出入国管理局の公式ホームページのビザ取得要項に則って書類を揃えたのですが、現地の出入国管理局では要項に記載されていない書類（犯罪経歴証明書）を要求され、面食らったことがありました。予め在ジンバブエ日本大使館に連絡を取るなどをして、細心の注意を払って進めるべきだと思います。

5. 留学中の生活

基本的には大学の寮で生活をしていました。2月から5月、8月から11月の間に講義を受け、それ以外の長期休暇期間中には近隣諸国（私の場合はルワンダとモザンビーク、少しではありますが南アとザンビアに行きました）への旅行に行ったり、ジンバブエ大学の友人の家にホームステイしたり（写真 3A, 3B）として過ごしていました。



写真 3A: ホームステイ先の風景その 1。



写真 3B: ホームステイ先の風景その 2。

ジンバブエ大学では、社会学・心理学・人類学・アフリカ思想・社会調査法などを中心に勉強していました。授業はどれもそれなりに難しかったのですが、特に後者二つの難易度がかなり高く、学期末の試験ではかなり苦労しながら英文の論文と向き合っていました。年間を通して12の講義を受けたのですが、中でも抜きんでて印象に残っているのはアフリカ思想の講義です。「アフリカの伝統哲学は、「世の中の全てを理解することは絶対に出来ない」という前提から始まるんだ。「無知を滅ぼす」前提から始まる西洋式の思考がいかに間違っているか、分かるだろう？」と講義して下さった先生の言葉は、私の中で鮮明に焼き付いています。

大学の講義は午前中や午後早くに終わる日が結構あり、また土日もないので、慣れてくれば結構な空き時間が出来ます。私はこれらの時間を使ってハラレの市街を散歩したり、大学のテコンドークラブの練習に参加したり、地元のワイヤー・アーティスト（写真 4）に弟子入りして針金細工を教してもらったりしたりと過ごしていました。他の学生もこれら空き時間

を使ってスポーツをしたり酒を飲みに行ったりと各々青春を謳歌していましたので、極端に忙しい大学であるという訳ではないと思います。



写真 4: ワイヤアーティストの師匠と。

6. 終わりに

街の酒場で友人と交わしたビール。夏の熱気の中大講堂で行われた人類学の講義。現地で教わった針金細工の技術やアフリカ思想。そして、ジンバブエで語り合った人々が時折見せる、気高さと優しさ。その全てが、経験や思い出として私と共にあります。地理的条件や政治的情勢を考慮するならば、ジンバブエは決して手放しに勧められるような留学先ではありません。ですが、それらの諸条件を全て顧みても、私にとってのジンバブエ留学は非常に良い糧になったと考えています。決して大手を振って勧める訳には行きませんが、それでもジンバブエに興味がある方は、一度留学先として検討してみても、あるいは旅行先として足を運んでみてはいかがでしょうか。きっと何か得られるものがある筈だと、私は信じています。

南アフリカ共和国・プレトリア大学留学体験記

高山 咲希
アフリカ地域専攻 2016 年度入学

【目次】

1. はじめに
2. 南アフリカ共和国プレトリアに住む
3. 留学中の生活
4. プレトリアに留学してよかったこと
5. プレトリアに留学してだめだったこと
6. ビザ取得について
7. 後輩の皆さんへ
8. おわりに

1. はじめに

はじめまして。私はアフリカ地域専攻 3 年（2016 年度入学）の高山咲希と申します。3 年の秋学期に派遣留学の制度を利用して南アフリカ共和国のプレトリア大学に留学してきましたので、その体験をここに書かせていただきます。興味がある方はお付き合いいただけると嬉しいです！

2. 南アフリカ共和国プレトリアに住む

最初に、南アフリカという国とプレトリア大学について簡単にお話しします。ここからは、正確なデータを使うよりは私の肌感覚でお伝えすることをご了承ください。

まず、南アフリカはサブサハラアフリカの中で一番発展している国（写真 1）ということもあり、便利さ（スーパーが近くにある、お湯シャワーが出る）という点で基本的に苦労することはなかったというのが雑感としてあります。しかし、アパルトヘイト影響下から脱却したとは言いきれない状態の南アフリカ社会では、経済格差が大きく、人口の 1 パーセントが税収の 60 パーセントを払っているとも言われています。雇用率が低いのもあり、路上での携帯電話を狙った犯行をはじめとする犯罪が多く起こる状況で、一人で歩かないほうがいいと言われるほど治安が悪いのも事実です。私は無事でしたが、友達は半分くらいの確率で携帯電話を盗まれたり、強盗にあって貴重品を奪われたりしていました。ただ、気を付けたほうが良い時間や場所をわきまえて、慣れてきた頃にも油断せずに生活することができればそんなに心配することはないと思います。



写真 1: ヨハネスブルグ アフリカで一番高い建物 Carlton Centre から。

3. 留学中の生活

まずは 1 学期の大まかなスケジュールについて説明します。7 月中旬に学期 (Semester 2) が始まると 10 月末まで授業、11 月から 12 月初めまでがテスト・追試期間という感じでした。正直外大生からするとすごく長く感じましたね。慰め的に 9 月末から 10 月初めまで 10 日間のミッドタームブレイクがありました！また、National Women's Day (8 月 9 日) や Heritage Day (9 月 24 日)、大学生だけの祝日 Spring Day (9 月 26 日) などの祝日もあり、当たり前ですが日本と違うので興味深かったです。

授業は 1 コマ 50 分で、1 コースにつき講義が週 2-3 コマ、チュートリアルが 1 コマというのが普遍的な構成でした。何よりも衝撃的だったのは授業が朝の 7:30 から始まることでした。私がとっていた社会学の授業は、水曜日が朝 7:30-8:20 という時間だったので、火曜日は 10 時くらいに寝ていました (笑)。

私は 2 つのモジュールを受けていました。1 つは社会学で、もう 1 つは都市構造についてでした。2 つともセメスターを通して行われるものでしたが、授業によっては 1 クォーターで終わるものもあったみたいです。(1 つのセメスターに 2 つのクォーターが入っているという構成でした。) 私はせっかく南アフリカまで行くんだから南アフリカっぽい授業を取ろうと思ってこの 2 つを選びました。社会学は人種、階級、ジェンダーから南アフリカ社会を勉強するような授業でした。中でも印象的だったのはチュートリアルのクラスで、人種、階級、ジェンダーの要素がどのように自分の人生における機会を左右してきたかという作文を書いたことで、日本にいたら考えもしなかった視点 (特に人種) から自分の人生を振り返る機会になりました。都市構造の授業では、南アフリカに限らず世界の都市の地理的考察をしました。地理学部という外大にはない学部の講義に心躍りましたし、南アフリカの都市や旧黒人居住区 (タウンシップ) についてのリサーチなど、興味深い文献に多く出会うことができ、聴講してよかったと思いました。

留学中は交換留学で来ている留学生と院生が入る寮で生活していました (写真 2)。1 フロアに 8 人住めるような大きな 2 階建ての家に住んでいました。キッチンとシャワーが共有、個室あり、Wi-Fi 強いというなかなか良い寮で、ハウスメイトと一緒にご飯を作ったり、遊び

に行ったりと楽しく過ごしていました。



写真 2: 寮の敷地内の様子（上）と私の住んでいた家（下）。

4. プレトリアに留学してよかったこと

- ①便利 最初にも言いましたが、スーパーの品ぞろえはいいし、なんならコリアンスーパーで日本食も手に入るし、大学の Wi-Fi も強いし、何も苦労しませんでした。
- ②天気がいい 基本的に毎日からっとした快晴で、洗濯物がすぐに乾きます。10月から雨季になると、激しい雷雨に見舞われますがそれも夕方からで、朝は毎日気持ちよく起きることができました。青空の下でのカフェでのブランチは至高でした（写真3）。
- ③システムがしっかりしている 大学の手続きも授業もルールがしっかりしていて、派遣留学の手続きも焦ることなくスムーズに進みました。授業も先生は時間通りに来るし、まじめな生徒が多かった印象です。
- ④日本人は少ないがアジア系はいる 日本人学生は外大生以外いなかったのでも英語を話さなければいけない状況に置かれたのが良かったです。しかし、親の世代で中国や韓国が



写真3: プレトリアの桜、ジャカランダ: プレトリア大学の学内にて(上下とも)。

ら移住してきた人がいるため、アジア系の学生はいました。TAG (Tuks Asian Group)という数十人規模のサークルがあり、そのイベントに参加するのも楽しみの一つでした(写真4)。

- ⑤みんな親切 アフリカ大陸全体にいえることかも知れませんが、みんなめっちゃめっちゃ親切でフレンドリーです。
- ⑥国内外いろんなところに旅行に行ける ヨハネスブルクの空港はアフリカのハブなので、どこにでも飛んでいけます。私はこの留学中にアフリカ行きつくそうと思って、たくさん旅行しました。国内はヨハネスブルグ、ケープタウン、ダーバンに行って、国外はザンビア、ボツワナ、ジンバブエ、レソト、ルワンダ、エチオピア、エジプト、ケニア(と香港)に旅行することができました(写真5)。



写真 4: 1年の終わりの TAG Masquerade Finale



写真 5: 南アフリカの中にある国 天空の王国レソト。

5. プレトリアに留学してだめだったこと

- ①治安が悪い 悪いところはこれに尽きると思います。日本にいたら気にしなくていいことを気にしなければいけないのがストレスではあったと思います。帰国してから夜の街を歩きまわりました。

6. ビザ取得について

私が留学を通して一番苦勞したのはビザの取得だったと思います。行くたびに必要な書類を新たに言われ、計4回大使館に出向き、出国前日に学生ビザを入手しました。2018年7月時点の情報ではありますが、私が用意した書類を載せておきます。全て英訳で準備しました。

- パスポート
- 申請料
- 申請書類（大使館にメールして取り寄せる）
- 大学からのアドミッションレター
- 両親からの費用の保証の手紙と直筆サイン（子どもの留学生活に関する費用を全て払う旨を書く）
- 両親の運転免許証のコピー（英訳は不要）
- 日本の大学の在学証明書
- 留学中の保険証明書
- 健康診断証明書（所定の様式）
- 肺レントゲン証明書（所定の様式）
- 戸籍謄本英訳（公証・アポステイーユ含む）
- 残高証明書（留学期間過ごすのに十分な金額が預金されている口座）
- 3か月分の口座取引証明書
- 犯罪経歴証明書
- 飛行機予約確認書

7. 後輩の皆さんへ

ここまで読んでいただいてありがとうございます。南アフリカのプレトリアで留学してみた経験からお話すると、この大学は勉強好きの人向けの大学かなと思いました。勉強する施設が整っているのもそうなのですが、あまり外を歩き回るような場所じゃないからです。(笑)しかし、私は決して勉強好きというわけではなく、言ってしまうえば半年行ける大学がここしかなかったのが決めたようなものだったのですが、実際に住んでみて、複雑な南アフリカ社会を見ているのが毎日面白かったですし、他の国にもたくさん行くことができよかったですと思っています。とにかく利便性で困ることは絶対はないので、この大学に関してはアフリカのどこか行ってみたいし行っちゃおうかな？くらいのノリで決めるのもあります！！

8. おわりに

留学中にいろいろな人に会い、人がどこに生まれるかは本当に運次第だということを強く思いました。しかしその運によって人生の大半が決まってしまう人が多いことも感じました。大学に入ってアフリカ！グローバル！という感じでやってきましたが、国籍など関係なく、自分の運によって隣り合わせになった人たちと向き合うのもとても素敵だなと思うようになりました。あっという間の5か月間でしたが、アフリカの大都市プレトリアで巡り合えた

人々や見た景色のひとつひとつを心に留めながらこれからの日々を過ごしていきたいと思
います（写真 6）。

長い間お付き合いいただきありがとうございました。



写真 6： プレトリアにある Union Building のネルソン・マンデラ像。

ヨハネスブルグの街角で構築したネットワークが 世界中とつながる

三原 尚人
アフリカ地域専攻 2015 年度入学

1. はじめに

はじめまして。アフリカ地域専攻 2015 年度入学で 4 回生の三原尚人です。

すでに高山咲希さんがプレトリア大学の生活や学業に関しては詳細に書いてくれているので、本稿は南アフリカ、ヨハネスブルグのカルチャーとネットワークについてお話ししたいと思います。留学を通して、多種多様な文化や生活、そこで暮らす人の人生に交わることは新しい生き方のシナリオを学ぶことだと感じました（図 1）。また改めて、人的ネットワークを構築することの重要性を学ぶことができましたと感じます。



図 1: ソウェトタウンシップでサングラスを売るスタイリッシュなおじさん。

2. ファッションカルチャーとネットワーク

本項では、私が南アフリカのヨハネスブルグで形成したネットワークが世界中の人と繋がるきっかけとなり、世界的に注目されるドキュメンタリー（動画）に繋がるまでの経緯を記述し、そこに至るまでの節目節目に得た学びについてお話しいたします。

動画 : *The Fashion Culture in South Africa by The Unknown Vlogs*
(引用元 URL : <https://www.youtube.com/watch?v=gYGoxIyh7T0>)

私は、ヨハネスブルグの街角で、写真、ダンス、ファッション、BMX（モトクロスバイク）

を代表とするストリートカルチャーをバックボーンに様々な人びととネットワークを構築しました。その構築方法は、ストリートを歩いて構築しました。犯罪に会う確率を下げるには現地人と歩くか、歩くこと自体を避けるべきかと思います。ヨハネスブルグの若者はファッション感覚が高く、ストリートなカルチャーをバックボーンにすることが「かっこいい」という風潮があり、またすごくフランクなので、歩いているだけですぐに呼び止められます。

「いいスタイルだね」や「写真撮って」等の小さい会話から始まり、どんどんファッションに興味のある若者と繋がっていきました。南アフリカのファッションを愛する若者から、私がまず学んだことは創造するというマインドセットです。私や、日本人の多く、とりわけ私たちの世代は可愛いものやかっこいいものはお金を払って手に入れるというのが当たり前かと思います。

しかし、彼らが、私が着ている服を見て感じるファースト・インプレッションは「どうやって作ったんだ?」や「どこで生地を買った?」というものでした。私にとって、「創造」と「購入」は等号では結ばれていなかったもので、新たな気づきでありました。ヨハネスブルグの若者はエルメス (Hermès of Paris: フランスの高級ファッションブランド) のバーキンを生地から購入して作成してやろうというマインドを持っていました。

3. 発信ツール

南アフリカのファッションカルチャーやネットワークで良い点は、すごくコンパクトに密集している点です。それゆえ、交友関係は波及的に広がり、南アで有名な多くのデザイナーや写真家、アーティストの方々と繋がることができました。

交友関係を構築するハブとなったのは、私が日本から輸入した衣服を卸販売していた「Court Order」という Consignment Store (注1) でした。そこには、様々なバックボーンの人が集まり、コーヒーを飲みながら共通項として持つファッションやスニーカーの話題を通じて交流しました (図2)。



図2: Pessimistic のデザイナーで友人の Steve (動画内 3:56 から出演)

Court Order の Boss であるインド系南アフリカ人の Akoo とは、家で夕食を共にする関係へとなりました (図3; 図4)。

注1 Court Order は、Consignment Store と呼ばれる受託販売店でヨハネスブルグ、ケープタウンにひとつずつ店舗をもつ。ファッション関連の商品を扱っているが、コーヒースタンドが併設されているコミュニティストアでもある。

Instagram の URL: <https://www.instagram.com/courtorderza/>



図 3: Court Order のオーナーで友人の Akoo



図 4: Court Order と私

Court Order で出会った友人の中で学びが大きかったのは、イラストレーションを通じて、カードや黒人が抱える苦悩や野心を表現するカードの青年でした。彼の名前は Seth (aka African Ginger) で、南アの色素が色濃く残った社会構造から生まれる若者の苦悩や熱量を、Art をツールに発信することに、大きな学びを得ることができたと感じます (図 5; 図 6)。



図 5: イラストレーターの Seth aka African Ginger 氏



図 6: Seth による作品のひとつ。

以下の Instagram ページから鑑賞できる。

URL: https://www.instagram.com/african_ginger/

多くの東京外大生が抱える苦悩は、悲惨な状況や困難な苦境にいる人々の存在は知っているものの、それに対してどうアクションすれば良いのかがわからないことかと推測します。行動の方法は無数にあります。何が自身に合うかを探ることが重要かと思います。

4. ケープタウンのファッションカルチャー

南アフリカのファッションカルチャーにより深く入り込めたのは、ヨハネスブルグのネットワークがケープタウンのネットワークに結びついたことが大きかったかと思います。

ケープタウンにある Orpahn Street Clothing Store (OSCS) の Boss と同い年でストアで働く Regan、また Regan の友達でルフトッパーを経営するイタリア人の Franchesco、Levis South Africa で働く Seeraj、Baseline Skate co の Alex 達と出会えたことにより、爆発的にネットワークが広がりました(図7; 店については注2参照)。



図7: Orphan Street Clothing Store (OSCS) にて。右にいるのが筆者で、左が Regan Paulsen。

とりわけ、Franchesco のネットワークは国内外に広がっており、New York からきた Pro Skater や Photographer と Braai (南アフリカでさかんな BBQ の集まり) を通して繋げて貰いました。Franchesco ほど、Social Communication 能力に長けた人間を初めて見たので、マインドセットや振る舞い方について学べる点が大きかったです(図8)。



図8: Franchesco と私。Franchesco の Instagram ページ URL: <https://www.instagram.com/franchezee/>

私の彼女がケープタウンに来た時には Franchesco の家で、私たちは彼に日本食を振る舞い、Franchesco は私たちにイタリア料理を振舞ってくれました。(Franchescoのおかげで)ヨハネスブルグとケープタウンで少しばかり名が知れたことで、いくつかの現地ブランドから instagram を通して撮影依頼を受けるようになり、ますます南アフリカのファッションカルチャーに浸かっていきました。

注2 Levis はアメリカ合衆国で生まれたジーンズブランド。世界中に店舗をもち、seeraj は Levis South Africa 本社(ケープタウン)でプレスとして働く。Baseline Skate co. はケープタウンを代表とするスケートボードストアでその店員である Alex とは、私の彼女がケープタウンに来た時も共に遊ぶほどの仲だった。

5. ネットワークは新たなネットワークと繋がる

そんな中、また Instagram を通じてあるカメラマン・フィルムメーカーのイギリス人から急に連絡を受けました。内容は「南アフリカのファッションカルチャーに関してドキュメンタリーを製作したいのだが、紹介できるデザイナーはいるか？ 君は南アフリカのファッションシーンに詳しいと聞いたのだが」といったものでした。

誰から自分の名前を聞いたのと聞くと、Court Order の Boss の Akoo からでした。イギリス人の彼は Toby といって、世界的に有名な Fashion アイコンである Icy Kof の専属カメラマン・フィルムメーカーでした（注3）。

私はヨハネスブルグから一人、ケープタウンから一人、友人であり国際的にも戦えるクオリティのブランドを手掛ける Pessimistic の Steve（動画内 3:56）と、Hypebeast 等の雑誌にも特集が組まれる Young and Lazy の Anees（動画内 8:47）という2人のデザイナーを紹介しました。南アフリカの街角で作ったネットワークがイギリスのネットワークと繋がる瞬間でした。現在、南アフリカで構築したネットワークを灼熱の東京にも結びつけようと尽力しています。

6. 自己定義

南アフリカの若者は他国より自分自身を自ら定義し、評価しなければいけない割合が高いと感じました。1つの理由として、2019年の失業率は29%に昇り、慢性的に職がありません。3人に1人は定義上、職を持っていません。しかしながら、彼らは自分自身を定義し自己評価する能力を持っていると感じました。

誰も用意してくれていないので、自身で自らを定義し、その分野、領域にネットワークを構築していき、仕事をもらってくる。全ての職種において有用なこのハングリー精神を留学生活の中で実体験として学べたことは重要だと感じました。

7. 自己像

どんな領域であろうと、人的ネットワークを構築することは重要だと感じます。人的ネットワークの多様性が増すことは、自身のありうる自己像を多様化することにもつながります。自分という存在の境界を押し広げ、特定の文化に依拠する固定観念から脱却し、他者の行動を深く観察できるようになると思います。

他者の観察を通し、自身の価値観と物事の優先順位を決定すること、自身の役割やアイデンティティを定義することにおいて貢献すると感じました。若い頃に、多種多様なアイデンティティ、人生のシナリオに接触することは重要かと思います。皆さんも快適な空間（コンフォートゾーン）から出てみることをお勧め致します（図9）。

注3 Icy Kof の Instagram の URL: <https://www.instagram.com/icykof/>。

最後まで読んでいただきありがとうございました。



図 9 : Johannesburg CBD にて夕方、友人たちとスケートボード。

1.3. 仏語圏への語学留学

セネガルでフランス語を学ぶ

野間 武

西南ヨーロッパ第1地域専攻 2013年度入学

1. はじめに

私は2016年3月から12月までの9か月間、アフリカ大陸最西端の国であるセネガル共和国の首都ダカールにて語学留学を行いました。東京外国語大学にセネガルの提携先がなかったため、派遣留学ではなく休学をしての留学でした。当報告書における私の留学経験についての記述が、今後セネガルへ留学を企図される学生の一助となることを期待します。

2. 留学の動機

私は3年生を終えた春から留学を行いました。入学以後の3年間はフランス語とアフリカ社会学を専攻としていました。そのため、アフリカでフランス語能力を深化させたいと思い、仏語圏西アフリカでの語学留学の道を探りました。

西アフリカの国々の中でセネガルを留学先に選んだ理由は2つあります。1つ目は、フランスが西アフリカを植民地化していた時代に、その拠点国であったからです。私は坂井真紀子ゼミに所属し、フランスの植民地政策について研究を行っていました。なので、セネガルへ留学を行うことで、語学を伸ばせるだけでなく、将来的に卒業論文の糧になるような経験が出来るだろうと考えました。2つ目は治安が比較的安定していたからです。仏語圏西アフリカの中で、留学前に外務省の渡航情報において唯一色のついていなかった国がセネガルでした。長期留学をする上で、リスクを出来るだけ回避したい私にとっては大きな判断材料となりました。以上2点の理由からセネガルへの語学留学を決断しました。



写真1：ダカールのシンボル、アフリカ・ルネサンスの像（撮影：野間 武）

3. 留学前の準備について

私は上にも述べたように、派遣留学ではなく休学留学であり、また学校についても渡航後に登録をしようと考えていたので、受け入れ機関については情報を調べる以外の事前準備は行いませんでした。私が行った留学前の準備としては、予防接種、キャッシュカードの作成、保険の加入が挙げられます。

予防接種は7種類13回（下表 回数・値段は2016年2月当時）行いました。値段的にもかなりかかってしまいますが、例えば黄熱病ならば接種後1カ月は他の予防接種を受けられないなど時間的にも制約がありますので、余裕を持って受けることを推奨します。

キャッシュカードについては、万一現地で不具合を起こした時に備えて、三菱UFJ VISA デビットカードとマネパカード（マスター）の2種類を準備しました。基本的に私がいつも利用していた「ソシエテ・ジェネラル」というフランス資本の銀行のATMではVISAマスターともに対応していたので問題なく引き出すことが出来ました。

保険については、あいおいニッセイ同和損害保険の海外旅行保険に加入しました。盗難被害や病院への受診については十分考えられる事態であると思うので、それらを考慮した上で加入すればよいと思います。

種類	回数	値段
A型肝炎	3回	8,000円×3
B型肝炎	3回	5,300円×3
狂犬病	3回	10,000円×3
腸チフス	1回	7,500円
破傷風	1回	3,700円
髄膜炎	1回	9,000円
黄熱病	1回	12,000円

4. 留学期間中の流れ

私の留学期間中の大まかな流れを下にまとめます。

- 3月：ゲストハウス滞在。家・学校探し
- 4月：学校（Institut Français2 コース）開始
- 5月：学校（Institut Français2 コース）終了
- 6月：モロッコ旅行
- 7月：学校（IFEE2 コース）開始
- 8月：学校
- 9月：学校（IFEE2 コース）終了
- 10月：ヨーロッパ旅行。南下旅
- 11月：テスト勉強。DELF、DALF 試験
- 12月：帰国



写真2：ゴレ島内、「奴隷の家」での一枚（撮影：野間 武）

5. 生活について

セネガルのダカールには私の留学当時日本人が経営するゲストハウスが2つありました。そこにインターンとして期間中ずっと滞在する方法もあったのですが、私は留学生としてセネガルでの生活を送りたいと考えていたので、その方法をとらずに一人暮らしを行いました。しかし、やはり現地到着直後には住居を確保できないので、最初の1か月間はゲストハウスに滞在し、そこで学校の手続き（後述）や住居の確保、情報収集に努めました。

Expatriate DAKAR というダカール内のフリマサイトに掲載があった電話番号にコンタクトを取り、不動産業者と何件か家を周って家の手続きを完了させました。7~8 畳ほどの部屋が2部屋と別にキッチンがあり、家賃は月約22,000円でした。雨季には窓を閉め切っても、雨が部屋の中に浸水してきました。

生活環境としては、ダカール全般ではなく私のアパートに関することしか述べられませんが、お湯は全く出ず、水も最長で1か月間部屋の水道から出なかったため、その際にはアパートのグラウンドフロアにある共用水道から水を汲んで生活水として利用していました。電気は時折停電することもありましたが、基本的には安定していました。ネットについては「Orange」というフランスのネット会社がセネガルでも大きく展開しているので、そこで契約し無制限のWi-Fiを家に備え付けていました（月約6,000円）。



写真3：ラマダン明けのお祭り「タバスキ」の光景（撮影：野間 武）

6. 学校について

私は2つの語学学校にそれぞれ2コースずつ通いました。

1つ目は「Institut Français」というフランスが世界的に展開している機関です。セネガルでは首都のダカールの他にサンルイやカオラックにもあるようです。施設自体も非常に洗練された建物で、校舎の他に映画上映スペースや音楽堂があるような、大きな施設です。授業はフランス人（もしくは国籍は違うがフランスで育ってきたフランス語母語話者）によって、テキストに沿って行われ、かっちりとしていて質の高いものでした。一クラス約10~15名で行われ、クラスメイトの国籍、年齢は多種多様です（夫の仕事の都合で来ているのだろうと思われるマダムが多めではありますが）。授業料は1クール（週5回1日3時間の3週間コースもしくは週3回1日1時間半の2か月コース）約2万円、それに加えて初期会員登録費用（約1万5,000円）と教科書代金（約4,000円）がかかります。ある程度のレベル以上のコースになると、人数不足で授業が開講されないことがあります。



写真4： Institut Français Dakar（撮影：野間武）

2つ目は「IFEE」というダカール大学（シェク・アンタ・ジョップ大学）付属の外国人向けフランス語学校です。私はIFEEのサマースクールに2コース通っていました。こちらは大学付属機関ということで、Institut Françaisとはがらりと雰囲気が変わり、校舎等しっかりしてはいますが、いわゆるアフリカっぽさを感じられます。クラスメイトは最初のコースでは9割がアフリカ出身の学生で、2コース目はヨーロッパ人やアジア人も増えました。文法、読解、発音などそれぞれに担当教員がおり、1日2種類の授業が計4時間ほど行われます。面倒見がいいとは言えませんが、教員のレベルは高く、授業としてもそれなりに充実していると思います。授業料はInstitut Françaisと同じく1クール約2万円ですが、こちらの場合1クールが約5週間ありますので、割安となっています。

IFEEはサマーコースだけでなく、11月から6月までの通年コースも開講しているようで、語学学校での授業に加え、セネガルの歴史などを学ぶ授業もあるとのこと。年間通して授業料が約6万円と破格の安さです。私が滞在していた時は9月末までに登録をしてほしい

とのことでした。

7. 費用

○渡航費

往復約 300,000 円

○予防接種

7 種類 13 回約 100,000 円

○保険

約 200,000 円

○住環境

・家賃：22,000 円×8（176,000 円）

・Wi-Fi：6,000 円×8（48,000 円）

○学費

・Institut Français：20,000 円×2、初期費用 20,000 円（60,000 円）

・IFEE：20,000 円×2（40,000 円）

・DELF/DALF 試験 約 4,000 円×3（12,000 円）

○旅行

2 回計約 35 万円

○ゲストハウス

1 か月約 60,000 円

+生活費

総計 約 1450,000 円

8. 成果

私は語学習得を第一の目標に留学に赴き、帰国の約 2 週間前に行われた DALF 試験において C1 レベルに合格することが出来ました。個人的には満足いく成果であると考えています。また、IFEE においてはシステム上の不備がいくつかあり、そのことについて自分の意見を教員に伝えなければならない機会が何度もあったので、異文化環境での意見発信力も高められました。



写真 5：セネガル第二の都市、サンルイ
（撮影：野間 武）

9. 後悔

セネガルには提携校がなく、9か月間基本的に語学学習を続けていたため、ゼミの学習について進めることが出来なかったことを少し後悔しています。もちろん現地で生活し、知見を深めることで、卒論に向けてのベースを築くことは出来ましたが、専門的なレベルで何かを学習することは出来ませんでした。もっと積極的に行動（例えばアンケートを作るなど）することで、ゼミの学習においてもさらなる成果を得られたらと感じ、心残りとなっています。渡航前から明確なビジョンを持って、準備を進めておけばよかったと思います。

10. おわりに

セネガルへの留学で留意しておいてほしいことは、学費や生活費の安さだけを理由に、フランス語の語学留学先として安易に選択することはやめておいた方がよいということです。セネガルの公用語はフランス語ですが、現地の人同士の会話でフランス語が使われるということはまずなく、街中を歩いていてフランス語が聞こえてくるということも滅多にありません。なので、語学学習だけを目的とするならば、フランスやスイスの方が好ましく、セネガルを選択する場合、語学以上の付加価値を持っておかなければ後悔してしまうでしょう。ですが、逆にセネガル自体に理由を見出しているならば、多くの面で充実した生活を置くことが出来ると思います。自分の留学における目標を明確にして、その上でセネガルを留学先として選ぶ学生が増えることを心から願っています。



写真6：セネガルイスラム教、最大勢力ムリッド教の聖地であるトゥーバ（撮影：野間 武）

マダガスカル体験記

宮城 由
アフリカ地域専攻 2013 年度入学

はじめに

こんにちは。アフリカ地域専攻 2013 年度入学の宮城由です。私は 2016 年の 3 月から 2017 年 1 月までの 10 ヶ月間、アフリカ大陸の右下にあるマダガスカル島へ留学に行っていました（写真 1）。大学の第二外国語で表面をなぞる程度にしかフランス語を勉強していないにもかかわらず、フランス語圏であるマダガスカルへ語学留学という名目で行って来ました。坂井真紀子先生の元ゼミ生の方が今まで 2 人ほどマダガスカルへ留学しており、私は坂井先生からマダガスカルのホームステイ先をご紹介いただいてフランス語圏への留学を決めました。



写真 1：背中のコブが特徴的なマダガスカルのゼブ牛（撮影：宮城由）

留学動機

これといった明確な留学動機は実のところありません。アフリカの社会学とかにも興味はありますがそれを勉強するためだけに行くのはどうしても私にとって荷が重く、純粋にアフリカに行きたいという思いが一番の理由です。第二外国語で学んでいたフランス語に興味があったため仏語圏アフリカに行ったら面白そうだと感じたことと、実際にアフリカで生活を送ってみたかったからです。また、日本人がほとんどいない国なのでその点が私を大きく魅きつけました。

ホストファミリー

坂井先生からご紹介いただいたマダガスカル人女性のご自宅で、まるで本当の家族のようによくしてくださいました（写真 2）。私を含めて今までに 4、5 人の日本人留学生・インター

ン生を受け入れており、日本のことも日本人のこともよく理解されている方でした。私の場合は彼女の自宅にあまりの部屋がなくなってしまうので、その方の親戚のアパートの一室をお借りすることになりました。セキュリティも万全でかなり広い部屋でして、家賃は日本より高かったです。具体的には寝室 2 部屋、お湯が出るお風呂と便座のないトイレが一つずつ、キッチンに 10 畳くらいのリビングがありました。



写真 2 : アンタナナリボの空港到着直後のホストファミリーとの写真 (撮影 : 宮城由)

留学準備

私は直前になって非常に焦りながらドタバタと準備を始めました。出発の 3 日前くらいにビザを取りましたし、ホストファミリーとはほとんど連絡が取れないままマダガスカル空港に到着することになっていたので。

しかし、予防接種と現地で使えるキャッシュカードは作り、生活ができる環境だけは整えるように気をつけました。語学留学先として現地の Alliance Française (マダガスカル首都には Alliance Française 以外の語学学校はありません) という学校を選びましたが、こちらも 2 往復目からメールの返信がなくなり準備したくても特にできない状況でした。予防接種は思いがけない出費となるので気をつけたほうがいいです。

学校

現地に到着した翌日から語学学校に行ってコースへの登録を完了させ、その入学許可証を持ってビザ延長の申請をしにホストファミリーと行きました。しかし、この語学学校が 3 週間弱で登録を更新するため学生ビザの対象になっておらず、ツテをたどりに辿り別の学校(現地の大学)から入学許可証をいただきなんとか滞在することができました。また、半年ほどしてマダガスカル生活に慣れてきてからは、Université Catholique de Madagascar (URL: <http://www.ucm.mg/>) という私立大学にも聴講生として少しだけ授業を聞きに行ったりもしました。語学学校でも外国人はほとんどいなくて、マダガスカル人と一緒に授業を受けていましたが、私立大学ではフランス語ペラペラのマダガスカル人ばかりだったのが印象的でした。

生活（家・食・移動）

先ほども書きましたが、住んでいた家はかなりいいところで東京の家よりもかなり広かったです。しかし家賃が 330 ユーロ/月と想像をはるかに凌ぐ値段でした。もちろん自分で探し回ればもっと安い部屋も見つかると思いますので、もう少し節約できたと思います。ホストファミリーはキリスト教徒だったのでイースターやクリスマスなどは家でパーティーをするほど盛り上がっていました。親戚が非常に多くホストマザーは 10 人兄妹なので、誰が誰だかわからないほどの大所帯でプレゼント交換などしたクリスマスは壮観でした。日々の食生活以外は一般的なマダガスカル人よりもいい暮らしをしていたなと強く感じる毎日でした。

マダガスカルの食は恵まれており、食材が非常に豊富で肉はなんでも食べますし、主食もコメで味付けもアジアよりという好条件でした（写真 3）。普通の食堂では一食 100 円くらいでラヴィトゥトゥという見た目不味そうな美味しい料理を食べられます（写真 4）。毎日食べていました。ちょっと贅沢したければホテルのフレンチとかも 400 円くらいでは食べることができたと思います（あんまり食べなかったのが覚えていませんが）。



写真 3: 魚の燻製かと思っていたらピーナッツと小麦のスイーツだったクバ（撮影：宮城由）



写真 4: キャッサバの葉っぱと豚肉を煮込んだマダガスカル料理ラヴィトゥトゥ（撮影：宮城由）

移動手段に関しては、首都アンタナナリボでは基本的にバス移動か徒歩になります。ギュウギュウに詰まった超アフリカ感のあるタクシーベという名前のバスは、市内一律16円くらいでどこにでもいけます（写真5）。

また、首都には中国人がやっているアジア食材屋のようなものが数軒ありますが、日本食が置いてあるのは私が調べた限り4畳半くらいの小さなお店一軒だけでした。そこにはキッチンマンの醤油と「出前一丁」が置いてあります。日本食や生活に必要なものは持っていくことをお勧めします。



写真5:首都の渋滞に引っかかるバス（撮影：宮城由）

費用

留学にかかった費用を個々に記録しておらず概算しかできませんが参考程度に書いておきます。

▶ 渡航費

往復 261,310 円

- ・ 日本→マニラ（Philippine Airlines）
- ・ マニラ→バンコク（Philippine Airlines）
- ・ バンコク→レユニオン（Air Austral）
- ・ レユニオン→アンタナナリボ（Air Austral）

▶ 予防接種

6種類 約 80,000 円（狂犬病、黄熱病、日本脳炎、A型肝炎、B型肝炎、破傷風）

▶ 保険

172,940 円

▶ 居住費

330 ユーロ×10 約 430,000 円

Wi-Fi 全く覚えていません。すみません。

▶ 学費

Alliance Française 約 15,000 円

Université Catholique de Madagascar 約 40,000 円

これに生活費や国内旅行などを足して合計で 700,000 円くらいでした。

おわりに

私の大きな反省点として、マダガスカル留学に対する準備を怠りすぎたことが一番大きいです。留学に行く目的をもっと明瞭にしておくのもそうですが、留学先の下調べやいったいどんな国なのかをより深く知った上で行けばよかったと思っています。

自分のことを管理する人が全くいないため非常に過ごしやすく自由に生きることができたのは快適でしたが、もっと計画的にやればよかったことも多々あります。当たり前のことですが、しっかり考え準備をすることが充実した留学生活につながるのかなと今になってひしひしと感じます。

しかし準備はひどかったですが、道端で中国人と間違えられるのは構わないのですが、すれ違う瞬間に耳元で中国語をバカにするような言葉をかけられたり、約束していた時間から 2 時間待たされたことや、キオスクのおばちゃんと友達になったりと実際のマダガスカル生活では驚いたり、ムカついたりたくさん面白いことがありました（写真 6）。

おかげでやっと、ほんの少しだけマダガスカルやアフリカを知るきっかけが掴めたかなと思います。留学やインターン、短期のプログラムなど様々な形でアフリカへ挑戦する機会があるので、ぜひ一度足を運んでみるといいかもしれません。



写真 6:住んでいた家近くの様子（撮影：宮城由）

1.4. フィールドワーク

アフリカ最大の資源は天然資源ではなく・・・？ ～日本から最も離れた国・ブルンジで思ったこと～

河野 賢太

アフリカ地域専攻 2013 年度入学

1. 日本から最も離れた国・ブルンジで思ったこと

2016年12月17日、国境を越え、僕を含む乗客をばんばんに詰め込んだバスは人気の無い山道をどんどん登っていく。もう一時間強は乗っているだろう。「はたしてこの先に首都があるのだろうか？」と思っていると、宮殿が目飛び込んでくる。聞くところによると、これは大統領の宮殿で、今は建設中らしい。中国語が建設中の機材に書かれており、こんな国にまで中国企業があるとは たまげたものだ、と感心するや否や、平地が目飛び込んできた。家のトタン屋根が太陽光を反射し、キラキラ光っている。奥には湖がある。とても小さいけど、なんて美しい都市なんだろう、と僕は思った。

ここはブルンジ共和国・首都ブジュンブラ（写真1）。ある意味日本から最も離れた国の首都に僕は足を運んだ。僕は2016年9月～2017年9月の1年間、Protestant University of Rwanda というルワンダの大学（注1）で平和構築・紛争解決学科に在籍していた。そこで僕がやっていた事を一言で言うと、「暴力紛争後の社会にて、いかに加害者と被害者が信頼関係を取り戻し、和解していくか」について、アフリカ各国から来た学生達と考えていた。しかし今回の留学体験記では、あえて、ルワンダではなく、ブルンジで過ごした3週間の間、僕が感じた事を話したい。ルワンダについては、同じ留学先で勉強していたアフリカ地域専攻の後輩達が話してくれるだろうから。



写真1: ブジュンブラの位置。

（出所：BBC, 4 December 2017, “Burundi country profile”, URL: <http://www.bbc.com/news/world-africa-13085064>）

注1: Protestant University of Rwanda の詳細は、以下を参照されたい。
URL: <http://www.piass.ac.rw/>

ブジュンブラに来た理由は、「人々がどう暮らしているか想像もつかないブルンジに行きたい！」という理由からだ。というのも、ブルンジはルワンダと違い、2015年に大統領が「任期延長する」と宣言した事を契機にクーデターが発生し、情勢は不透明なままだ。同じ紛争に喘いでいる南スーダンとは違って、資源が少なく、アフリカで一番経済的に貧しい国だ。ただ、そこには人々が住んでおり、僕の友達にはブルンジ人も多くいる。彼らの育った国についてもっと知りたい。そう思い、リスクを承知で友達の一人に頼み込み、ホームステイを3週間させてもらった（絶対私から離れるな、と言われたが）。

賄賂を要求してくる腐った警官、政府を熱烈にサポートする若者との出会い、酔っ払い同士の喧嘩、気さくな若者、おそらく初めて外国人である自分を見て泣き出す赤ん坊、頻繁に起こる停電、心が素朴な美しい人々、友人の親戚の結婚式…。



写真2: (左) ホームステイ先の家から見たタンガニーカ湖。奥に見える山から先は、コンゴ民主共和国。

(右) 野生のカバを見なければぜひブルンジへ！（以降の写真は全て筆者撮影）

あの3週間で起こった事全てはとても書ききれないけど、印象に残ったエピソードが一つ。ブルンジにはタンガニーカ湖という世界で2番目の深度を誇る湖があり、そこへ友人と足を運んだ（写真2）。野生のカバや飼われている牛が寝そべっているビーチには、ボートマンと呼ばれる、木製の船を漕いでタンガニーカ湖を案内する観光客相手の商売を営む男たちがいる。「調子はどうだい？」と来てから覚えたキルンディ語で話しかけると「まあまあだね。にしてもキルンディ語を話すなんて驚きだよ。どこで覚えたんだい？」と陽気な笑顔で返される。「ほんの少しだけね。友達が教えてくれるんだ。ところでビジネスの売り上げは？儲かってる？」と更に聞くと、彼の顔つきが真剣味を帯びた顔つきに変わる。「2015年のクーデター騒ぎから、すっかり景気が悪くなっちゃった。その前は毎年音楽フェスがあって、コンゴやタンザニア、ひいてはケニアからも観光客が来ていたのに…。俺はあんたが外国人だから話すが、誰が大統領になったっていいと思ってるんだ。彼が安全をもたらしてくれるならね。今の大統領はダメだね。暴力と腐敗が蔓延している。日本人のあんちゃん、どうかブルンジ

の状況を日本に伝えてくれ。」と。

これは、いかに現在進行形の紛争が無数の一般市民に影響を与えているか、始めて実感した瞬間だった。「紛争」「数千人が国を追われる」などといったよくニュースで自分たちが見る言葉が、実体験と結びついた。

夜にはステイ先の家族と一緒にご飯を食べ、いつものように楽しく食べながら、僕は友人に質問する。

「君はブルンジと違って、平和なルワンダで留学しているけど、将来はどうするの？経済的にも豊かなルワンダで働くの？今日あったボートマンのお兄さんも言ってたけど、今のブルンジの政治的状況を考えると、ブルンジで働くにはなかなか難しい状況だと思うけど。」

すると、友達が返す。

「日本人のあなたはブルンジに来て驚きの連続ばかりだと思うけど、紛争について一言言いたい。ブルンジはアフリカでも一番貧しい国だけど、わたしは自分の事を惨めだと思った事は一度もない。だって私には暖かくて大好きな家族がいるんだもの。ブルンジには独自の文化があって、それを誇りに思っている。今は確かに政治的に難しい状況だけど、平和について実際に学んでいる私たちが、暴力を使わない方法で、この国に平和をもたらす力になりたい。」と答えた。

これが僕にとっては衝撃だった。貧しい＝不幸せではないと気付いたから。実際ステイ中も、近所の子供が自由に出入りしたり、家族や親戚同士の繋がりもとても密で、「孤独」ってのはないんだなと思った。すごく羨ましかった。こりゃアフリカで自殺なんて少ないなって納得した。

ネットの環境が全くない所で過ごした3週間（写真3～4）、これまでの人生でも一番幸せな、そして人間らしい時間を送っていたのだな…と、虚ろな目をした会社員たちが、僕がブルンジ行きのバスに詰め込まれていた時と同じくらい混んでいる「新宿発京王八王子行き」の電車の中で、僕は時々思い返す。特に就職活動中の今なら尚更だ。金を稼ぐのももちろん良いし、それは大事な事だけど、もっと他に大切な事があるんじゃないかな、と最近思う。これは僕のアフリカでの経験から来ている、なんとなく言語化はできない思いだ。



写真3: ステイ中は料理を手伝ったり、水を汲みに行ったり…。



写真4: (上) ステイ先の温かすぎる家族と友達と。(下) ステイ先の近所の家族と。

留学中、お世辞にも平和とは言えない国々に足を運び、色んな人に会い、色んな事を感じた。ルワンダに留学しに行った、と周りの日本人に言うところ「そんなとこに何しに行ったの？」と返されるが（親にまで）、僕にとってはこれまでの人生で一番意味のある時間だった。自分のちっぽけさを知り、アフリカ中から来た優秀な友達に刺激を受け、アフリカ大陸に魅せられた。ある者はアフリカにある石油や金、ダイヤモンドに魅せられ、またある者は雄大な自然に魅せられる。だが僕が一番魅せられたのは、人そのものだった。同じ大学で学んだ才能溢れる友人たちがいれば、アフリカはもっともっと良くなると確信した。将来はそんな彼らと一緒にアフリカで働きたいと思い、今はアフリカで働ける仕事を探している（写真5）。そして最後にはなるが、2年後にはブルンジで選挙が行われる。どうか少しでも平和裏に、政権移譲が行われる事を願うばかりだ。



写真 5： 留学先のアフリカ各国から来た学友達。将来は平和構築分野で活躍するだろう。

2. アフリカ留学を考えている人へ（インターンでも当てはまると思います）。

一つ。謙虚さは日本人が美德とすることの一つですが、僕の意見を言うと、アフリカ留学に当たってそれは役に立ちません。むしろ自分の意見をはっきりと主張し、違うと思った意見には、はっきりと（理由を述べて）否定することが求められていると思います。本当に腹を割った関係を築きたいのなら、まずは自分という人間をストレートに表現することです。そして相手の意見の否定は人格否定ではないと留意すること。自分の意見を否定される際も同様です。

二つ。謙虚になりましょう（さっきと言ってることは真逆ですが）国際関係や平和構築系のアカデミックな議論をする際には、日本人はどうしても「外国人」として否定されることもたまに起こり得ます。その際に反論するだけでなく、「なぜ相手はそのように思うのか」をしっかりと汲み取ることが、真の意味で彼らの意見を聞くということになると思います。

三つ。トラブルを楽しむだけの胆力を持ちましょう。アフリカで、時間通り・予定通り物事が進むことはまああり得ないです。そして辛いことももちろんあります。ベットはダニだらけ、「中国人」と間違われる…その際イライラするのではなく、おらかな気持ちを持ち、ジョークでも言って笑い飛ばすこと。そして補足ですが、現地語を少しでもいいので覚え、街に出ましょう。学びの半分は、学外での現地人との会話にあります。

※この記事を読んだの質問、感想、疑問があれば、僕（河野）の連絡先 rwanayuhak@gmail.com まで。

モザビ大冒険記

塩崎 諒平

ラテンアメリカ地域専攻 2015 年度入学

はじめに

こんにちは。ラテンアメリカ地域専攻ポルトガル語科の塩崎諒平です。僕は約8ヶ月間アフリカのモザンビークという国に滞在していました（図1）。

何故モザンビークに留学しようと思ったのか、そこで何を感じたのかなどなどツラツラ書いていければいいなと思っております。個人的な思いが強めの人間なので、留学体験記は留学前のお話から書いています。「そんなことより早くモザビについて読みたい！」という方はガンガン読み飛ばしちゃってください。



図1: モザンビークの位置。

～目次～

1. 「留学なんて、遊学よ」
2. 「君たちは何でハーバードを目指そうとしなかったの？」
3. 留学はするけど、授業は取りたくない
4. 波乱万丈な幕開け（留学開始）
5. Eduardo Mondlane 大学
6. 警察
7. ホームステイ
8. 信じているものの名前は同じでも、主観としての体験は全く別物
9. 何かを流行らせたいなら、需要とキャパを見極めないと
10. 百聞は一見に如かず

1. 「留学なんて、遊学よ。」

僕は、浪人していました。惰性で受験しまくった現役時代、「今度こそは！」と1年間の長い冬を経て、東京外国語大学国際社会学部ラテンアメリカ地域（あれアフリカじゃないの）ポルトガル語学科に入学しました。「ラテンアメリカ面白そうだなー」というのと、「やっぱり国連で働いてみたい！」という思いが長い冬の間にも強くなり、国連で働いていた経歴をもつ教授のもとで学びたい、というか国連に入れてもらいたい、なんて思いで入学を決めました。

因みにこの時、国連入りしたいから国連公用語を（！）と考え、第一志望をスペイン語にしていたのですが、第二志望のポルトガル語になってしまいました。当時はだいぶショックで島流しやんげー、ぐらいに思っていたのですが、今思うとこれがないとモザンビークにも辿り着かなかったのですね。（アフリカ諸国のなかでスペイン語圏は赤道ギニアだけです。）

入学を迎え、早速その教授にアポを取ります。その時の会話は以下のようなものでした（少し盛っているところもありますが）。

「国連に入りたいのですが、どうしたらいいですか！」

「できるだけ早く外資系の会社に入社して、そこで稼いだお金で外国の大学院に進学。MBA（経営学修士号）を取りなさい。そしたらJPO（注1）を受けなさい。」

「留学もしたいと考えているのですが、どうでしょうか。」

「留学なんて、遊学よ。そんな暇があったら早く大学院行って、MBAを取りなさい。」

こんなやり取りを交わし、なるほどな、と思う面もありつつ、「ん？」と違和感を抱く自分がいました。そして思ったのです。

「俺、何で国連に入りたんだっけか。」

特に「何かをしたい！」という思いもなく、ただただ「国連に入りたい」というだけ。自分が思い描いている国連が想像通りなら、自分みたいな人はその組織にいて欲しくないな、と思うし、国連はあくまで何かを成し遂げる手段の一つであってほしい、そう思い始めました。

もっと自分の興味を掘り下げたい。その上でどのような手段を自分の人生の中で採っていくのか、もっともって考えたい。そう考えるようになりました。（「国連は手段の一つかな、と思うようになりました」と相談した教授に伝えたところ、めちゃくちゃ怒られました。）

2. 「君たちは何でハーバードを目指そうとしなかったの？」

3年になり、ゼミ（専門演習）が始まります。僕は国際社会学部・現代世界論コースの李孝徳先生のゼミに所属することになりました。そのゼミで個人的にインパクトが強すぎる問い

注1：Junior Professional Officer（ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー）の略称。国連などの国際機関と各国政府のあいだの取り決めに基づき、一定期間、各国から国際機関に派遣される非正規の専門職員のこと。

に出会いました。

「君たちは何でハーバードを目指そうとしなかったの？今の時代、ハーバード出とけば年収 3,000 万円くらいの生活が待ってるんじゃない？そんな世界なのに大学選ぶとき、ハーバードって選択肢が出てこなかったのすごいよね。もしかしたらそういう選択肢を見せない社会構造になってるのかもしれないね。」

衝撃的でした。自分が意識できない斜め上、まるで認識の外からガツンと一発食らったかのように。自分がめちゃくちゃ考えたとして、その上で選び取った選択肢であっても実は社会によって予め敷かれたレールの上でのゲームをやっているだけなのかもしれない。そんなの怖すぎる。

「学部の留学は遊学。」って言われるぐらいなら、めっちゃ有意義な一年にしてやろう。」

学位も取れない 1 年留学。それならば、学位とかそういうものとはかけ離れたなにかもつと意味のあるものにしよう。以前に言われた言葉と、このゼミで得た問いとがマッチし、ならば今の自分から一番遠そうなところに 1 年を費やそう、そこから今の自分を客観的に見てみようと思ったのです。

3. 留学はするけど、授業は取りたくない

「さあ、一番遠そうなところに行くか。ならアフリカかな。」

そう思ったとき、モザンビークが浮かびました。アフリカにあるポルトガル語圏 5 つの内、モザンビークが感覚的に一番行きやすい気がしたからです。(かつてのポル科にはモザンビーク留学をしていた人が結構いたとの噂を聞いていました。) もう一つ、モザンビークを選んだ理由があるのですが、それは長くなってしまっているので割愛します。(気になってくださった方はこちらから！：「僕がモザンビークを選んだ理由」)

さあ、モザンビークをどうするか。行ってはみたいけど、別に授業は受けたくない。そう、自分のポルトガル語に自信がなかったのです。わからない授業に時間を費やしたくないなあ。そう思ってしまいました。

でも、長期滞在はしたい。つまりビザが欲しい。そのためには学生ビザが一番手っ取り早い。でも授業は受けたくない。

「うーん。」

と、悶々としながらその悩みについてモザンビークに関係のありそうな人と話していくと、「研究生として、現地の教授に直接お願いすればいいんじゃない？やりたい研究はあるみたいだし」と言ってくれる、現地でフィールドワークをしている方に出会えたのです！（なんと！）

そこからその方を通し、現地の教授や事務の方と直接やり取りをし、時には WhatsApp (注 2) などで電話もしながら交渉を重ね、なんとか入学許可証を手に入れることができました。

注 2 : WhatsApp は、アメリカの WhatsApp 社が提供しているリアルタイムでメッセージの交換ができる世界最大の無料 SNS アプリケーション。携帯電話さえあればインストールできるので途上国でもよく普及している。

4. 「波乱万丈な幕開け」

そんなこんなで直前までドタバタしていたため、大学側と住む場所のやり取りが中途半端なまま飛行機に飛び乗ることになってしまいました。「住む場所の住所は？家賃は？ご飯は？」という質問の答えを出発前にもらうことがとうとうできず、現地に着いてしまいました…。

「着いたら私に電話してくださいね。そしたら大学に向かってください。」

との連絡は受け入れ先の大学事務から貰っていたので、空港にて SIM カードを購入、電話をかけます。

「15:30 で業務を終えてしまうので、もう帰宅してしまいました。直接寮に向かってください。」

「…はい。(ええもう業務終わったの…直接寮って心細いやんけ…)」

突然の変更には戸惑いながらもタクシー運転手に電話を渡し、直接彼に指示をしてもらって寮に向かいます。すると待っていたのは聳え立つ 11 階の建物 (図 2)。エレベーターは、ありません。

運転手の方に手伝ってもらいながら大きい荷物を 11 階へと運びます。途中で寮母さんらしき人にすれ違うのですが、なんと「新しく留学生が来るなんて聞いてなかったわよ！」の一言。「ええ…」。

それでも、一番上の部屋が空いてるわよ。と言ってもらい、なんとか入寮を果たします。「ふう」と一息。必要最低限しか荷物を持ってこなかったため、少し買い物をしたいなあ、と思い立ちルームメイト (2 人部屋でした) に相談します。鍵が一つしかなかったためです。

「外出てきていいよ。鍵は一階の警備員さんに預けとくわ。」

その言葉にすっかり安心して、近くにいた学生に道案内をお願いし、スーパーに向かいます。ちなみにモザンビークの首都、マプトはかなり発展していて、ローカルな商店からイオンモールのようなショッピングセンターまで揃っており、割となんでもあります。

そして、帰宅。警備員さんから鍵を受け取り 11 階へ。鍵が、開かない。また 1 階へ戻り、違う鍵だと思おうと主張。しかし返って来た返答は、

「鍵はそれしかない。開け方が悪いんじゃないか。」

一理あるな、ともう一回部屋へ。やはり開かない。また一階へ戻り、この鍵は絶対違うと主張。返って来た返答はまた、

「鍵はそれしかない。俺は知らない。」

しょーがない。待つか、とルームメイトを待つこと 45 分、出会い頭に言われた言葉は、「ごめん、預け忘れてた。」



図 2: 聳え立つ寮。夜になると圧倒的ホーンテッドマンション感を醸し出します。

ここまで来るともういいですね。一緒に部屋に戻りました。そう、この時点で僕は11階を2往復半しているのです、少し気持ちが荒んでいました。部屋に着くと、「ご飯食べた？2階に学食があるから食べて来なよ」とのこと。一緒に行こうと誘ったのですが、彼は来ないの一点張り。

仕方なく緊張の面持ちで食堂に入ると、一斉に自分の方に視線が向きます。それもそのはず、この寮、本来留学生が入る寮ではなかったらしいのです（後々、そっちの寮は埋まっていたから現地学生の寮にした、と事務の人に説明されました）。

「わざわざ…わざわざ…」

この時点でもう既に心が折れかけていましたが、それでもご飯は食べたかったので列に並びます。他のみんなはスタンプカード的なものを持っていたのですが、当然僕は持っていませんでした。どうしようかな、と思いながら自分の番を待ちます。そしてとうとう自分の番が。

「今日着いたので、仕組みがわかりません。大学の留学生です。」

「×●～！＝：※？♯=cinco!」

何言ってるかさっぱりわからなかったのですが、最後のcinco!（読み方はスィンコ。日本語で数字の5）だけは聞き取れたので、5メティカル（注3、約10円）のことかー、やけに安いなあと思いつつ5メティカルを差し出しました。すると、より激しい勢いで（怒ってた）

「×●～！＝：※！！！！！！？… ×●～！＝：※？♯cinco!」

と怒鳴られました。それでもやっぱりcincoしか聞こえて来ません。「だから5メティカル出してるやん！」とこちらも応戦。それを見かねた学生がとうとうあいだをとり持つ事態に。（後々聞いたところ、あれは“trinta e cinco”（読み方はトリンタ イ スィンコ：35）のことを言いたかった（もしかしたら25だったかも）らしく、やっぱりそんなに安いわけないか、と反省した次第です。）ただ、その日は無料でご飯を食べさせてもらい、優しさに甘えてなんとか乗り切ることができました。

その後、また11階に登り、ふて寝したのは言うまでもありません（図3）。この時点でとても日本に帰りたくなっていました。だって11階何往復しないとイケないのって。



図3:寮の部屋からの夜景。高いところだけあって結構綺麗でした。ただ、初日はこれが逆に虚しさを僕にもたらしてしまいました。

注3：メティカル（metical）は、モザンビークの通貨で1980年に導入。1メティカルが1.72円（2019年3月31日のレート）。

5. EDUARDO MONDLANE 大学

僕は、首都マプト市にあるエドゥアルド・モンドラーネ大学（注 4, Universidade Eduardo Mondlane）というところに所属をしていました。モザンビークの公立大学の中では最大、最難関と言われています。この大学は総合大学で、人文系から自然科学系、医学部まで幅広い学部が揃っています。

留学生は東ティモールからの学生が多い一方（同じく公用語がポルトガル語であるため）、その他の国からの留学生はパラパラとしかおらず、少ない印象でした。ただ、留学生を受け入れる体制は整っており、到着したばかりの学生には「パドリーニョ（padrinho）」と呼ばれるメンターの存在を付けてくれます（図 4）。



図 4: My パドリーニョ。

特に東ティモールの学生はとても優しく、同じアジア出身であることから仲間意識を持ってくれる人がとても多かったです。

彼らは互いに家族のように接していて、僕にも様々な集まりに誘ってくれました。東ティモールの学生に誘われて、サッカーにも参加しました（図 5）。ほぼ経験がないのに、友達欲しさから「サッカーできるよ！」と言ってしまったところ、観客、審判のついたガッツリした試合にいきなり投入されてしまいました。



図 5: 東ティモールからの留学生たちとサッカー。

「Kagawa だもんな！いや、Honda か！」

注 4 : 公式ウェブサイト URL: <https://www.uem.mz/>

どっちでもないです。見事に仲間からのパスを取れず交代。嘘がいつも簡単にバレてしまいました。（それでも「一緒に練習しよう！」と誘ってくれる彼らはとても優しい。）因みにキャンパスでは、毎週日曜サッカーのリーグ戦が開かれています。

6. 警察

首都のマプトは治安があまり良くないと言われていました。特に警察には気をつけなければいけないと言われており、夜には出会いたくない存在 No.1 です。夜に出歩いた際（勿論出歩かないに越したことはないです）、出会ってしまうと必ず身分証を見せろと言われてます。

モザンビークでは身分証を常に携帯することが法律で義務付けられているためここまではいいのですが、「見たいから貸せ」と言われ手渡してしまうとまずいことが起こるかもしれません。運が悪いと、「返して欲しければ金を渡せ」ということになってしまいます。

そのため僕は見せろと言われた際は、常に手渡さないように気をつけていました。それでも大半は無理やり取ってこようとするので、まるで運動会のパン食い競争みたいな争いへと発展していきます（図 6）。最終的には「もういい。けどお前はリスペクトが…」といった形の説教を受け終了です。



図 6: パン食い競争の図。逃げるアンパンが僕の身分証（パスポート）で食べようとしている人が警察です。

7. ホームステイ

フィールドワークをしようと最初は試みていたので、取り扱いたいケースの近くに実家がある友人に 1 週間程度ホームステイさせてもらいました。場所は Xai-Xai（シャイシャイ）というマプト州の隣にあるガザ州の州都です。

モザンビークは首都のマプトが第 1 の都市、第 2 はソファアラ州都のベイラ、第 3 はナンブラ州都のナンブラと言われていています。しかし、目覚ましい発展を遂げているのは首都のマプトだけであるように感じます。

マプトの周りも、車で 30 分も走らせればだたっ広い草むらが広がっていました。焼畑を行っているところも多く、発展の具合の差は一目瞭然です。そんな中シャイシャイはマプトから車で約 4 時間離れたところに位置しています。

モザンビークはビーチで有名ですが、マプトで海を見ると唾然としてしまいます。ほぼ、茶色。ただ、シャイシャイまで行くとかなり綺麗な海が広がっています（図7）。



図7: シャイシャイのビーチ。向かいにお店が並び、リラックスした雰囲気が広がっています。

シャイシャイはマプトに比べて高層ビルが一切なく、見える景色が全く違います。（ケンタッキー・フライド・チキンがありました。）シャイシャイの中心地からシャパと呼ばれる乗合バスで約30分、そこから更に歩いて約20分。友人の実家がありました。少し田舎に来たかな？といった感じでとても落ち着く場所でした。

翌日、友人のお姉さんが住んでいる家に行こうということになり、諸々予定を済ませた後、午後4時くらいに家を出発。歩いて1時間くらいだよ、と言われ出発しました。

途中、手を振る人を発見。話を聞けば友人の家族だそう。そこで暫く座り、御飯時であったためかご飯をいただきました。そこに30分程度滞在したのち、再び出発。この時点でかなりあたりは暗くなっていました。

途中、また家族を発見、同じことを繰り返します。

「“シャナンジーカ” って言ってみ？」

悪戯っぽい目をして友人にそう言われた悪戯っぽい僕は、迷わず出会ったばかりの家族にそれを言いました。すると爆笑。思わず勢いで言ってしまったものの、少し戸惑い意味を聞いてみると、現地語のシャンガナ語で「美味しい」という意味だったそう。心を撫で下ろしながら、次からも使っていこうと心に誓いました。因みにシャンガナ語でありがとうは「カ

ニマンボ（カニとマンボウ、なんて日本人向きな現地語だ!）」です。

そんなこんなをこの2回を含め、3回ほど繰り返し、最後には友人の持つ携帯の明かりを頼りに家に向かいます。そして真っ暗な中、とうとう到着。さあさあ、ご飯食べて!と出された晩御飯は既に4回目です。うふうふう言わせながら、美味しくいただきました(図8)。(家にたどり着くまで結局2時間半~3時間程度かかったと記憶しています。)



図 8: マタッパと呼ばれるキャッサバの葉でできたカレーのようなものがよく出てきます。ココナッツ入りです。



図 9: シャワールーム的な場所です。トイレもこんな感じ。

お姉さんの家には電気が通っておらず、蝋燭で夜を過ごしました。トイレやお風呂(と言ってもあっためたお湯を浴びるだけ)も外にあり、藁で囲ってあるだけの場所です。勿論天井はなく、満天の星空の中でお湯を浴びました(図9)。これは本当に、最高の体験でした。

8. 信じているものの名前は同じでも、主観としての体験は全く別物

寮に住んでいると、よくお金を貸してと言われることがあります。

シャパ(乗合バス)に乗るお金がないから、10メティカル(約20円)貸して、と言われ貸したことがあります。返してもらう前に同じことを2回連続でお願いをされました。そしてそれを「いついつまでに返すね」と言われていたものの、約束の期日までにお金は返ってこなかったのです。次第にその友人も後ろめたさを感じたのか、だんだんと僕と距離を取るようになっていきました。

お金の金額は問題ではありません。ただ、一言「遅くなってごめんね」とか「今返せないから~までに返すね」などの言葉が欲しいな一、と思っていました。ただ、一つ気になってい

たことがあったのです。この友人には何度もご飯をご馳走してもらっていました。彼が溢れんばかりに作る料理を、お腹いっぱい食べさせてもらう、ということが何度もあったのです。

「いつもご飯あげてるんだから、お金は返さなくてもいい？」

と言われたら、ぐうの音も出なかったと思います。むしろ感覚的には逆に申し訳ないくらいの交換です。ただ、彼はそれを口に出すことはなかった。恐らく頭にも上ってなかったのだと思います。

これはあくまで個別的な例なので一般化できるかはわかりませんが、彼は僕とは違うお金に対する価値観を持っていたのではないかな、と思っています。例えば目の前の硬貨や紙幣を「お金」と互いに認識していても、それに付随する意味合いは生きてきた環境や伝え継がれている伝統など、多くの要因によって恐らく違うのでしょう。

「宗教」「資本主義」など、言葉として共有されている概念は世の中にゴマンとありますが、だからといって自分と全く同じように他の人が認識しているか、と聞かれればそうではないのだと思います。それを強烈に意識するようになった出来事でした。

9. 何かを流行らせたいなら、需要とキャパを見極めない

大学にしっかりと通っていたわけではない自分は、以前より気になっていた日本植物燃料株式会社という企業で3ヶ月間インターンをしていました（注5）。

本当にざっくりと説明すると、「ITを用いて、農業の抱える問題を解決する」ということに取り組んでいる会社です。その中で、新しいプロダクトを農家の方々と協力しながら普及させていく過程に参加させていただきました（図10）。



図10: インターン中の一コマ。マプトから車で1時間離れた Boane という場所に何度も通い、何度も農家の方々と打ち合わせプロジェクトを進めていました。本当に貴重な経験でした。

注5：モザンビークでの日本植物燃料株式会社の事業については以下に取材記事がある。ジェトロ地域・分析レポート「村をつなげるアプリ、日本企業が手掛ける「電子農協プラットフォーム」(モザンビーク)」2018年11月29日付記事。

アフリカでは ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) が急速に普及している、よく言われますが、それは事実です。スマホを持つ人も多くおり、またガラケーユーザーでも個人間送金の技術は難なく使います。だからこそ、その技術を用いたビジネスや国際協力に取り組む人がアフリカには本当に沢山います。

ただ、この時に気をつけなければいけないのは「そこに需要があるのか。なければ需要を作り出せる見込みはあるのかないのか。あったとしても、その解決策を支えるだけの現地の人のキャパシティがあるのか」ということです。

どれだけいいプロジェクトでも、効率の良い製品でも、現地の人からの引きがないと成り立ちません。ビジネスをする側が現地の人に良かれと思って行うプロジェクトでも、相手側が求めていることだと、そもそもスタートラインに立てないのです。

ただ、現地の人には外からやってくるプロジェクトを「援助」と捉え、拒まず受け取る傾向にありました。オッケーされた、というところが必ずしもスタートラインではないのだなというのは実際に携わらせていただいて痛感したところです。

また、どれだけ理論上はうまくいく仕組みでも、現地の人々のキャパシティを超えた仕組みではそもそも成り立ちません。鍋も食材もないのにレシピだけは持っている、そんな状態でしょうか。上でも書いたように、現地の人々が認識している世界は、僕らが認識できている世界と違うことが往々にしてあります。

その細かな違いや、キャパシティをしっかりと見極めなければ、どんなに良い仕組みを持っていても成功しないのだな、と実感しました (注 6)。

10. 百聞は一見に如かず

今、アフリカというワードは至る所で目にすることができます。2019年には日本政府が主催する TICAD7 (第7回アフリカ開発会議) が横浜で開かれるということもあり、益々盛り上がっていくことでしょう。

「アフリカ」にはピンと来ても「モザンビーク」はどこかわからない。そのような人はとても多いのではないのでしょうか。55カ国も存在する場所を、一言で「アフリカ」とまとめて違和感なく言えてしまう、そんな場所はなかなかありません。自分も留学する前は簡単に「アフリカ」と括ってしまっていました。

一方、モザンビークの人たちは僕のことを見て何度も「中国人！」と叫んでいました。街を歩くたびに「ニーハオ！ チョンチャンチョン！」と声を掛けられます。「日本人だ！」と言いつ返せば、「ああ、日本人なのか」と悪ぶれることもなく笑ってきます。彼らからしたらアジア人はだいたい中国人なのです。

「アフリカ」では東アジアの「自分たち」が住む地域が一括りに「中国」と思われてしまっている、そんなことが起こっているのです。まるで僕たちが 55カ国をまとめて「アフリカ」と呼んでしまっていることの裏返しであるかのように。

ラテンアメリカ地域専攻の中でモザンビークに行く人はなかなかいません。「はぐれポル科」

注 6: その意味では、ケニアから普及した m-pesa という携帯電話を用いた送金技術は、需要とキャパを絶妙に捉えた仕組みだと思っています。m-pesa については以下を参照のこと。

URL: <https://af-tech.jp/m-pesa/>

なんて呼ばれたこともありました。ただ、学生生活のなかの貴重な1年をモザンビークで過ごせて本当によかったなと思っています。「アフリカ」に対する解像度を少しでも上げることができた、自分の中の当たり前を少しでも相対化することができた、とても価値のある1年間でした。

ツラツラと長く書いてしまいましたが、そろそろ終わりにします。

もしもモザンビークに行きたい、そうでなくてもアフリカのどこかに行ってみたいと思う人、直感でもいいと思います。ぜひ行ってみてください。間違いなくそれは大切な時間となるでしょう。

※質問等ある方はいつでもこのアドレスに連絡ください。お待ちしております！

塩崎諒平 E-mail: iverson3.orl@gmail.com

書を捨てよ、村へ入ろう

～フィールドワーク留学のすすめ～

井出 有紀
アフリカ地域専攻 2016 年度入学

1. はじめに

「派遣留学(交換留学)」というと、みなさんはどんなイメージを思い浮かべるでしょうか。インターナショナルな仲間たちとの寮生活？夜中まで予習しないといけない厳しい授業？成績優秀者のイメージ？大方間違っはけません。派遣留学は、外大と協定校間の学生交換システムです。この制度のもとでは休学なしでの長期留学が可能で、単位互換もできます。大学による選考を通過した学生のみが派遣されるため、派遣留学生であることは一種のブランドだとも言えるでしょう。

しかし、期待を裏切るようで申し訳ないのですが、私は上にあげたような条件に驚くほど興味がありませんでした（意味がないとか悪いかいいうつもりはないのです。ただの趣向の問題だと思います）。私が求めていたのはガーナ社会に「没入」することであり、エリートばかりが集まるガーナ大学で書物と格闘することではなかったのです。普通、このような学生はそもそも派遣留学を選びません。大学を休学してインターンやボランティアの職を探し渡航するはずで

しかし、私はあえて派遣留学制度を利用したうえで大学の外に出てフィールドワークを行っていました。実はこのことに、有意義かつ安全なフィールドワークを行う上でとても大きなメリットがあったと思うのです（図 1）。この文章では、「お堅い」大学の制度派遣留学を逆手にとって現地での自由度を上げる方法について、私の留学生生活を例に説明したいと思います。

これを機に、大学で勉強するだけではない派遣留学の過ごし方についてもぜひ考えてみてください。そして、そんな勝手なオブロン（外人）すらも「身内」に変えて取り込んでしまうガーナ社会の懐の深さにも興味を持ってもらえたら、とてもうれしいです。



図 1: ガーナ大学からの派遣留学生として外大に来ていたコフィと彼のおばあちゃん。私は全幅の信頼を置いているコフィとその家族の手引きで行動範囲を広げることができた。このような存在を持てるのが派遣留学のよいところである。

2. 留學生活について

2-1. ガーナはどんな国？

私が留學していたガーナ共和国は、西アフリカ沿岸部に位置します。日本の約 2/3 の面積に 44 (もっと詳しく分類すると 90 を超える) の民族が住んでいる多様性豊かな国です。気候的にも、南部が湿潤な (平たく言えば死ぬほど蒸し暑い) 熱帯モンスーン気候であるのに対し、北部は乾燥したサバナ気候に属します (地元のお母さんが練ったシアバターなしでは過ごせません!)。当然地域や民族によって生業も異なり、南部ではカカオやキャッサバ (主食をつくるのに欠かせないイモ) の栽培が、北部では穀物の栽培や牧畜が盛んです (図 2, 図 3)。



図 2: ガーナ南部 Eastern 州のカカオ畑。カカオの実 は直接幹になる。



図 3: 乾季のガーナ北部 Upper East 州にて。穀物は刈り入れ時、バオバブの実 は食べごろに

ガーナは 1957 年にイギリスの植民地支配からいち早く独立した国として有名です。もちろん、ガーナの人たちはそのことに大きな誇りを持っています。しかし、意外とイギリスかぶれなところもあり、トロトロ (庶民がよく使うミニバス) が英国旗を掲げて走っていたり、自分たちの英語を「イギリス英語だ」と自慢してみたり (全然アクセントも言い回しも全然違うのに!) します。

私がいちばん驚いたのは、植民地列強が支配の拠点として海辺に建てたお城 (Osua 城) に初代大統領であるクワメ・エンクルマが住んでいたということです。そういうものは普通、取り壊したり負の遺産として取り扱ったりするものではないでしょうか。しかし、彼らは植民地時代に押し付けられたものさえも必要に応じてうまく利用し、自分たちのものに転換していったのでした (図 4)。私は、ガーナのそういうところが好きです。



図 4: 南部沿岸ケープコーストにあるエルミナ城 (世界遺産)。かつての奴隷貿易の舞台は、地元の人々の重要な観光資源になっている。

2-2. 留学前半：ガーナ大学での生活

これはあくまでも私の経験に基づく情報ですが、ガーナ大学の授業は基本詰め込み式です。教科書を丸暗記して教授の意見を完コピしないと、ひどい成績をとることになります。もちろん自由なディスカッションなど許されるはずはなく、レポートにも独自性は求められません。ひとにより意見は様々だと思いますが、私はこのような授業が好きではありませんでした。しかし、このような授業形式は権威主義的なガーナ社会の縮図であるように思え興味深くもあったため、書物で知識を吸収する傍ら先生と生徒の関係性を観察していました(図5)。



図5: ガーナ大学のシンボル、図書館。西アフリカ最多の蔵書数を誇る。

そんなガーナ大学での日々がつまらなかったかといえば、そんなことはありません。私は友人に恵まれていました。ガーナ大生の多くは、首都の広大なキャンパスで寮生活を送っています。一般的に、学生は授業以外の予定を詰めません。遊び歩いたり課外活動を行ったりすることは珍しいのです(もちろん活発な学生もいます。裕福な学生にそのような傾向が大きいように思えます)。

私の友人たちも例外ではありませんでした。彼女たちと私は買い物に行き、料理をして食べ、部屋の掃除をして洗濯物を洗い、時々韓国映画を楽しみ、時間になると授業に出かける普通の生活をただ繰り返しました。彼女たちの唯一の大きな娯楽は(多くの割合を占めるキリスト教徒の場合)週に一度教会に行くことで、爆音で流れる音楽とともに踊り祈ることをなにより愛しています。私はアミューズメントパーク化した教会を好きにはなれませんでした。友人たちのことが好きだったのでいつもついて歩いていました。

彼女たちが連れて行ってくれたのは教会だけではありません。彼女たちは私を家族や知人に紹介することにすごく積極的で、週末ごとにかわるがわる郊外へと連れ出してくれたのです。うれしいことに、彼女たちの家族と話したり一緒に料理を作ったりする時間は教科書を読みあげるだけの授業より断然楽しく有意義でした。

教科書さえ手に入れば、独学でも知識は吸収できます。それならば、いっそ大学の外に拠点を移して地域社会のなかにもっと入ってみよう——そんな訳で、私は留学期間の10か月

のうち約 6 か月をキャンパスの外でのフィールドワーク（インターン含）に費やすことに決めたのです。



図 6: 友人フェリシアは、ほぼ毎週末姪っ子たちの世話をするために郊外の親戚の家に帰っていた。写真では、私の好物であるバンクー（キャッサバとメイズの粉から作る酸っぱいお団子。主食のひとつ。）のつくり方を教えてくれている。

2-3. 留学後半：農村でのフィールドワーク

私が滞在していた地域は大きく分けて 2 つ。インターンをしていた Eastern 州の Akuapem Hills という山がちな地域、そして第二の故郷 Manso 郡 Adubia 村です。Adubia 村はガーナ中部 Ashanti 州の州都 Kumasi から 3 時間ほどの熱帯雨林に囲まれたド田舎にあります。わたしは Adubia 村を主なフィールドとして、血縁を越えた「家族」の形についての研究を行いました。

アフリカの家族というと、伝統的な大家族のイメージが強いかもしれませんが。しかし、都市化とグローバル化の影響は確実にガーナの農村部にも押し寄せています。進学や就職（出稼ぎ）、病院への通院などの生活上の都合でたくさんの人が都市部と農村を行き来しているのです。では、昔ながらの大家族は縮小・消滅してしまったのでしょうか。そして、ガーナも日本のように無縁社会化する運命にあるのでしょうか。個人的にはそうではないように思います。

そもそもガーナでは、「家族」の定義がすごく広いのです。血がつながってなくても親しい人は「ブラザー」「シスター」と呼んで家族同然に扱うし、逆に面識のない血縁を頼りに都市へ出てきて一緒に暮らしたすこともあります。このような事例に触れるうちに、私は「もともと柔軟なガーナの大家族は人々の移動にともないさらに流動性を増し「拡大」しているのではないか？」という問いを抱くようになりました。

これらは、それぞれの滞在地でフィールドワークを行った結果考えたことです（図 7）。町や村へ出ることがなければ、私は日本の固定的かつ閉鎖的な家族の在り方にとらわれて、ガーナの「家族」の全体像がつかみきれないものだとすることにすら気付くことができなかつた



でしょう。町や村の現実、日本人としての思い込みやガーナ社会への幻想を見事に打ち壊し、目を開かせてくれます。フィールドワークで生の生活にふれることは、研究だけではなく時に自分の人生の転機さえも生み出すものです。

図 7: 主食フフ（キャッサバからつくるお餅）をつくエクヤ（仮名）とお母さん。ガーナではよくあることだが、エレンは養子だ。養母とも近所に住む実母とも仲が良い（2019年5月当時）。ガーナ社会のレフキシブルな家族の在り方は私の家族観を大きく変えた。

3. ガーナ大生であるメリット

ガーナ大生を名乗りながらキャンパスには実質4か月しかいなかった私ですが、ガーナ大生であったことには大きな意味がありました。

まず、タイトルの「書を捨てよ」と矛盾しますが、大学の図書館や本屋さんでは現地の興味深い文献が簡単に手に入ります。留学前、私はガーナ人が書いた家族に関する情報はなかなか「ない」と思っていました。しかしそれは違ったのです。「ない」のではなく日本に届かないだけなのでした。農村で暮らしていた留学後半もたまたま大学に出てきて様々な文献を調達できたことは、フィールドワークの大きな手助けになりました。

また、情報アクセスに関する利点としては、良質なフィールドワーク先／インターン先をより簡単に探すことができるという点も挙げられます。日本でアフリカでの活動先を探すのは難しいでしょう。見つけられたとしても、高額な仲介費をぶんどる仲介サイトを經由しないといけなかったり、超ブラックだったり、安全管理がしっかりしていなかったりという話をよく聞きます。しかし、現地で学生として生活する傍ら活動先探しをすればこれらのような問題には悩まされません。

とりあえず学生として向こうに渡ってしまえば、現地でのツテがいっぱいできるからです。協力隊の人、日本企業の人、大学の友だちなどからの紹介をもとに実際の活動の様子を確認してから活動先を選ぶことができます（この方法だったら、「先方から返信が返ってこない！」といらつくこともないでしょう）。手数料を払うどころか、条件によってはお給料をもらうことだってできるかもしれません。さらに、HPなどの発信ツールを持っていないけれど素晴らしい活動をしている現地NGOで地域密着型の活動することも可能です（図8）。必ずしも日本であせって活動先を決めることはないのです。



図 8: 各地域の JICA 協力隊の方を訪問し、活動の様子を見させてもらった。任期を終えた方が NGO を立ち上げ活動をしている例もあったので、そういう団体でインターンさせて頂くのもおもしろいだろう。

「そんなに自由に活動して、派遣留学生をクビにならないのだろうか」と心配する人もいるでしょう。しかし、この点に関してガーナ大学は非常に協力的でした。農村に移り住んで活動するという私の計画をきいた留学生課の人は迷いなく「ノー・プロブレム！」と言い切り、「大学を離れてもあなたを守るように居場所だけ教えてね」と言ってくれたのです。最初に 1 年分払った寮費も、いくつか事務所をたらいまわしにされたものちゃんと返ってきました。

単身で行動していても大学に守られている、というのは大きなポイントです。日本からは目が届かず現地警察も汚職だらけのガーナでは、信頼できる人との縁だけが自己防衛の手段ですが、自分のまわりにいる人（ガーナ人でも日本人でも）が本当に信用できるかはわかりません。正直、デート・レイプなどの犯罪が発生しやすい状況だと思います。そんな中、現地での所属先がはっきりしていてそれに権威があることは、犯罪に対する抑止力になるのです。これはとても大事なことだと思います。

とはいえ、現地の人たちを一方向的に信用できないものとみなすのは失礼な話です。受け入れる側からしてみたら、こちらは身分不確定の外国人。それこそ手放しでは信用できないでしょう。村でフィールドワークをしているとき、公的機関に行くとよく「紹介状は？」と言われました。ガーナの役所はとても権威主義的なので、書類をととても大事にするのです（その割に管理はとても雑だから腹が立ちます。何度もケチをつけられて書き直した書類なのに、すぐにその辺に放られてどこかにいってしまうのがオチなのですから！）。そういう時に「ガーナ大学の生徒です」と言って学生証を見せると一発で通りました。このように、スムーズな調査を行ううえで現地の大学に所属していることはとても有利に働くのです。

一方、役所とは正反対に、村では一度コミュニティに入ってしまうともうよそ者ではありません。拡大する「家族」の一員です。オープンな絆を持つガーナ社会では、たとえあなたの髪がまっすぐで黄色い肌に一重まぶただったとしても、一緒に暮らせば「家族」になれるのです。(図 9)



図 9: 第二の故郷 Manso Adubia 村にて家族と。

4. おわりに

留学には様々な形があり得ます。私のようにフィールドワークに取り組んでみてもいいし、大学での勉強にどっぷりつかってもいいでしょう。趣味やサークル活動を充実させるのも楽しそうです。「〇〇じゃなきゃいけない」「〇〇しちゃいけない」なんてことは、実はほとんどありません。実際、カリキュラムから多少逸脱しても強制送還はされなかったですし、ひとに裏切られて人間不信になっても死にはしませんでした（ひとや自分自身を傷つけないための対策はきちんとしなくてははいけません）。多少世の中のルールから外れても、こころの鈴が鳴る方へ進めばよいのです。きっと大丈夫、人生という船はそう簡単には座礁しません。

2. インターン編

アフリカインターン体験談

吉田 菜摘

アフリカ地域専攻 2013 年度入学

はじめまして。東京外国語大学国際社会学部アフリカ地域専攻 4 年の吉田菜摘です。私は 3 年次修了後から 1 年間休学をして、その間、ルワンダ、続いてケニアでインターンをしていました。2017 年 5 月 22 日（月）6 限の時間帯に、「アフリカインターン体験談」ということで、「アフリカに行ってみたい」と思っている後輩たちにお話する機会をいただきました。今回は、そこで話した内容の一部をお伝えします。

2016 年 2 月～6 月末まで、ルワンダにて、Bloom Hills Rwanda Ltd. というみずほ情報総研とトヨタ自動車が共同で設立した会社でインターンをした後、同年 6 月末～12 月初めまで、ケニアにて、CanDo（アフリカ地域開発市民の会）という日本の開発協力 NGO でインターンを経験しました。発表では、それぞれのインターンを始めるに至る経緯、業務内容、現地でのエピソードを話したのち、開発援助に興味をもつ後輩が多いのではないかと考え、ケニアのインターンで私が携わっていた事業について説明しました。

私がインターンをしていた CanDo では現在、マシंगा県での外務省日本 NGO 連携無償資金協力（注 1）、マシंगा県での草の根技術協力事業（JICA）（注 2）の二つの事業を並行して進めています。これらの事業は、公立小学校の教室建設・補修を行う教育活動、保護者に野菜の種の植え方などの研修を行う環境活動、保護者・教員にエイズ研修などを行う保健活動の三分野の活動が軸となっています。そのなかでも、私が主に携わっていたのは公立小学校の教室建設・補修を行う教育分野の活動です。

突然ですが、問題です！以下に、3 つの異なる教室 A・B・C の写真を 3 枚ずつ載せます。CanDo の事業で補修された教室はどれだと思いますか？

注 1：事業期間は 2015 年 3 月 5 日～2018 年 3 月 4 日

注 2：事業期間は 2013 年 10 月 1 日～2017 年 9 月 30 日

(以下教室 A の 3 枚の写真、撮影：吉田菜摘)



(以下教室Bの3枚の写真、撮影：吉田菜摘)



(以下教室Cの3枚の写真、撮影：吉田菜摘)



参加していた1年生2人に聞いてみたところ、1人目は、教室BがCanDoの事業で補修されたものではないかと予想。自分が親であれば、Bの教室であれば子供を安心して通わせることができるから、と答えてくれました。2人目は、教室Cと予想。少し汚いから、と理由を答えてくれました。

正解は…教室Aでした。

見事に、2人とも間違えてくれました！

補修前よりも明るく、風通しがよく、強度の強いものがCanDoの教室です。ちなみに教室Bは、新国会議員選挙区開発基金(National Government Constituency Development Fund)を使って建設されたものです。教室Cは、CanDoの事業を行うニーズのある教室で、この学校では、私の任期中に、保護者との会議や研修会を実施していました。

CanDoは、3つのうち最も綺麗な教室Bを目指しません。CanDoが目指すのは、<援助の再現性>です。つまり、将来ほかの教室に補修のニーズが生まれたとき、CanDoの事業を糧に、保護者たちが自ら補修を行ってほしい、と考えています。

「援助の主体性」「草の根」などと言いますが、CanDoの活動でも主体となるのは保護者あるいは地域社会です。CanDoからはセメントや鉄筋などのハードウェアを供与しますが、教室建設・補修に使用する砂、レンガ、砂利の収集、建築職人の雇用、資材の管理・記録などはすべて保護者が行います。たとえば1教室の補修のために、一輪車で砂利130杯以上、砂100杯以上、レンガ約1,400個を保護者が用意します。1つの教室を補修するために、保護者は多くの役割を担い、時間を費やします。

彼らが生きる地域の発展や、彼らの子供たちにより良い教育環境を与えたいと思っている保護者が多くいる一方で、「お金がない」というのが、それを実現できない1つの大きな理由になっている証拠ではないでしょう。しかし、「CanDoの事業を通して保護者が学校に集まれるようになった」「集金がスムーズに進むようになった」など、保護者の学校行事への参加率が向上した、との声を何度か聞きました。CanDoの事業は、資金面だけでなく、多様な面から<援助の再現性>を追求している事業だと思っています。

私は、アフリカで過ごした時間をなにかに活かしたいとは思いません。そうではなくて、カラッとした乾季の昼下がりの絵に描いたような青い空とか、乗り合いバスや街中で流れる音楽、朝ごはんに飲むミルクティーなど、自分が見たこと、感じたこと、触れたこと、それらの経験すべてを消化してしまうことなく、自分のなかに生かしつづけることで、これからもアフリカに向き合っていきたいと思います。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

セネガル滞在記 ～よく働き、よく遊ぶ～

川口 里紗

アフリカ地域専攻 2016 年度入学

①はじめに

みなさん、はじめまして。アフリカ地域専攻 2016 年度入学で 4 回生の川口里紗です。2019 年 3・4 月、セネガルで 2 ヶ月間のインターンシップを行いました。この体験記では、インターンシップの様子やセネガルのおすすめスポットを紹介します。少しでも、これから留学やインターンでセネガルへ行く方の参考になればと思います。

セネガルといえば、2018 年サッカー W 杯で日本と戦ったのが記憶に新しいと思います。ご存知の方も多いと思いますが、アフリカ大陸の最西端にある国です（写真 1）。



写真 1: セネガルは、西アフリカの西端に位置する。

国民の 90%以上がイスラム教徒で、公用語はフランス語です。現地の人同士の会話は、ウォロフ語と呼ばれる現地語とフランス語が両方使われていることが多いです（ウォロフ語以外の言語もあります）。

独立以来、クーデターなどを経験しておらず、アフリカの中では比較的安定しています。人々は「テランガ」というおもてなしの精神を大切にしており、治安も非常に良いです。

首都はダカールで、私はここに滞在していました（写真 2）。ダカールはとても発展していて、割と何でも手に入ります。

また、後ほど詳しく紹介しますが、美味しいレストランもたくさんあります。ただ、イスラム教徒が多い国なので、豚肉はあまり見かけませんでした。海に面しているため、新鮮なお魚料理が多かったです。



写真 2: セネガルの地図。ダカール (Dakar) は、セネガルの中でも西端に位置する。

②インターンシップについて

私は休学をせずに、春休みを使ってインターンをしました。外大のとっても長い長期休みを有意義に過ごしたい！と思い、部活の引退後にすぐ行こうとインターネットで探し始めました。

そんな時に見つけたのが、日本のとある NGO のセネガル支部でのインターンです。内容としてはフランス語圏アフリカから日本やイギリスの大学へ留学する生徒に、その準備として授業を行うというものです。

アフリカの様々な国から来る生徒たちとコミュニケーションをとれるという点がとても魅力的でした。また、フランス語は必修で少し習っていたので（超初心者レベルですが...）、実践的に使ってみたかったというのも理由の一つです。

ここでは仕事内容などはあまり詳しく話せないのですが、仕事がある日の 1 日のスケジュールをお伝えします。

- 7:30 起床・朝食
- 9:00 出勤
- 13:00 学生やスタッフと一緒に昼食
- 17:00 退勤
- 17:30 同僚とカフェで作業
- 18:30 買い物・夕飯作り
- 19:30 同僚と一緒に夕飯
- ～21:00 同僚とお喋りしながらのんびり
- 23:00 就寝

オランダ人、エジプト人、フランス人のインターンと共同生活をしていたので、彼らと一緒に行動することが多かったです。週末はよくみんなで飲みに行って、色んな話をしました。

とても優秀な人ばかりだったので、自分と違うバックグラウンドを持った同じ世代の人たちの考えを知ることができてすごく刺激を受けました。改めて、多国籍な環境は楽しい！と感じました。(写真3)



写真3: インターンの同僚たちとの食事風景。

また、生徒たちとの思い出は本当にかげがえのないものです。私は先生として彼らに何かを教える側でしたが、生徒たちの鋭い意見や新しい視点からたくさんのことを学ばせてもらいました。彼らの勉強熱心な姿にはたびたび心を打たれました。年齢も近いので、これから何十年後もずっと仲良くしていきたいなと思っています。

仕事には慣れないことばかりで悩むことも多々ありましたが、正規スタッフの方々に支えられて、大変充実した日々を送ることができました。国際的な環境で働くことの大変さや面白さを知ることができたのはこのインターンでの大きな収穫の一つです。

今インターン先を探している人で私が参加したプログラムが気になる方は、ぜひ直接お尋ねください！

③セネガルの印象

- ・人が優しい&オシャレ

セネガル人は本当に暖かいです。困っていたら助けてくれますし、知らない人でも挨拶をしてくれます。さすが、おもてなしの心を大切にする国です。また、拙いフランス語・ウォロフ語で話しかけても一生懸命理解して会話を続けてくれようとしてくれたのがすごく好印象でした。

場所にもよりますが、物売りの人もしつこく言い寄ってくることはあまりなかったです。買いたくないときは、"Non, merci"（「結構です。」）と言えば大抵すぐに離れてくれます。（ただ、サンダガマーケットという布市場での客引きは本当に疲れるので行く方は覚悟してください笑）

そして、男の人も女の人もスタイルが良くてお洒落です！毎週金曜日はセネガルの伝統衣装を着る習慣があり、特にカラフルで綺麗でした。（写真 4）



写真 4: 伝統衣装を着たこどもたち。

・海と夕陽が美しい！

セネガルは海に面しているため、たくさんのビーチがあります。週末は色んなビーチへ行き、底が見えるほどの綺麗な海で海水浴をしたり、のんびりと眺めたりしていました。夕方7時ごろになると、大西洋に沈む大きな太陽を見ることができます。オレンジ色に染まる空が本当に美しいです。（写真 5）

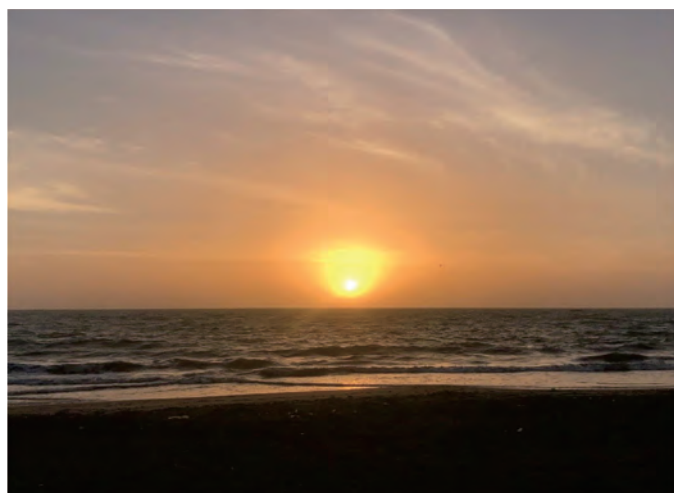


写真 5: 夕陽が大西洋に沈む

・ご飯が美味しい！

セネガル人はお米をよく食べるということもあり、ご飯がとっても美味しかったです。チェブジェンと呼ばれる炊き込みご飯や玉ねぎをたっぷり使ったヤッサ、シンプルな焼き魚などなど。あまり癖がなく美味しいと感じる料理ばかりでした。魚介類やその出汁を使った料理が多いので、日本人の口に合うのだと思います。（写真 6）

また、セネガルを代表するビールである Flag や Gazelle は安くとても飲みやすいです。



写真 6: 手際よく素手でウニを割るおばちゃん。新鮮で美味しかったです。

③セネガルガイド

このインターン期間中は、「よく働き、よく遊ぶ」を意識して、週末は色んなところへ観光に行きました。その中でも個人的におすすめなスポットをご紹介します！セネガルへ行く方はぜひ参考にして、有意義な休日をお過ごしいただければと思います。

【おすすめスポット】

1. ンゴール島 (Île de Ngor)
2. マメールビーチ (Plage de Mamelles)
3. ゴレ島 (île de Gorée)

主に島とビーチですね。毎週末色んなビーチに行ったおかげでこんがりとお肌を焼きました(笑)。

1のンゴール島は、ボートで5分程度の北にある島です。小さな島ですが、お散歩をしながら、可愛い街並みを楽しむことができます。ビーチもあって泳ぐこともできます！ちなみに私はここで泳いでる時に、足の裏にウニが刺さりました。みなさんも海に見惚れすぎて足元で大惨事が起きないようにお気をつけください。

2のマメールビーチは、泳ぐのもよし、ビーチでのんびりと音楽聴いて本読むのもよし！そこまで広くはないですが、気軽にバカンスの雰囲気味わえるような場所です。お酒落なバーもあるので、友達と

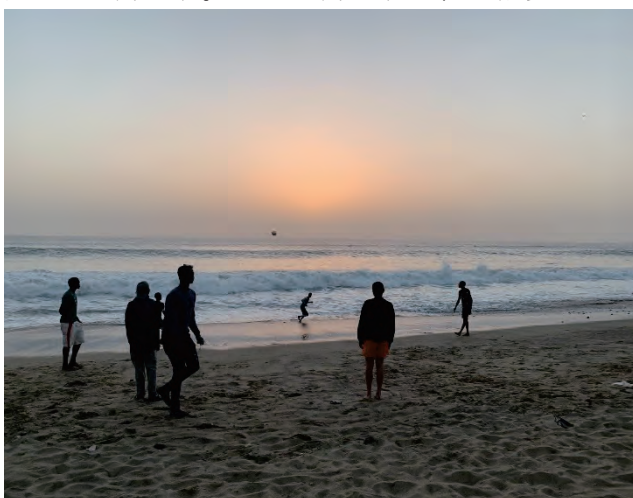


写真 7: マメールビーチ

ファタヤ（サモサのような揚げた軽食）をつまみながらビールを飲むのもおすすめです。週末は人が多いので、静かに楽しみたい人は平日に行ったほうが良いと思います。（写真7）

3のゴレ島は、聞いたことのある人も多いのではないのでしょうか？奴隷貿易の拠点となった島で、ここから多くの奴隷たちが新大陸へと連れていかれました。その悲しい歴史を現代に伝えるため、1978年に負の世界遺産に登録されました。しかし、そんな悲惨な過去が本当にあったのかと疑ってしまうくらいに、穏やかで美しい場所です。街並みがカラフルで、どこを取っても綺麗な写真が撮れる観光スポットです。「インスタ映え」というのでしょうか。ダカールの南にあるフェリー乗り場から15分くらいです。（5,000CFA）パスポートのコピーが必要なので忘れずに！（写真8）



写真8:ゴレ島を歩く

【おすすめレストラン】

Chez Loutcha（いつも賑わってる。）

Seul 2（お肉が美味しい。）

L'Endroit

Pizzola

Restaurant Shabat（韓国料理。店員さんが優しい。）

Lulu Café（お洒落な今どきカフェ）

美味しいアイスクリーム屋さんもたくさんあるので探してみてください。

ダカール内は基本的にタクシー移動が便利です。だいたい1,500～2,000CFAで行けるので、頑張ってドライバーと交渉してください。あとは、カラフルな乗合バスはいつもぎゅうぎゅう詰めで、地元の人たちがよく使ってるイメージです。わたしも乗ってりましたが、目的地にちゃんとたどり着くのかと降りるまでドキドキでした（笑）

ダカールから離れたところにある観光スポットも少し紹介します。どこも Garage Pikin（=Beau Marché）というバス・タクシー乗り場から行くことができます。個人的にはミニバスよりも、Sept place と呼ばれる乗合タクシーの方が早くておすすめです。安くて可愛い宿もたくさんあるので、ぜひ探してみてください。

- ・ラックローズ（Lac rose）：ピンク色の湖。塩分濃度は死海以上！中に入って浮くことができるが、気づくと荷物が塩だらけ。
- ・シネサルム地区（Sine Saloum）：マングローブと静かな海。セレール族の人たちと仲良くなれる。ジョーガンジャル（=セレール語でありがとう）と言ったら喜ばれるかも。（写

真 9)



写真 9: シネサルーム地区の漁村風景

- ・貝殻島 (Joal Fadiouth) : 発音はジョアルファドゥート。地面が全部貝殻でできた小さな島！イスラーム教徒とキリスト教徒が共存しており、島につながっている共同墓地がとても美しいです。
- ・サンルイ (Saint-Louis) : 世界遺産に登録されている港町。4,5 月に大きなジャズイベントがあります。(写真 10)



写真 10: サンルイにてアフリカ地域専攻の同期集合。
それぞれの留学先・インターン先から遊びに来てくれました。

以上、滞在中に訪れることができたおすすめスポットを紹介しました。特にダカールは毎週末楽しいイベントがたくさんあるので、ぜひ Facebook で検索してみてください！（写真 11）



写真 11：インド大使館のイベントに参加した際の写真

③さいごに

いかがでしたでしょうか。滞在体験記といよりもガイドブックになってしまいましたが、楽しんでいただけたら幸いです。

アフリカ地域専攻に入学してから、アフリカの文化や社会事情を学んできましたが、やはり日本で耳にするアフリカに関するニュースをどこか他人事のように受け取っていた気がします。しかし、今回の滞在中を通して、現地の人と仲良くなったり、アフリカの国々に友達が出来たことによって、今までよりも彼らの周りで起こっていることが身近に感じるようになりました。

そして、優秀な同僚と生徒に囲まれてインターンを行う中で、自分の知識量や考える力の甘さを改めて認識しました。今年度で大学は卒業しますが、これからも彼らと並んで議論ができるようにしっかりと学び続けたいです。

たったの2ヶ月、最初は短すぎるかな？と少し不安でしたが、非常に濃い経験ができたと思います。1つだけ後悔しているのは、フランス語をもっともっと極めておけば良かったということです…。

ですので、これからセネガルに行こうと考えている方は、ぜひフランス語をしっかりと学んでから行ってください！また、ウォロフ語も身につければ、現地の人とより密に関われると思います。頑張ってください。

それでは、最後までお読みいただきありがとうございました。

ジェレジェフ！（ウォロフ語で「ありがとう」）

農業商社スタートアップ「Degas」での 社会事業インターン

田口 暢亮

東南アジア第1地域専攻 2016年度入学

目次

1. はじめに
2. ガーナとの出会い
3. 何故、農業なのか
4. 何故、ガーナなのか
5. 「DEGAS」の事業内容
6. 私が感じたこと
7. 理論と経験のバランス

1. はじめに

これは私が2019年6月の約1か月間、ガーナで社会事業に取り組む牧浦土雅さんと偶然出会い、彼が立ち上げた農業商社スタートアップ「Degas」でアグリビジネスの社会事業インターンに取り組んだ際の記録である(写真1)。2019年4月から半年間休学し、アジア・アフリカ諸国を周る過程での取り組みである。世界平和への貢献を志す私にとって、非常に有意義な体験となった。



写真1：牧浦土雅さんとDegasの社員たちと筆者

社会事業の定義は様々であるが、ここではソーシャルビジネスという意味で使っている。社会問題の解決を目的としたビジネスであり、寄付金などの外部資金に頼らずに自らが事業収益を上げながら継続的に問題解決に取り組むビジネスである。新しい仕組みを開発・活用

し、新しい社会的価値を創出するのだ。また、アグリビジネスとは農業の生産だけでなく、生産の前段階である土地、種苗、設備の準備から、生産後の過程である農作物の流通、販売、マーケティングを含めた、農業関連トータルのビジネスを指す。

農作物を作ろうと思っても場所や苗が確保できなければ始められないし、いくら商品作物を作ってもそれが売れなければ自分の儲けにはつながらない。自分の暮らしの為だけに営む自給的農業であればさほど重要ではないかもしれないが、生計を立てる手段としてより大規模かつ利益を追及するための商業的農業、さらには企業的農業においては、生産の前後の段階がより重要になってくる。

私の人生の目標は世界平和を実現するために、各地の紛争や社会問題の解決に何か1つでも貢献することだ。世界の人々は相互に違う言葉、「人種」、バックグラウンド、価値観を持って暮らしている。お互いの違いが疑念を生み、対立へと発展し、紛争が勃発するケースも多い。しかし、その違いを称賛し合うとはいかないまでも、尊重し合い、何の気兼ねもなく肩を組み合せて笑い合えたらどんなに素晴らしいことだろうか。そんな世界を完全に実現することは不可能に近いが、その方向へ近づくように何か1つでも紛争、或いは社会問題の解決に携わりたいというのが私の考えである。

このような考えに至った契機は大きく2つある。

1つは、私が中学2年生の頃。中東で「アラブの春」が起きた。反体制運動が激化するなかで子供たちも犠牲になった。血だらけになりながら泣いている子供たちの様子が、毎日新聞にも載っていた。自分は勉強も部活も満足にできる環境にいる一方で、この子供たちは明日の命も分からない状況にある。このギャップは何だろうと私は中学生なりに感じた。夏休みの社会科レポートの課題で中東のテロリズムについて（提出日を大幅に過ぎながら汗）納得いくまで調べ提出したら、社会科の先生が内容について大いに褒めて下さった。今もそのレポートは僕の所に戻ってきておらず、その先生が後輩たちに紹介して下さっているようだ。

もう1つは、私が浪人中に触れた予備校の先生の言葉だ。定年間近の世界史の先生はこのようにことをおっしゃった。「日本は戦後70年間ずっと平和主義を保ってきた。その分世界からの信頼は厚い。だからこそ日本人は、武力紛争で対立する二者の間に入って第三者として仲立ちする役割を担うことができる。長い間世界史を教えてきた私の願いは、この教室から正確な歴史認識と平和の重要性をしっかりと主張できる人材を輩出することです。」偶然一番前の席で聞いていた私は強く感銘を受け、その道で頑張ってみようと思うに至ったのだ。

しかし、メディアで得る情報と実際の現地の状況や地元の人々の意見には、往々にして大きなギャップがあると考えた私は、大学2年生時に単独で世界一周に取り組み、各地の社会問題や紛争の現状を体感し、地元の人々の意見を聞いた。今回のインターンは（偶然始まったとはいえ）その第2弾という位置付けで出発した旅の過程の1つである。

2. ガーナとの出会い

2017年、大学2年生時に世界一周していた際、アディスアベバからカイロに向かうエチオピア航空のなかで、私は機内誌「Selamta」2017年9/10月号を読んでいた。斬新かつカラフルなデザインで革製のトートバッグを紹介した記事が目にとまった。

アメリカの住宅関係専門テレビチャンネル「HGTV」に人気番組「Fixer Upper」がある。老夫婦「Chip & Joanna」が古い家をリノベーションするという内容だが、特に奥さんの Joanna さんのセンスが素晴らしく、ファンも多いそうだ。この老夫婦がテキサス州ウェイコで経営する雑貨店「Magnolia Market」も大人気で、当時大きな話題を呼んでいた。Joanna さんが愛用し「Magnolia Market」を通じて多くの西洋人が使うようになった革製のバッグは、実はエチオピアで作られている、という紹介文からこの記事は始まっていた。すこし、記事の内容を紹介してみよう。

このバッグを作っているエチオピアの服飾会社「Rosa Abyssinica」を立ち上げたのは、Yamerote Mengistu さんだ。彼女は 2004 年にアメリカからエチオピアに帰国したのち、教育を受けても働き口のないエチオピアの女性たちを母国に留まらせるために、海外の事業家たちから注目を受けていたエチオピア産皮革を使った服飾品を作ろうと思い立ち、会社を立ち上げた。彼女は記事のインタビューのなかで、「海外の消費者がエチオピアの革製品を気に入り、政府も援助してくれれば、わくわくすることがたくさんできる。

エチオピアの革製品は安いので財布にも優しいのよ」と述べている。「Magnolia Market」など他の会社とも提携し、2017 年現在も市場を広げているという。首都のアディスアベバを拠点に 40 人の女性を雇用しているそうだ。卸売りやオンライン・ショップも開設している。Yami さんはこうも言っている。「人々は社会的責任に沿った会社や製品を求めている。自分は他の人とは違うことをしている。誰かの人生を変えている実感も得られる。一方で、作っている女性たちも、自分たちの仕事に自信を持っている。」近年、企業側も消費者側も商品に社会的責任（CSR: Corporate Social Responsibility 企業の社会的責任）や質の高さを求めるようになってきている。その流れに沿った経営戦略だ。

エチオピアの皮革産業では「Rosa Abyssinica」のみならず、多くのベンチャー企業が立ち上がっている。エチオピアは世界有数の家畜資源に恵まれている。飼育頭数は羊が世界第 10 位、牛が世界第 5 位、山羊が世界第 7 位（2018 年、グローバル統計ノート）となっている。そんなエチオピアでは、これまでも未加工の皮革を輸出する第一次産業としてはある程度利益を上げてきた。しかし輸送途中で傷んで使えなくなるなど、「エチオピア・皮革ブランド」としての皮革産業ではなかった。

転機は 2008 年。未加工の皮革の輸出税が 150%に引き上げられると、皮革産業分野では加工済みの消費者向け製品を輸出するようになった。アディスアベバにある「皮革産業開発研究所」も、幅広く技術やノウハウを提供している。こうした産官学連携の施策が功を奏し、今や国際的にビジネスを展開するまでになり、「エチオピア・皮革ブランド」が確立されつつある。その皮革製品の質の高さは、エチオピアには美しく素晴らしいものがまだまだたくさん眠っていることを国際市場に示唆している。

私はこの記事を読んで衝撃を受けた。自分たちの強みを生かした産業・雇用の創出、手触りの良さそうなカラフルなバッグ、生き生きと働く女性たち。2017 年当時、一人当たり GNI（国民総所得）は約 1,900 米ドルで世界第 160 位の経済水準にあるエチオピアで、既にこのような産業が生まれているのだ。多様性に満ちたアフリカ大陸には、ファッション性に限らず、他にどんな可能性があるのだろうと機内で 1 人わくわくしたのを覚えている。エチオピ

ア以外のサブサハラ・アフリカの国々についても知り、サブサハラ・アフリカがどんな可能性を秘めているのか探りたくなった。

そんな折に SNS で発見したのが、原ゆかりさんが共同代表を務めるガーナの NGO 団体「MY DREAM org.」(mydream.tokyo) だった。ガーナ北部のボナイリ村で地元の女性たちが作った綿製品をガーナのみならずアメリカや日本にも販売し、その収益で村に学校や保健所を建て、子供たちが夢を持てるような学習環境・衛生環境を整えようという活動をされている。これを見たとき、私は「まさにこれだ!」と思い、この団体の活動についてもっと知りたくなった。原さんは東京外国語大学の先輩で元々外務省の出身でもいらっしゃるということで、NGO の活動やこれまでの国際活動についてもお話を伺いたいと連絡を取り、ガーナの首都アクラでお会いすることになった。2019 年 6 月のことである。

6 月 1 日に飛行機でアクラに到着し、郊外にあるホステルに荷物を置いて、その足でショッピングモール近くにある日本食レストラン「SAKAMOTO」に向かった。ちょうどガーナで活躍されている日本人の集まりがあり、原さんはその場に私を招待して下さった。そのパーティには国連や NGO で活躍される方、総合商社の駐在派遣員、青年海外協力隊、社会事業を立ち上げている方などがいらっしゃった (写真 2)。



写真 2: 原ゆかりさんと青年海外協力隊の方々 と筆者

学生は自分 1 人だった。その場で偶然知り合った 1 人が、社会事業家の牧浦土雅 さんだったのだ。ガーナで何か社会貢献事業に携わりたいと目論んでいた私は、土雅さんが立ち上げた農業商社スタートアップ 「Degas」 で 1 か月間インターンとして参加させて頂くことになった。残念ながら原さんの NGO 組織は予定が詰まっていた、私が業務体験をさせて頂くことは難しかった。

以下の 3 節、4 節、5 節では、私が今回約 1 か月間のインターンを通して土雅さんや Degas の社員たちから学んだことを、土雅さんから教えて頂いたことをもとにまとめていく (下記動画も参考)。

[YouTube 動画「ガーナで農業のインターンをやってみた!」\(筆者作成\)](https://www.youtube.com/watch?v=N9-T2OeIJeA)

<https://www.youtube.com/watch?v=N9-T2OeIJeA>

3. 何故、農業なのか

「Degas」の経営理念は「Changing People's Lives Dramatically」だ。1 日あたり 2 米ドル以下で暮らす貧しい人々の生活を劇的に変えるために、まずは彼らの生業である農業を変革するべく 2018 年 11 月に立ち上げられた。そのミッションは 2 つ。小規模農家の所得向上と、食料安全保障の達成だ。食料安全保障とは世界中の 72 億人の人たちが 1 日 3 食摂取できることだ。サブサハラ・アフリカだけで約 6 億人いる小規模農家の食糧安全保障は喫緊の問題だ。

土雅さん自身、バックグラウンドはIT系で過去には途上国のオンライン教育ビジネスなどを展開していた。しかし教育に価値を置かない地元の人たちに、さらに1,000円かかるオンライン教育サービスを買ってもらうのは難しかった。小規模農家にとって子供は労働力であり、学校に通わせると労働時間が奪われるため忌避されるのだ。そこでまず、土雅さんは彼らの所得を上げようと考えた。

衛星画像データを集積してアフリカの農地を解析し、収穫量を割り出し小農家に提供しようとした。そのデータをもとにバイヤーと交渉し、農業活動の一助になると考えたからだ。しかし彼らの反応は、「自分たちの収穫量なんて分かるから解析データは要らない。それよりも家の前に積んである去年の売れ残りのトウモロコシを買い取ってくれよ。」というものだった。

そこでまずはアグリビジネスに着手することになった。要するに彼らは、トウモロコシ収穫量の把握や増加を望んでいるのではなく、生産したトウモロコシを買い取ってくれる人こそを必要としていたのだ。衛星データや土地解析などは二の次で、今すぐ買い取ってほしいというのが彼らの望みだった。

生産のノウハウは心得ていても、生産物を買って取ってくれる人がいなければ一向に収入は増えず、結果として地方小規模農家の彼らは貧しいままなのだ。彼らにとって今最も必要なのは、農業サプライチェーンの構築支援なのだ。もっと簡単に言えば、彼らは家の前に積まれた大量の売れ残りトウモロコシではなく、現金が欲しいのである。

このような地方の問題はサブサハラ・アフリカ各国に共通する問題だ。首都の事情はそれぞれ違うが、「地方の問題＝農業周辺の問題」はガーナ以外のサブサハラ・アフリカ諸国にも共通している（写真3）。農薬や肥料の不足、サプライチェーンの欠如など、生産労働そのものというよりもむしろその前後の過程に問題があり、商品作物としての農作物が換金されない。



写真3：ガーナの農村部。通称「きのこハウス」は藁と泥と木材からできている。

結果として地方部はいつまでも貧困に苦しみ、産業の高度化やインフラ整備、ITシステムの導入など夢のまた夢だ。だってそもそもこれらに投資するだけのお金がないのだから。地方の貧困、及び未開発の根源は「農業周辺の問題」に帰結する。逆に言えば「地方＝農業」に集中して社会事業を展開すれば、自然と小規模農家の収入も上がり地方の開発進展の基盤が

安定し国内経済の底上げにつながるのだ。

ところがここ 10 年で地方は全く変わらなかった。例えばルワンダは、首都キガリに大量の中国資本が入って目覚ましい発展を遂げたが、地方の農民は未だに貧困に苦しむ。これまで国際機関や、NGO、NPO、民間企業も入ってきたが、何も変わらなかった。それなら違う人が違う手法で新しいムーブメントを起こし変えていかないといけないと考えた。

土雅さんにとってアフリカの貧困を解決することは、願望ではなく使命なのだ。彼は恵まれた生い立ちの中で、「恵まれていたからこそ、平等な機会を得られる世界を作りたい。」との想いを抱くようになった。この社会事業への取り組みも、ビジネスで成功したい、お金持ちになりたいという気持ちは全くなく、誰かがやらないといけないことだと考えている。

サブサハラ・アフリカ人口約 10 億人（2019 年現在）の 8 割が 1 日 2~3 米ドル以下で生活している。平均月収は 100 米ドルにも満たない。このマジョリティの生活を変えるには農業しかないのだ。サブサハラ・アフリカの約 6~7 割が農業従事者なのである。インフラ開発を行っても、使う人が育たなければ無意味だ。東南アジアでは中国からの借款でインフラを作ったものの、使われずに返済できず、その代わりに運営権 90 年分を中国が握るという失敗が多い。

アフリカのインフラ開発も今のままでは二の舞になる。IT 系で農業開発するにしても回線すらない環境なのであって、まずはオフラインの仕事で農村の人と信頼関係を構築する必要がある。工業やサービス業へと産業を高度化させるなど現状では不可能だ。アフリカは何もかも不足している。

諸問題を根本的に解消するには、まず農業から着手するしかないというのが土雅さんの信念だ。農業サプライチェーンの構築支援こそ、人々の暮らしとあらゆる産業の基本である第一次産業の農業生産を通して、地方の小規模農家が収益を上げ、サブサハラ・アフリカの地方部で今後経済発展が進んでいく基盤となる社会事業なのだ。

農業サプライチェーンの構築支援がサブサハラ・アフリカ全域で求められているからこそ、大きな事業規模で社会に与えるインパクトを大きくする必要がある。例えば 100 億円売り上げる場合を考える。都市部と農村部では 1 人あたりの経済価値、すなわち 1 人あたりの労働生産性が違う。例えば都市部だとおおよそ 1,000 円で、 $1,000 \text{ 円} \times 1,000 \text{ 万人} = 100 \text{ 億円}$ となる。

一方地方部ではおおよそ 100 円で、都市部と同等の資本を生み出すためには $100 \text{ 円} \times 1 \text{ 億人} = 100 \text{ 億円}$ で 1 億人の人口が必要となる。すなわち地方で事業を展開するには、1 人あたりの労働生産性の低さを補うだけの事業規模が必要となる。そのため「Degas」は「面」を取ることを重視する。都市部だけに限定した「点」ではなく、広範囲の地方＝「面」に事業を展開してこそ、ビジネスとして成立するし、社会的インパクトも大きくなるのだ。

社会事業にとって「事業規模＝社会的インパクト」である以上、事業規模の拡大を追求するのは当然だ。「Degas」もまた多くの資本を調達して事業規模の拡大を追求し、大手企業が入らない地方部でのマーケットシェアを広げて競争優位性を高めるために泥臭く活動している。その分のコスト（移動費、輸送費、人件費）も大きくなるが、「面」での事業範囲を獲得すると同時に社会的インパクトを大きくするためには、地方でアグリビジネスを展開するのが論理的かつ効果的だ。

4. 何故、ガーナなのか

西アフリカのガーナはサブサハラ・アフリカ諸国の中でも比較的政情が安定している。人口に比例する市場規模を考えると、ナイジェリア（約 2 億人）やエチオピア（約 1.1 億人）、コンゴ民主共和国（約 8,500 万人）で展開するのが適当だろう。しかし現在の政情と「Degas」の事業経験から考えると、まずはガーナで始めるのが妥当と言える。ガーナは、1957 年サブサハラ・アフリカ諸国で初めて、現地人が中心となってヨーロッパの宗主国から独立を達成した国家だ。

初代大統領エンクルマはアフリカ統一運動を推進した。2019 年現在の総人口は約 3,000 万人。うち 1,000 万人程が地方の農民だ。地方行政区分は 10 の州に分かれており、「Degas」が事業拠点としているのは、タマレが州都のノーザン州、ボルガタンガが州都のアップーイースト州、ワが州都のアップーウエスト州だ。

ガーナ北部の土壌は、南部のアクラ周辺よりも比較的肥沃である（写真 4）。熱帯雨林気候の大量の降水で養分が流出する南部に比べて、北部はサバナ気候で養分の流出が少なく、粒径の小さい土壌であるため養分を蓄えやすいのである。クマシの北側には Ba という肥沃な土壌が広がる。Ba とは細粒状構造型の乾性褐色森林土のことだ。土壌の中で比較的肥沃とされる褐色森林土の中でも土の粒径が小さく、従って土中の養分が流出しにくい。またガーナ北部のほうが南部よりも 10 度ほど気温が高く乾燥しており、乾性土壌となるので良い農作物ができるのだ。



写真 4: 赤土ラトソルが印象的なガーナの風景。乾性森林褐色土は森林地帯に分布しているが、露出した雨にさらされる土壌はラトソルとなる。

サブサハラ・アフリカの農業の一番の課題は、湿度が高いと農作物にバクテリアや害虫がついてアブラトキシシンが付着することだ。これはカビ毒の一種で人間に害なのでバイヤーは買ってくれない。農作物の 4 割ほどは捨てられてしまう。アブラトキシシンはアフリカ全土の問題だ。

しかしガーナ北部は乾燥して良質なコメやトウモロコシ、マメが生産されるため、「Degas」も北部を拠点とする。ガーナで流通する農作物の 3, 4 割は北部で生産される。トウモロコシは、西アフリカやガーナの市民の食生活で主に消費される重要な食糧作物の 1 つだ。ガーナではこねてパウダー状にし、バンクーやケンケ、フフなどを作って 1 日 2 食の主食とする。カロリーも栄養価も高いので、栄養が不足しがちな貧困地域においても重要な食糧となる。

中米の肥満率が高い原因の 1 つは、トウモロコシで作られたタコスだという説も有名だ。また一方では家畜の飼料にもなる。ギネスなどのビールの原料にもなるし、ベビーフード用にもなる。食糧作物としての質の高さとその他の分野への汎用性の高さが、トウモロコシが世界三大穀物である裏付けであり、西アフリカでも重宝される所以である。ちなみにこの地

域ではトウモロコシの他に、元来主要作物であったヤム、キャッサバ、コメも重要な食糧となっている。

5. 「DEGAS」の事業内容

「Degas」の事業は主に2つだ。1つは国内のサプライチェーンを構築することだ。北部の農村部で売れ残っているトウモロコシを南部の都市部のトウモロコシが不足している市場や加工会社に拡販するのだ。もう1つは「Degas」自身がコメ生産を支援する事業だ。農業従事者に農薬や肥料、トラクターなどを提供し、生産したコメの幾分かを対価として譲り受けるというものだ。私は、前者の事業には農村部における買い取り価格の交渉や買い取ったトウモロコシを保管する倉庫の整理などに、後者の事業には契約した農地の視察や農薬、肥料などの引き渡しに同行させてもらった。

ガーナの農業にとって、トウモロコシサプライチェーンの構築は重要な課題だ。タマレやワなどのガーナ北部の都市には多くの農村が分布している。そのほぼ全ての農村でトウモロコシが作られているが、自給だけでは十分すぎるほどの量が生産されている。しかし商品作物としてのトウモロコシの拡販経路が確立されていないのだ。一方で、ガーナ南部にある首都アクラなどの大都市では食糧が不足している。また、ビールやガーナ料理の原料、家畜の飼料としての需要も高い。このような「情報の非対称性」を解消するのが「Degas」の役割の1つだ。このビジネスのポイントは主に3つだ。1つ目は買い取り価格を交渉すること。2つ目は買い取ったトウモロコシに付加価値をつけること。3つ目は拡販する時期を見極めることだ。

例えば、トウモロコシの収穫期である11、12、1月頃に100kg入った袋を農村部で125セディ/袋で買い取る。(※1セディ≒20円)これをそのまま市場で130セディ/袋で売ったら5セディの利益だが、市場のトウモロコシ価格が高騰する5、6月に拡販したり、拡販する前にトウモロコシを磨いたりゴミを取り除いたりしてトウモロコシのグレードを上げることで、より高値で売ることができる。



写真5: USAID が貸し出しているトウモロコシ洗浄機

このグレードの基準は残念ながら詳しく聞かなかったが、ガーナ経済の中でトウモロコシ

のグレードと販売価格相場が決まっています、トウモロコシをグレード3からグレード1に上げることで、140~150セディ/袋で売ることができるようになるという。採れたてのトウモロコシに付加価値を足すことで、15~25セディ/袋の営業利益が出るのだ。1シーズン当たり約数十万袋という膨大な量のトウモロコシを、ガーナ北部全域の農村から買い取るため、150~250万セディの営業利益が出ることになる。

そこから8セディ/回の輸送費や人件費を差し引いて営業純利益とする。これがざっくりとしたビジネスモデルだが、実際はそんな簡単な話ではなく、そこから輸送費や人件費を差し引くと純利益は容易に出せない。そこで規模の経済を働かせるため、純利益を出すためにはより大規模でトウモロコシを販売しないとイケない。

一般的なスタートアップと違って在庫というリスクを抱えなければならない。なぜなら機会損失が発生してしまう場合があるからだ。しかしDegasはそれが競争優位性になると考えリスクテイクしている。より大規模に国内でサプライチェーンを構築するために必要なリスクなのだ。そして機会損失を発生させないためにも、抱えている大量のトウモロコシをいつ市場に売れるかの意思決定が重要になってくる。

コメ生産の支援事業は6月後半の雨期の開始と共に本格化する。ガーナでは大土地所有者が小農家を雇って、植えたり収穫したりする。この大土地所有者に「Degas」が土地、農薬・肥料、トラクターを貸し出すのだ。まず土地について、50kg/袋のコメが50袋/1エーカーで収穫でき、多いときで10人/1エーカーの小農家が雇われる。またこれに対して農薬は1袋弱/1エーカーの量が目安だ。

トラクターは300人ぐらいで1台を共有している。このようにガーナではトラクターが不足しており、そのために小農家は狭い土地しか耕せずに生産量も少なくなってしまうのだ。トラクターはUSAID（アメリカ合衆国国際開発庁。非軍事の海外援助を行う、国務省管理下の公的機関）が民間に貸し出しているものや中国製、インド製のトラクターが主流だ。

銀行から融資を受けて買う人もいるそうだ。トラクターは300万セディ/台ほどなので、600エーカーの土地、すなわち60セディ/袋の12万袋分（=120万セディ）が収穫できれば、2、3年で完済できる計算になる。「Degas」は彼らのために土地を借り、農薬や肥料、営農知識を提供する。

この2つの事業に加えて、農業分野以外での新事業も模索している。例えば畜産業だ。

「Degas」の従業員の1人Faisalが、鶏小屋を経営している。総計4000羽で年間トウモロコシ1tを飼料として消費するそうだ。鶏は1年間卵を産み続けるが、だんだん生む卵が小さくなっていく、そのため2年周期で殺して鶏肉として売るので。卵1個が80ペソ、鶏肉が25セディで売れるそうだ。

この鶏小屋と提携、もしくはこれを買収して新たな事業を展開できるのではないかと新規事業担当マネージャーの1人は考えていた。土雅さんも「nice!」とは言っていたものの、畜産などの地球温暖化に繋がってしまう事業に将来性はないと考えているため、まだGoサインは出ていない。スタッフのアイデアにも耳を貸しつつ、自分たちのためではなく地球環境とサブサハラ・アフリカの人々が共生できるバランスを考えながら、事業を展開していきたいと土雅さんは考えている。

社会事業を0→1で始める際にネックになるのが資金調達だ。多くの社会事業家がここで苦労する。彼らの事業は持続的な資金調達が上手くいくかどうか懸かっている。「Degas」への投資先は日本企業が多い。アフリカでのビジネスに関心はあるものの、何をしたいのか分からない日本企業は多い。その代わりに「Degas」が投資を募り、代わりに事業を進める。

アフリカビジネスに関してシナジーのあるトヨタ、クボタ、コマツ、カゴメなどの日系大企業メーカーもある。土雅さんは資金調達の交渉が得意であるのに加えて、「Degas」の事業も実際に伸びているため、現状は事業成長に必要な資金調達ができている。むしろ土雅さん自身のメインの仕事は資金調達にあるとも言える。

3、4か月に1度日本に帰国する際も、そのほとんどの日程で企業の方との商談や会食を通じた資金調達に奔走する。プレゼン資料や財務諸表も急遽作成することも多い。ぎりぎりのところで社会事業に取り組んでいる。土雅さん自身も数千万円を投資しているが、まだ不十分だそうだ。数兆円単位の売上に伸ばすためには、数十億円単位で調達しないと行けない。

なぜなら「資金調達＝事業規模＝社会的インパクト」であり、社会的インパクトの大きさは、調達資金額の大きさに比例するからだ。土雅さんは日頃からこう言っていた。「社会へのインパクトは、売上と利益の向上である、というモデルを作ることが我々の使命でありミッションだ。」と。

逆に言えば、それだけの大きな期待を背負っている。簡単に途中で投げ出すわけにはいかない。また、シナジーのある日系企業があるといってもその数は少数である。日本はまだアフリカをあくまで潜在的市場と見ており、文字通り“ビッグマーケット”と見ている企業は少数だ。日本がアフリカに進出する道筋を作るためにも、「Degas」が果たしていくべき役割は大きい。

6. 私が感じたこと

約1か月間のガーナでの貴重な経験を通して、様々な体験をさせて頂いた。その中でも特に印象深かった体験が2つある。

1つ目は、トウモロコシを買い取るために農村を訪問した時の体験だ。タマレからタクシーをチャーターし片道約3時間かけて目的地の農村に向かう。ただでさえ舗装されていない赤土のこぼこ道は、雨期明けで水溜まりがたくさんでき、タクシーは激しく揺れた(写真6)。しばらくするとエンジンがショートし動かなくなってしまった。ガーナにおいてさえ分単位で動く土雅さんにフラストレーションが溜まる。その後、近くの村の少年2人がバイクタクシーに乗せてくれて、荷台で激しく揺れながらも何とか目的地の農村に着いた。



写真6: 雨季のぬかるんだ未舗装の幹線道路。
片道3時間かけて農村へ。

地元の農民約 50 人と価格交渉をして「Degas」がトウモロコシを買い取る契約が完了した。その時、農民たちから歓声が上がった。「土雅、ありがとう！ありがとう！助かった！」私はこの光景を目の前にして大きく心を動かされた（写真 7）。やっとの思いで辿り着いた地方の農村では、これだけの農民が「Degas」のサービスを求めている。「社会を変える」というのは、こういうことなのだとも肌で感じた。そして、地道に泥臭く社会事業を進める土雅さんと「Degas」を尊敬した。



写真 7: 契約成立。「ありがとう！ありがとう！」と歓声が上がった。

2つ目は、従業員の 1 人 Nana と夜ビールを飲みながら話した時の体験だ。彼はアフリカとガーナを農業から変革したいという情熱を語った。土雅さんと出会い、彼と一緒に農業でガーナを変えようと決心した。「誰もが知っているように、アフリカは他の地域に比べて貧しく未開発だ。私はこの現状を解決しアフリカを豊かにしたい。そのために農業はとても重要なんだ。」私は彼の情熱と言葉に大きく心を動かされた。

その理由は 2 つある。1 つは心意気の高さである。彼らにとって貧困と未開発は切実な問題であり、だからこそ何とかしてこの現状を打破したいという強い思いを肌で感じた。もう 1 つは、その情熱が「Degas」の理念として社員に浸透していることだ。怠慢業務や農民との契約金着服は多少あるだろうが、ガーナを農業で変えたい、豊かになりたいという情熱は従業員にも共有されていた。そして彼らは機会を与えてくれた土雅さんに感謝していた。アフリカ人自身も自分たちの貧しさを何とかしたいのだが、自分たちだけで抜け出すのはとても難しいのだ。

この 2 つの経験の他にも様々な体験をした。農村に行って、トウモロコシの買取交渉の許可を首長に請うたり、10 エーカー程の田植え予定地を視察したり、トウモロコシを磨いてグレードアップする作業工程を手伝ったりした（写真 8）。これらの体験は私の人生の中でも非常に有意義なものになった。農業を根幹として、直接的で (Direct) 劇的で (Dramatically) 根本的な (Drastic) 社会事業、すなわち机上の知識や理想論「2D=二次元」ではない、地に足の着いた「3D=三次元」の社会事業を肌で感じた経験。この経験が今後の私の人生に大きな意義を持つことは間違いない。



写真 8: トウモロコシ畑で働く農家の子ども

土雅さんに「どのようにしてビジネスを展開しているのか」と聞いたら、「普通にエクセルを見ながら、経理担当の人と一緒に収穫量とか販売価格とかを決めてるだけだよ。」と言った。四則計算とコミュニケーションができれば、誰にでもできる仕事だと。「安く買って高く売る」ビジネスの基本を理解しておけば、誰にでもできる仕事だと。私には衝撃だった。

「Degas」の地に足の着いた社会貢献の在り方は、何となく世界平和への貢献を目標にしていた私にとって目から鱗だった。世界を平和にするためには、経済的に苦しんでいる貧困層が健康で文化的な最低限度の暮らしをできるように食糧の安全保障を達成することが第一歩だ。

今、彼らが必要としているのはお金だ。農業によってお金を稼ぎ金銭的余裕が生まれれば、子供の教育やITを含めたインフラの開発整備、観光資源の開発や産業の高度化に投資できる。教養や他のコミュニティとの交流が深まり、これまで敵視していた他者を尊重する余裕も生まれる。相手を慮る余裕が生まれるだろう。

もちろん「お金が全て」ではない。金銭的余裕が生まれたからといって、その後も自分たちの利益だけを追及するという利己的な方向に向かってしまえば、それが新たな対立を生むことを歴史は証明している。経済発展によって幸福になり他者への尊重の気持ちが生まれるか、あるいは新たな対立により他者を傷つけることになるか。どちらを採るかは当事者に委ねられている。

しかし今のサブサハラ・アフリカの地方農村部には、そもそもその機会がない。「平等な機会を得られる世界を作りたい。」という土雅さんの想いに沿って「Degas」は活動を続ける。現地の人が必要としているか、それをいかに支援するかが最も重要だ。今ガーナの地方農村部で貧困にあえぐ小規模農家が必要としているのはお金であり、トウモロコシを商品作物として換金できるような支援が求められている。

しかし四則計算とコミュニケーションに加えて「やり抜く力」もないといけない。近年提唱されている GRIT だ。心理学者でペンシルベニア大学教授のアンジェラ・リー・パッドワース氏の提唱によれば、「才能や IQ や学歴ではなく、個人のやり抜く力こそ社会的に成功を収める最も重要な要素だ。」として「GRIT 理論」を提唱している。

Guts (度胸;困難なことに立ち向かう)、**Resilience** (復元力;失敗しても諦めずに続ける)、

Initiative（自主性;自分で目標を見据える）、Tenacity（執念;最後までやり遂げる）。この非認知的特性はもちろん普段の字ごとや勉強においても重要だろうが、アフリカでビジネスをすることにおいては非常に重要になる。

先進国の常識で生きていたら1日目で事業は頓挫するだろう。そうではなく、地元のやり方に合わせつつも正しい方法を粘り強く浸透させ、自分自身も対応してイノベーションを起こしていくやり抜く力が必要なのだと、土雅さんも強く言っていた。言わずもがな、それを支える対応力、体力、メンタルも重要だ。

表面的な理念だけでは、途上国の貧困層は救えない。世界経済や食糧問題などマクロな視点だけ学んでいても、それは机上の知識に過ぎない。もちろん、状況を把握し戦略的・効果的な開発段階を把握するためには、マクロな視点で理論や知識、教養が必要だ。しかしミクロな視点で、問題のある現場の足元では必ず数字と経営能力が必要になる。

そこにはもっともらしい熱い言葉や情熱よりも、むしろ経営管理や Excel の知識が求められている。当たり前のことだが、自分自身でこれに気づけたのは大きなことだった。それはビジネス業界で言うところの「市場価値」であり、「現場で使えるか使えないか」だ。頭でっかちではいけない。語弊があれば恐縮だが、これは私自身が今回のインターンを通してひしと痛感したことだ。はっきり言って、私は役立たずだった。むしろ足手まといだったと自覚している。

それはすなわち英語やトゥーイ語（ガーナの主要語）を使ったコミュニケーション力の不足、現状に関する知識と問題解決力、そして何よりその思考を実際に現地に還元する実行力と行動力の不足だった。土雅さんと「Degas」の社員たちはアフリカとガーナを農業から変えたいという強い情熱を持っている。もちろん私もその思いは持っていたが、だからと言って何かできるわけでもなく、彼らの農民との交渉や業者との打ち合わせをただ傍観するだけだった。

7. 理論と経験のバランス

ガーナから日本へ帰国後、日本政府がホストとなって2019年8月28-30日に横浜で開催された第7回アフリカ開発会議（TICAD7）」に、補助スタッフとして参加する機会があった（写真9）。農業に関心を持っていた私は、国際連合食糧農業機関（FAO）と国際連合工業開発機関（UNIDO）が主宰するパネル・ディスカッション「アフリカ農業・アグリビジネス振興による若者雇用加速化に向けたイニシアティブ発足」を業務の合間に傍聴した。

資料には、持続的に農業を機械化する重要性が書かれていた。農業生産は、アフリカ人口の約60%が従事し域内GDPの約21%を占める一方で、収穫量



写真9: TICAD7の会場にて、アフリカ地域専攻の妹と筆者

は世界平均の約 56%にしか及ばない。SDGs の第 2 項目「飢餓をゼロに」を 2025 年までに達成するためには、農業の機械化が最も重要だと書かれていた。具体的には、機械提供サービスへのアクセス向上、種子や農薬など質の良い安価な初期投資へのアクセス向上、灌漑を含む効率的な水資源の供給システムの構築の 3 つが挙げられている。そしてその対象は、政府や外資主導のアグリビジネスセクターではなく、アフリカの大半を占める小規模農家にこそ提供されるべきだと強調されていた。

すなわち重要なのは「小規模農家を中心とした農業バリューチェーンの構築」だ。収穫量の増収や新品種の導入ではない。種子や農薬、農業機械や営農知識を手に入れやすくし、灌漑システムを効率化し、流通経路を確保することが重要だ。アメリカの経営学者マイケル・ポーターの著書『競争優位の戦略』によれば、主活動の「購買物流」と「出荷物流」においてアフリカの小規模農家のネットワークは不十分だそうだ。

「購買物流」とは原材料を外部から調達する活動であり、「出荷物流」とは最終製品を顧客に届けるための活動である。生産活動ではなく、むしろ調達活動や技術開発の面で外部からの支援が求められている。これらを含めた包括的な支援があって初めて、小規模農家中心の農業バリューチェーンが構築され、彼らの収入につながっていく。

サブサハラ・アフリカの発展途上国にとって、国民の大半を占める小農家の所得向上は、直接国家全体の経済水準の向上につながる。工業化や IT 化はその後の話だ。今回のインターンでガーナ地方部の農村を訪れると、その実態を強く実感する。「トウモロコシを作ることはできても、売り方が分からない」、「拡販経路は確保できたので、商品作物の収穫量を増やして農業収入を増やしたいが、そのための農薬やトラクターの入手経路が少ない」といった声が現地の小農家の方々からは聞かれた。

「トウモロコシの生産方法が分からない」、「土地がやせていて生産できない」ということではない。インターンでのミクロな体験と理論上のマクロな知識が整合した瞬間だった。何か問題を解決する際には、理論と経験のバランスが重要だと考えている。このことには、今後もこだわっていきたい。

農業の他にもアフリカには課題が多い。ガーナでは道端で多くの行商人から営業を受けた。彼らは「ホーカーズ」と呼ばれ、売上は 1 日 1 米ドルぐらいだ。使えるかもわからないイヤホン、ベルト、帽子、SIM カード、ダンベル、水。ダンベルなど果たして売れるのだろうか。水ならまだまだだが、それでも 1 個 10 ペソ程度の売上だ。10 個売ってやっと 1 セディになる。

このような行商人が大量にいて、ただでさえ少ない営業利益は分散する。彼らは恐らく利益や営業効率など特に考えていない。私もガーナ中部の都市クマシのモコラマーケットで、ジーンズを 3 セディで売る男性を飛び込みで手伝ったが、その左隣と正面では同じようにジーンズが売られていたし、どこも 1 枚も売れていなかった（写真 10）。



写真 10: モコラマーケットでジーンズ販売のお手伝い

販売品を変えたり、場所や手法を変えたり、工夫できそうな部分がたくさんある。彼らの所得向上のために、私がアドバイスできそうなことが必ずあった。「Degas」での体験を生かして社会を変えていけるか。すなわち、多くの人が共通して困っている問題をシンプルな考察で捉え、その考察を実行に移して、多くの人から「ありがとう！ありがとう！」と言ってもらえるか。また、そう言ってもらえるだけじゃなくて、持続的に彼らの生活水準を上げることができるか。社会が良い方向に向かうように、より大きなインパクトを社会に与えられるか。私の今後の動向が試されている。

ケープタウンで働く～2年間の体験記～

鳥居 紗衣

アフリカ地域専攻 2014 年度入学

こんにちは。Hello. Molweni. (注 1) 東京外国語大学国際社会学部アフリカ地域専攻 2014 年入学の鳥居紗衣（とりい さえ）と申します。今回はこの場をお借りして、私が休学して南アフリカのケープタウンで過ごした 2 年間についてお話ししたいと思います。写真を数枚掲載させていただきますが、「これは本当にアフリカか？」と思われる方もいるかもしれません。アフリカの幅広さを知っていただければ幸いです。

①派遣員について

アフリカ地域専攻には、様々な機会を得てアフリカ各地域へ飛び立つ学生たちがいますが、私の場合は「在外公館派遣員」という立場で南アフリカのケープタウン（地図）にて勤務することになりました。在外公館派遣員制度は一般社団法人国際交流サービス協会の嘱託職員として雇用され、日本政府の各在外公館（大使館や領事館）に原則 2 年間派遣される制度です。語学力と運転免許があれば、誰でも試験を受験できます。私はこの制度を利用し、大学 3 年次終了後に 2 年間休学をして、南アフリカ共和国にある在ケープタウン領事事務所で勤務しました。



地図： ケープタウンの位置。

そもそもなぜ私が派遣員になったかという、きっかけが 2 つあり、最初のきっかけは大学 2 年の時に受けた授業でした。当時私が受講していた授業の講師の先生が、本学出身で在

注 1： コサ語で「こんにちは」の意味。

学中派遣員をしていたという話を聞き、初めて本制度について知りました。2番目のきっかけは就活です。3年夏にインターンを申し込みましたが、面接が通らずやる気を失くしていました。そのタイミングで同期の何人かが留学に行き、私も海外、できれば大学で勉強してきたアフリカへ行きたいと思いました。しかし、単なる留学ではなく何か違うことがしたいなぁと考えていたところ、授業で派遣員について知ったことを思い出し、ちょうど募集が始まる時期でもあったので受験することにしました。派遣員は出願する際に希望地を選べますが、私は選択肢にあったアフリカにある英語圏の公館をすべて希望地に書きました。そして、運良くケープタウン事務所に派遣されることになりました。

②ケープタウンという都市について

上記でも述べましたが、ケープタウンは南アフリカ共和国にある一都市です。南アフリカの首都はプレトリアにあり、司法はブルームフォンテインという都市が担っていますが、ケープタウンは立法都市で国会議事堂があります。また、ケープタウンは文化の都市としても有名です。歴史は、高校の歴史で必ず習うポルトガル人航海者たちのアフリカ大陸周遊から始まります。その後オランダ人が入植を開始し、フランスの宗教革命の影響で本国から逃げてきたユグノーの人々もやってきました。最終的にはイギリスの植民地体制下となり、1961年に独立しています。海を渡って南アフリカの地にやって来た入植者たちは、ケープタウンの港から入港したため、ケープタウンは様々な文化が混じり合う文化的都市へと発展しました。多くの劇場や画廊などが立ち並ぶとともに若いアーティストも取り込んでいます。

また国内では観光都市としても有名です。喜望峰やテーブルマウンテン、ケープペンギンが見られるビーチは観光客が必ず訪れる地となっています（写真1、2）。ワインの産地としても有名で、多くのワイナリーがレストランを併設しているとともに、敷地からは雄大な自然の景色を望むことができ、人気の観光スポットのひとつです（写真3）。生物も多様で、特に植物はフィンボスというケープタウン周辺の特異な植生があります。

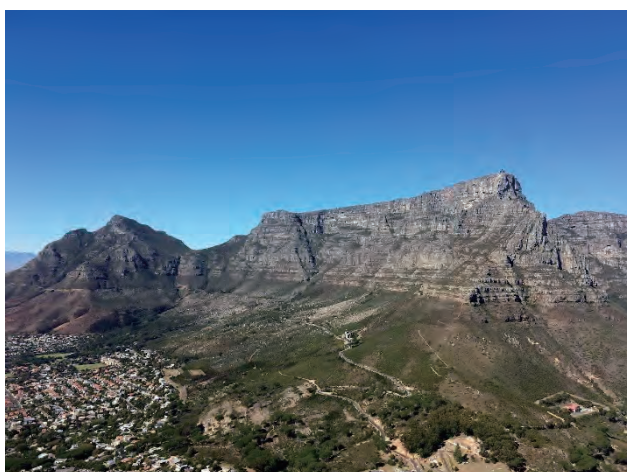


写真1:テーブルマウンテン。世界7不思議の一つに指定されている。下からみると平たいが、登ってみると上は岩でゴツゴツしている。ハイキングコースが多数あるが、一番手っ取り早いのはケーブルカー。5分ほどで頂上に着く。



写真 2: ケープペンギンのいるボルダーズビーチ。一年中野生（保護されているので、私は半野生と言うべきだと思うが）のペンギンを見ることができる。任期中何度も足を運んだが、この写真の時に最も数が多かった。



写真 3: 好きなワイナリーの一つ、スターク・コンデにて。オーナーはご夫婦だが、奥様が日本人の方。景色が素晴らしく綺麗。南アは安くて美味しいワインがたくさん手に入る。ワイナリーは数百件以上。食文化はワイン抜きでは語れないと言っても過言ではない。最近はクラフトジンのバーなども若者の間で流行っている。

③2 年間の生活

平日は毎日仕事をし、週末はたまに仕事が入りますが基本休みという生活を送っていました。仕事柄日本人の方々との交流が多かったので、週末は在留邦人の方々と出かけたりなどすることが多かったです。インフラはヨーロッパ並に整っているので、生活に不自由することは特にありませんでした。都心部に住んでいましたが、家からは海が見え、車で少し行けば山の景色も広がっていて、便利さと自然がちょうどよくミックスされている都市だと感じます。

派遣員の仕事は主に日本から政府の要人が来る際の配車や空港での対応、宿舎の留保など

ですが、私の勤務していた事務所は要人の受け入れが極端にすくなかったので、私は広報文化という日本文化を現地に紹介する事業の担当をすることが多かったです（写真4）。具体的にはイベントを開催する際の企画・運営（企画したイベントの例：ジャパンデー）や、留学プログラムの紹介などでした（写真5）。また秘書的業務などもあり、人数が少ない事務所だったからこそ、色々な業務をすることになりました（写真6）。また、任期中2回ほど出張もあり、要人訪問の準備なども行いました。



写真4:事務所を訪れた子供達に日本文化を紹介しているところ。

休暇には国外旅行にも行くことができました。アフリカ地域専攻の同期とルワンダやウガンダを旅行したり、他専攻の友人とロンドンを訪ねたり、南アにいる友人と南ア国内旅行をしたりと、かなり色々な場所をまわることができました。



写真5:留学説明会にて。外大の宣伝もしました。JETプログラムという日本にALTを派遣する事業があり、その宣伝なども担当していた。



写真 6:一年に一回行うレセプションにて。

④ケープタウン派遣員生活を終えて

在学中に文字通り「働く」という選択をしたことは、私の人生の中で大きな転換点となったと思います。私はケープタウンに行くまで、親元から離れて一人暮らしをしたこともなかったし、生活に必須である車の運転もままならない状態で、「自活する」ということがどういうことなのかあまり理解していませんでした。加えて仕事も指導されないまま自分でしなければならないことがたくさんあり、とまどうことだらけでした。

そんな中の2年間の生活でしたが、最も大切に重要だと思ったのは、「人との出会い」です。ありきたりですが、やはりどんな経験もこのことに尽きると思います。生活立ち上げで大変だった時は同僚が助けてくれましたし、仕事では上司に教わることがたくさんありました。落ち込んだ時は現地の友達も日本にいる友達も親身になってくれました。また、仕事をしてきたからこそ繋がった人たちもたくさんいます（写真7）。海外、そして南アフリカという遠く離れた場所だったからこそ、また2年間という長期間だったからこそできた人脈がたくさんあります。その小さな出会いひとつひとつがあったから、2年間の出来事を振り返った時、充実していたと感ずることができるのだと強く感じます。



写真 7:事務所員とその家族。毎年行うクリスマス会にて。

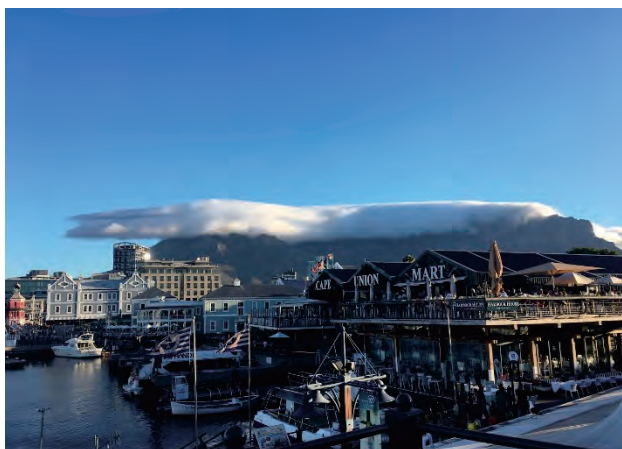
⑤アフリカに挑戦する人に向けて

きっとこのページを見ている方々の多くは「アフリカに行きたい！」と思っている人だと思います。理由や志はそれぞれだと思いますが、私の経験から心に留めておいた方がよいと思うことを数点挙げるとすると、

1. 安全管理・健康管理をしっかりとすること：私は一度も事件や事故、大きな病気をすることなく2年間過ごしました。私が危ない目に遭わなかったのは、治安のよいところと悪いところのはっきりしているケープタウンという土地柄もあるかもしれませんが、しかし、どこに行っても気をつけることは変わらないと思います。危険だと言われている場所に行かないこと、身の回りの貴重品には十分注意しておくこと、ここは、自分は大丈夫だと油断しないこと、地域の犯罪等の情報を頭に入れておくこと。自分の身はある程度自分で守る予防をしなければ、痛い目を見るのは自分だということを忘れないで欲しいです。
2. 現状を把握すること：その土地の人はどういう背景を持っていて、自分はどう見られているのか、ということ把握して会話することが重要なことのひとつだと思います。「空気を読む」のは日本社会の特徴だと思いますが、どんな人と会話する時もある程度空気を読むことは大切です。
3. 日本を知っておくこと：海外に行く度々思うのは、いかに自分が日本を知らないかということです。仕事上日本文化を紹介する仕事をしていましたが、ある程度自国について語ることができる知識を持っておくことも海外に出る上で重要なことだと強く感じました。インターネットが普及して久しい現代、アフリカという地においても様々な情報が手に入りますが、日本のイメージといえば「スシ」や「アニメ」に留まっていると感じます。それ以外の日本の特徴について語ることができる人は現地でのコミュニケーションの幅がかなり広がると思います。

これからアフリカに挑戦する人たちには是非、人との出会いを大切に、先入観を持たずに飛び込んで欲しいと思います（写真 8）。機会は至る所に転がっています。一度行けば、自分の知らない、考えたこともない新しいことが絶対にひとつは見つかるはずですよ。

写真 8:任期中たくさんお世話になったウォーターフロントにて。モール、レストラン、ホテルなどの商業施設がかたまっている。ケープタウンはアフリカ大陸内の他過酷な地域で頑張る人の一時的な休息場所としても人気。不慣れた生活に疲れたら、是非ケープタウンへ！



最後までお付き合いいただき、ありがとうございました！

3. ボランティアと旅行編

タンザニアでのボランティア体験談 ～子どもたちに教えるという体験を通して得たもの～

山城 典子
アフリカ地域専攻 2014 年度

1. はじめに

「また戻るわ... 戻りたいじゃなく戻る。」

これが 2017 年の 12 月、6 ヶ月滞在したタンザニアから帰ってきて思ったことです。絶対にまた行く、という気持ちが強かったのはやはりタンザニアで会った人々、特に子どもたちが大きかったのです。

Hamjambo! (スワヒリ語で「みなさんこんにちは!」)

2014 年度アフリカ地域専攻入学の山城典子と申します。私は 2017 年の 6 月から 12 月の 6 ヶ月間、アフリカ大陸の東海岸沿いに位置するタンザニアに滞在しました。なにをしていたかというボランティア活動。もともと途上国の教育問題に興味があり、アフリカの教育の現場はどのようなものか自分の目で実際に確かめて見ようと思い、行く決断をしました。この体験記では、ボランティアでの体験と現地の生活を少しだけ紹介させていただきます。

タンザニアといえば、、サファリ！キリマンジャロ！など、観光資源が豊富なところ。6 ヶ月の滞在の中で、6 月～10 月の 4 ヶ月間はタンザニア第二の都市であるアルーシャ、そして 10 月から 12 月の 2 ヶ月間は第一の都市のダルエスサラームというところで滞在していました (図 1)。アフリカといえば暑いイメージですが、アルーシャは標高が高く山の近くの都市なので、6～8 月くらいまで朝晩は 20 度以下と結構寒かったです (南半球なので日本とは季節は逆です)。近年経済発展が著しく、私が滞在している間も道路が舗装されるなど街の景観が少しずつ変わっていくのを見ることができ面白かったです。



図 1: タンザニアの地図。滞在したふたつの地域ダルエスサラームとアルーシャを線で囲った。
(出典 : <http://www.worldwide.co.za/images/africa/tanzania/tanzania-map.gif>)

2. ボランティア活動

ボランティア活動は、アルーシャにて孤児院とマサイ族の幼稚園、ダルエスサラームでは小学校、の計3か所をそれぞれ2ヶ月ずつ行いました。孤児院では子どものお世話や勉強を教え(図2)、マサイ族の幼稚園では実際に授業を行い(図3)、図工やアルファベット、体育などを教えていました。小学校では、先生の補佐、また空いた時間には折り紙や英語の歌を教えていました(図4)。ここでは書ききれないほどたくさんの経験をしました。言語の壁や、1人で教えることが多かったのでとても難しく何度も悩みましたが、子どもが毎日私の名前を呼んで駆け寄ってくれたり、自分の名前をつづれなかった子どもが、私が教えたのを見ながら練習していたり、勉強ができるようになったりする姿がとても印象的でとても励まされました。子どもたちは、その環境が決して豊かでなくても、勉強に励んだり、たくさん笑ったり泣いたり、とても力強いです。私よりも強いところを感じさせられることが多く、しっかりしなきゃ、と何度も思ったほどです。



図2:アルーシャの孤児院にて



図3:マサイの幼稚園。絵を描く、ということを教えていた。



図4:ダルエスサラームの小学校では毎日のように折り紙を教えていた。日本語の折り紙の説明書ながらも、児童たちは頑張って絵を見て折っていた。

3. 生活

滞在中は、ホームステイさせていただいていました。毎日現地の料理を作ってください、とても美味しかったです。主に、イモ類やお米、野菜炒めやお肉などなど農業が盛んなので、食べ物が豊富でした（図5）。



図5：たくさんの野菜や果物が市場で売られている。

また、アルーシャとダルエスサラームと2か所滞在しましたが、街の雰囲気も違って、アルーシャは街が小さいためなのか、良い意味でがやがやしていましたが、ダルエスサラームはとても発展していてたくさん大型のショッピングセンターがあったりしてゆったりしている街で（私個人が感じたことですが）、その違いもとても興味深かったです。

地元の人はとてもフレンドリーで、アジア人を見ると **China!**（中国人！）などよく話しかけてくるので、いつも中国人じゃない！と言い返していました（笑）また、現地の移動手段として主流なのは、スワヒリ語で「ダラダラ（バス）」とよばれる乗り合いバスです（図6）。



図6：ダラダラの中から。手前に見えるのが使い古された席、そして隣のダラダラが外に見える。

日本車がたくさん輸入されていて、ダラダラも中型の車（小さな幼稚園バスみたいなもの）を使っていて、子どもくらい小さな席にぎゅうぎゅうに座っていました。かがんで立つ人が

いるほど、ぱんぱんになるまで押し込んで乗るのが主流です。

4. アフリカに行きたいと思っている方へ

まずは、現地の言葉を絶対に学ぶべきです。タンザニアの場合、スワヒリ語が公用語ですが、英語だけでも割と通用してしまっただけでスワヒリ語はあまり最初勉強しませんでした。滞在後半になって慌ててスワヒリ語をきちんと学び始めました。現地の言葉を話せた方が現地の方もとても喜んでくれて、スワヒリ語を教えてもらえることでさらに会話がはずんで勉強にもなります！なので、なるべく現地語を勉強することをお勧めします。

次に現地の方と仲良くなること。私の場合は、ボランティアスタッフさん、ホストファミリー、ボランティア先の人などたくさんの人と仲良くなれ、いまでも連絡をとっています。彼らはいつでも「**Karibu!** (歓迎だよ!）」と言ってくれます。

また、大事なことは文化を楽しむことです！カルチャーショックもあるかもしれませんが、それを楽しむような気持ちでいきましょう。

そして、ボランティアや大学留学か、どちらがいいのか、考える方もいると思います。大学留学でも様々な体験はできますし、大学留学もおすすめです。でもボランティアだからこそできることは、まずは実際の現場をじかに見ることができるところです。長期間ボランティア活動することで、学校の授業や短期間だけでは見えてこないことも気づくことができます。私のボランティア先は割と自由に行動できる場所だったので、逆に言うと自分の頭で考え、自分はどのようなことをすればボランティアたりうるのか、行動次第で決まることも多かったです。ボランティア先以外にも、現地の中学校やほかの孤児院などさまざま場所に連れて行ってもらいました。ボランティアに正解とかないし、無力さを感じることもあるかもしれませんが、自分のできることをひたすらやり、現地の人々とたくさんコミュニケーションをとることが大切だと思います。

ボランティア中、まだまだ自分は未熟なことを感じました。子どもたちや現地の人にたくさん励ましをもらったからこそ、自分は何ができるのかさらに考えこれからもアフリカに関わっていきたいと思っています。少しでもアフリカに行きたい、という気持ちがあれば行くことをお勧めします。日本で体験できないこともあり、いろんなことを考えさせられますし、なにより子どもがかわいいです！サファリだけじゃもったいない、タンザニア、アフリカのたくさんの魅力をぜひみなさんに知っていただきたいです。

最後までお読みいただきありがとうございました。

Asante sana! (スワヒリ語で、「とってもありがとう!」)

アフリカ 5 カ国滞在記

～ボランティアと旅の 7 カ月間～

川瀬 康太郎
アフリカ地域専攻 2015 年度入学

こんにちは！東京外国語大学国際社会学部アフリカ地域専攻 4 年の川瀬康太郎と申します。私は 2017 年 4 月から 12 月の約 7 カ月間に渡って、ウガンダの私立学校（幼稚園と小学校が併設）で教師のボランティアを務めました。また小学校の夏休みにはアフリカ 4 カ国を 1 カ月かけて旅しました。そこでこの滞在記ではこの 2 つの体験について書いていこうと思います（^^）

[目次]

1. ウガンダ編
 - i. 活動先にウガンダを選んだ理由
 - ii. 現地での生活
 - iii. 小学校での活動
 - iv. その他（食事・観光）
2. 旅編
 - i. ザンジバル
 - ii. エチオピア
 - iii. 南アフリカ
 - iv. ルワンダ
3. 結び

1. ウガンダ編

i. 活動先にウガンダを選んだ理由

日本でアフリカについて学び、実際に現地で空気を感じ現地の人々と関わりたかったからです。また英語力を向上させたいと思っており英語圏アフリカを希望し、初めてのアフリカへの渡航だったため英語圏アフリカの中でも治安が良いウガンダを選びました。



(左) 図 1 : ウガンダの位置を黒丸で囲んだ。

(出典 : 『世界の国々』 <http://atlas.cdx.jp/nations/africa/africa.htm>、2018 年 11 月 13 日閲覧)

(右) 図 2 : 活動先であるワキノ県ナンサナの位置を赤点で示す。

(出典 : “Political Map of Uganda,” <https://www.nationsonline.org/oneworld/map/uganda-map.htm>、2018 年 11 月 13 日閲覧)

ii. 現地での生活

私は首都カンパラから乗合バスで 30 分程の距離にあるナンサナという都市に住み(図 3)、家から徒歩 5 分で行ける小学校で教師のボランティアを務めていました。ウガンダに来て最初に持った印象は「思った以上に涼しい」というものです。実は国土の大半が 1,200m 以上の高地にあり、年平均気温が 23℃なのです。「暑いだろう」という先入観を持っていたためとても驚きました。

また現地ではかなり英語が通じます。しかし現地語(ルガンダ語)で話すととても喜ばれることに私は気づきました。値切りも現地語のほうがうまくいくのです(笑)そこで首都カンパラの本屋でルガンダ語の辞書を買ひ、インターネットでルガンダ語フレーズ集を見つけ出し、ウガンダ人の知り合いに習ひ、ルガンダ語を勉強しました。教育を受けられなかった人の中には英語を理解することができない人もいるため、そのような場合でも現地語であれば会話ができます。「現地語を学ぶ」ことの大切さを実感しました。



図 3:家の周辺。真ん中に写っているのは乗合バスです。

家はボランティア団体が管理するゲストハウスで、欧州やアジア等様々な国のボランティア 10 数名と共同生活をしていました。一番多かったのがドイツのボランティアで、他にはフィンランド・フランス・イタリア・オランダ・台湾等のボランティアがいました。学校以外にも孤児院や病院等様々なプログラムがあり、各々このゲストハウスからそれぞれの活動先まで通っていました。

断水が続いて洗濯ができなくなったり、停電のためにスマホで照らしながら調理をしたり、テーブルに蝋燭を立てて夕食を食べたりと、日本ではなかなかしないような経験の連続でした。その中でも特に強烈だったのはマラリアを患ったことです。家のすぐそばにクリニックがあり 2 日で完全に回復したのですが、発症時は高熱とだるさでとても辛かったです（泣）就寝時に蚊帳をちゃんと掛けなかったことが原因と思われるので、皆様がウガンダに滞在するときには蚊帳を毎晩しっかり掛けて寝てください（笑）。

iii. 小学校での活動

Step By Step Primary School という私立学校（図 4, 5）で、年少さんから小学校 5 年生までの計 8 クラスで授業を担当しました。



図 4: 写真の 2 階建ての校舎では小学校 3 年生から 7 年生までが学び、併設された平屋の校舎では年少さんから小学校 2 年生までが学びます。



図 5: 平屋の校舎。左から年長さん・小学校 1 年生・小学校 2 年生の教室。トタン屋根のため、大雨が降ると音がうるさくて授業になりません。

この学校では 13 名の先生が働いており、各学年に 1 名担任の先生が就いています。全校生徒数は合計約 200 名で、学年別の人数はクラスによって 10 数名~40 名弱と幅広いです。因みにウガンダの小学校は 1 年生から 7 年生まであります。授業（図 6）は基本的に英語で行われ、休み時間も含めて生徒たちは学校で英語以外の言語（現地語等）を話すことを禁止されています。年長さんにもなると多くの生徒が英語を聞いて理解し話すことができるので驚きです。授業のスタイルは担任の先生が授業で板書をし、それをノートに写すというもの。金銭的な問題で生徒が教科書を持っていないため、授業に占める「写す」時間が多いです。また図 6 で見られるように、日本と違って 1 つの机に生徒 3 名もしくは 4 名（4 名にもなるとぎゅうぎゅう）で座ります。

ウガンダの教育制度における大きな問題の1つに授業料の未納が挙げられますが、それはこの学校でも見られました。時々月曜日の全校集会で授業料未納の生徒が点呼され、その場で授業料を支払えない場合は強制帰宅を命じられます。帰っていくその寂しげな後ろ姿は今でも思い出されて悲しくなります。

この学校には水道が通っておらず、雨水を貯める大きな貯水タンク（図7）が設置されています。また井戸水を小さいタンクに貯めています（図8-9）。これらの水は調理のほか、食器洗いや洗濯に利用されます。日本のように蛇口を捻れば飲み水が出てくる状況ではなく、かつタンクの水は雨水もしくは井戸水でありそのまま飲むことはできないため、子どもたちはいつも喉を乾かしています。また水が切れて手洗いも満足にできないことも多いです。



図6:年長さんクラスの様子。



図7: 雨水を貯める貯水タンク（手前）。



図8: 井戸でタンクに水を汲む教師。



図9: 生徒が井戸水の入ったタンクを運びます。

この学校では給食が提供されます。学校にキッチン（図 10）が設置されていて、朝から調理担当の方がポシヨ（白トウモロコシの粉をお湯で練ったもの）（図 11）と、豆のスープ（図 12）を作ります。他の学校や孤児院等でもこの組み合わせはよく見られます。ほとんど毎日この 2 つが給食のメニューで、生徒たちの中には「ポシヨはもう嫌だから今日は給食いらない。」と言う生徒もいました。またスープは塩味で、時々ナスやニンジンなどの野菜も入っていますが、基本的には豆だけのことが多いです。つまり野菜が不足しているのです。ウガンダ人の先生に話を聞いてみると、栄養よりも腹を満たすことに主眼が置かれているようでした。



図 10:キッチン。左に見えるのが井戸から汲んできた水の入ったタンク。



図 11:ポシヨ。



図 12：手前の赤いスープが豆のスープ。

★コラム：～ウガンダの教育制度～

ウガンダの教育制度は日本のそれと少し異なります。詳しくは下記を参照してください。

- ①就学前教育（日本でいう幼稚園・保育園）：3年間（2, 3歳~5歳）
- ②初等教育：7年間（6歳~）

③前期中等教育：4年間

④後期中等教育：2年間

学力などの理由で留年する生徒も多く、学年と年齢が一致していない場合がよくあります。なおそれぞれの教育段階を卒業するにあたっては、全員国家試験を受けなければなりません。また他にも進学先として、大学や教員養成学校、技術専門学校などがあります。

iv. その他

~食事~

「ウガンダ料理はおいしくない」という噂を渡航前に聞いていたのですが、実際は日本でも馴染みのある食材が多く利用されていて、味付けもくせがなく、どれもとてもおいしかったです。（ポシヨは慣れるのに少し時間がかかりましたが。）例えば市場ではトマト・ナス・タマネギ・ジャガイモ・サツマイモ・ピーマン・オクラ・パイナップル・マンゴー等が安価で手に入り（例えばパイナップルは1つ約60円）、ローカルレストランではライス・スパゲティ・調理用バナナ（イモのような食感・味）等が供されます。ウガンダ流ではスパゲティを結構長く茹でるようで、ローカルレストランで食べるスパゲティはそうめんの食感に近いです。そのせいか提供まで1時間以上待つこともあります...（笑）ここではその食事をいくつか紹介します。



図 13:ポシヨにビーンズソースをかけたもの。学校の給食ではこれほど野菜が入っておらず、豆だけの薄いスープがかかっている場合がほとんどです。



図 14:カトゴ。キャッサバを主材料とする煮込み料理で、他には豆などが入っています。とろっとしていておいしい！給食でごく稀に出てきます。



図 15: ジャガイモ・マトケ(調理用バナナを蒸して潰したもの[皿の右上])・ピラウ(肉の炊き込みご飯)・ナカチ(緑色の野菜)。これで4,000 シリング程(約130円)だったと記憶。安くて美味しい!



図 16: 調理用バナナ。黄色くて甘いバナナのように手でするっと皮は剥けず、包丁で皮を剥きます。



図 17: ピラウとギーナッツソース(赤茶色のソース)とキャッサバ(左)とサツマイモ(右)。ギーナッツソースはナッツのコクのある、若干甘いソースです。



図 18: スーパーマーケットではこのようなおいしそうなケーキやドーナツなども売られています！



図 19: ソーダ(コーラ・ファンタ・クレスト等)はウガンダでも人気です。

~観光~

ゴリラトレッキング

ナンサナから車で約 10 時間、ウガンダ西部コンゴ民主共和国国境近くのブウィンディ原生国立公園 (図 20) でゴリラトレッキングに挑戦しました。



図 20: 赤丸がブウィンディ原生国立公園
(出典: “Daltons in AFRICA -- UGANDA.”,
http://www.bhs1986.com/africa/html/where_uganda.htm,
2018 年 11 月 13 日閲覧)

ロッジ（図 21）に 1 泊して翌朝 7 時に国立公園へ移動し、まずトレッキングツアーにおける注意点（トイレのルール・リタイアした場合の対応等）についてツアーガイドから説明を受けました。絶滅危惧種に指定されているマウンテンゴリラの半数（約 360 頭）がこの山に生息しており、彼らの保全のため細かいルールがあるようです。それからほぼジャングルの山道（図 22）を 2 時間強ひたすら登り続けました。木の根っこや岩、ぬかるみで足元が安定せず、急な斜面も多く、植物をかきわけながら進むような形であるため、大変疲れましたが、最終的にゴリラに出会うことができ疲れが吹っ飛びました！（図 23-24）ゴリラは人間馴れているようで、我々観光客が現れても平然と食事をしたり、遊んだりしていました。



図 21：ロッジ周辺には野生のカメレオンが生息していました。

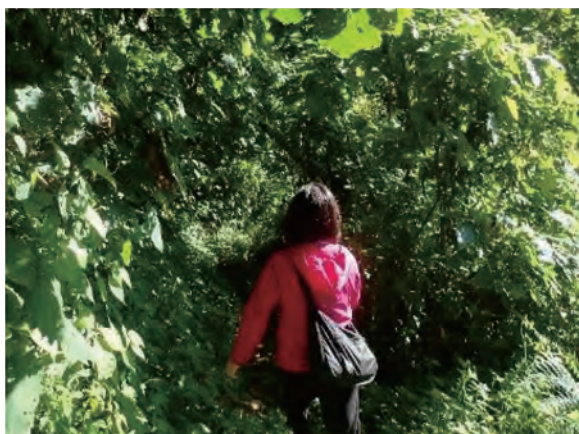


図 22：道なき道をひたすら進む。



図 23：想定以上の距離感。



図 24：10 頭ほどのゴリラの群れ。

赤道

カンパラからバスで1時間ほど。赤道の真上に立ちました！（図25）ウガンダの観光名所の1つです。北半球と南半球では渦巻きが逆で、それでは緯度0度の赤道上ではどうなるのか、という実験がここではできます！私も実際に実験してみました。実験結果は秘密にしておきます（笑）ここは観光名所ということもあって観光客が多かったです。ところがカンパラからの他の都市への中継地点であり、カンパラからは始発で乗っても帰りがそうでないため、帰りに空席のあるバスに出会えなくて大変でした...（笑）

他にもナイル川ラフティング・サファリ・ビクトリア湖観光等を行いました。このようにウガンダは観光名所がたくさんあります。また比較的治安が良い（もちろん危機管理意識は必要）ため、安全に観光できると感じました。



図25:赤道の真上にて。

2. 旅編

8月から9月中旬まで活動先の小学校が夏休みに入り、せっかくアフリカ大陸にいるのだから他のアフリカの国も実際に見てみたいと思い、1カ月のアフリカ4カ国の旅を決心しました。ケープタウンとルワンダに大学の友だちがいたこと、ザンジバルで美しい海に癒されたかったこと、エチオピアの独特な文化を見たかったこと等が、それぞれの国を選んだ理由です。またエチオピア航空で空路を全て繋げることができ、交通費を抑えることができたことも理由の1つです。

旅の行程（図26参照）：ウガンダ→タンザニア（ザンジバル）→エチオピア（アディスアベバ・ラリベラ）→南アフリカ（ケープタウン）→ウガンダ→ルワンダ（キガリ・フイエ）→ウガンダ

補足：ウガンダ→タンザニア→エチオピア→南アフリカ→ウガンダは空路、ウガンダ・ルワンダ間は陸路（バス）で移動しました。



図 26：旅の経路を地図に書き込んだ。

(出典：『世界の国々』 URL: <http://atlas.cdx.jp/nations/africa/africa.htm>, 2018年11月13日閲覧)

i. ザンジバル

イスラム教の人々が多く、町は穏やかで治安がとてもよかったです。周りを美しい海で囲まれた島で、ナイトマーケット（図 27）では様々な魚介類の串焼きを初め、チャパティ・サモサ・焼き鳥・サトウキビジュース等、たくさんの種類の料理がとても安価で売られていました。その上どれもおいしい。また朝には魚市場が開かれ、マグロやタコ等たくさんの魚介類が売られており、活気に満ちていました（図 28）。



図 27: ナイトマーケット。



図 28: 朝の魚市場。

そして何よりも印象に残ったのは美しい街並み（図 29）と心が洗われるほど綺麗な海（図 30）です。海ではシュノーケリングに初挑戦し、サンゴ礁で様々な魚を見ることができました。夕方には地元の子どもたちが浜辺で海水浴をして遊んでおり、その姿がとても楽しそうでした（図 31）。



図 29：洗練された美しい街並み。



図 30：透明度の高い美しい海。



図 31：夕方にビーチで遊ぶ地元の子どもたち。

ii. エチオピア

アディスアベバ中心部は都市化がとても進んでおり、道路がしっかり整備されて車の交通量も多く、まさに「大都市！」という印象を受けました（図 32）。特に驚いたことは、点字ブロックが設置されていたことです。さらに中国の出資でトラム（路面電車）が敷かれており、車内はいつも混雑していました（図 33）。運賃が激安で、20 分程乗っても 8 円という日本では考えられない安さでした。



(上) 図 32: アディスアベバ中心部の街並み。
(右) 図 33: トラム。



また印象的だったことが、靴磨きでお金を稼ぐ人がよく見られることです。彼らは靴磨き用具と小さい椅子を常に持ち歩いており、1回数十円で靴をピカピカに磨いてくれます。私も靴磨きをお願いしたのですが、ウガンダで泥だらけになっていた靴が見事にピカピカになり、とても感動しました。

加えて食文化が豊かで、エチオピア独特の料理（図 34）やおいしいコーヒーに加えて、イタリアからの侵攻で根付いたイタリアの食（図 35）も見られます。



図 34: エチオピアの名物、インジェラ（クレープのようなもので、生地を発酵させてから焼いており酸味がある）とワット（シチュー）。



図 35: スパゲティとパン。

ラリベラは岩窟教会(図 36)で有名な都市です。アディスアベバと異なり高いビルはなく、人は多いですが街の雰囲気は静かな印象を受けました。毎週決まった日に大規模な市場(図 37)が開かれており、家畜や野菜の他、特産品のハチミツ(図 38)や香辛料、布等、様々なものが売られています。岩窟教会周辺では地元のガイドが観光客に「俺がガイドしてやるよ。」とたくさん声をかけており、私自身もしつこいほど声をかけられて圧倒されました(笑)。



図 37: ラリベラのマーケット。

図 36: 岩窟教会。上には雨による劣化を防ぐためのシェルターがかかっています。



図 38: ハチミツ。強烈な見た目にびっくり(笑)。

iii. 南アフリカ

ケープタウンは「ここはアメリカ？ヨーロッパ？」とってしまうほど発展した場所で、ウガンダやその他それまで訪れてきたザンジバル・エチオピアとの歴然たる違いに目を見張りました。(写真 39)。ウガンダ人の友人も「南アフリカはアフリカではない。」と冗談交じりに言っていました。しかし一方で道端に座って貧しい身なりで座り込んでいる人もいて、格差の大きさを目の当たりにしました。



写真 39：ケープタウンのショッピングモール、「ウォーター・フロント」。

iv. ルワンダ

ウガンダから長距離バスで国境を超えて訪れました。500km 以上の距離を 9 時間かけて移動する、しかも初めての陸路での国境越えでドキドキしましたが、特に大きな問題なく無事にルワンダの首都キガリに到着することができました。

食事はウガンダのそれと共通しているものもありましたが、タンの串焼きやホルモン煮込み(図 40)、メラングェというライスやイモやおかずのビュッフエ等、ルワンダならではの食事もあり、隣国同士でも違いがあって面白いと思いました。特に驚いたのが「アガトゴ」というホルモン煮込み。朝から食べるというのだから驚き。私も食べてみましたが、意外と朝からペロリと食べられました。



図 40:ホルモンの煮込み(通称アガトゴ)。

また他にもウガンダと似ているようで違うところがあり、それはバイクタクシーの乗り方でした。ウガンダでは運転手に加えて 2 人乗りすることがままあるのですが、ルワンダではそれが禁じられています。またヘルメットの着用もウガンダと違って義務付けられており、安全性に対する意識の違いを感じました（図 41）

キガリでは虐殺記念館、フイエではプロテスタント人文社会科学大学（PIASS）や地元の小学校を訪れました。両都市とも約 20 年前に大虐殺があったとは思えないほど落ち着いた空気があり、治安も良いように見えました。今後も平和な国であり続けてほしいと強く思います。



図 41：ヘルメット着用が義務。

3. 結び

ここまで読んでいただきありがとうございました。

私がウガンダでの長期滞在、またアフリカ 4 カ国への旅を経験して感じたことは、アフリカへの初めての旅は難易度が高いということです（笑）これは治安の問題ではなく、バスの乗り方等ローカルルールが難しいからです。実際私はタンザニアやエチオピアでは乗合バスを見つけられても乗り方が分からず、右往左往しました。逆に言えば、ツアーであれば問題ありません。現地に知り合いがいる場合でも問題ありません。つまり案内してくれる人がいればアフリカは「怖いところ」ではないです。もしくは長期滞在すれば、ローカルルールに自然に順応していきます。もちろん外務省の安全情報等で治安が明らかに悪いことがわかる場合はツアーであっても渡航は避けるべきです。

とにかく言いたいことは「アフリカ＝危険」という認識を持たないでほしいということです。日本でも危険なところがあるように、アフリカにも危険なところ・そうでないところがあるのです。「アフリカ」と聞くだけで懸念してしまうのはもったいないです。

またもし今後アフリカに行くことを検討している人は、現地語で挨拶できるようにしておくと思います。先述したように、現地語は現地の方々に喜ばれることが多いです。あと予防接種はしっかり打ってくださいね。

ウガンダ共和国でのボランティア・探究記

西川 佑太

アフリカ地域専攻 2016 年度編入学

こんにちは、アフリカ地域専攻 2018 年度卒業生の西川佑太と申します。ここでは、2017 年にウガンダ共和国で経験したボランティアに関して記載します。ボランティアの内容だけではなく、ボランティア内外の私の意思決定の理由なども振り返りながら書かせていただきます。

目次

1. はじめに
 - 1-1. ボランティアの動機
 - 1-2. ウガンダ共和国を選択した理由
2. ボランティアの活動内容
 - 2-1. 職業訓練学校での教員としての経験
 - 2-2. 小学校での教員としての経験
3. その他の気づきや学び
 - 3-1. 中国（人）に対する現地の人々の印象
 - 3-2. 現地の生活を支える産業構造について
4. むすびに

1. はじめに

1-1. ボランティアの動機

まず、私がボランティアをしようと思ったきっかけは主に 2 つありました。

1 つ目は「今後のキャリアを見据えて」という軸です。私は当時学部 3 年生を修了した段階であり、本格的な就職活動が目の前に迫っているという状況でした。その中でまず頭に浮かんだのは「国際協力」分野での就職です。

アフリカ地域の紛争解決・平和構築に関して強い関心があった私は、それに関連するゼミを選択し、勉強を進めておりました。こうした背景から、漠然と新卒で国際協力 NGO 等の組織に所属するのだろうと考えている一方で、本当にこの選択が正しいのか不安も抱えておりました。その不安を解消するという意味でもボランティアという形で国際協力に関わり、それが本当に私がやりたいことなのかどうかを見極めたいと考えてました。

2 つ目は「説得力のある論文制作」という軸です。前述したように私は主にアフリカ地域の紛争解決・平和構築の学びを進め、卒業論文の準備に取り掛かっておりました。大学生活最後ということもあり、自分が納得した文章を書きたいと燃えていた私は、他者が読んだ時に

より説得力、共感を得るためにはどうすべきなのか考えました。

その結果、現地に行くということが私の目的に寄与するのではないかと考えるようになりました。フィールド調査をするかどうかの検討まではしておりませんでした。実際に現地へ赴き直接情報を得た方が、発する言葉の説得力が変わるのではないかと考え、現地に行くことを決意しました。

大学などの教育機関に留学することも考えましたが、一つ目の理由も相まって、留学ではなくボランティアがしたいという考えに至りました。

また、上記の動機が、最終的なキャリアの選択や現在に至る私の意思決定にどのように影響を及ぼしているかに関しては、「4. むすびに」に後述させていただきます。

1-2. ウガンダ共和国を選択した理由

数多くある国々の中でウガンダ共和国（地図 1、以下：ウガンダ）を選択した理由はまず、生活環境の観点からです。どの国にしようか情報を収集している中で、英語圏であることや治安の良さ、ボランティアの受け入れ体制が充実しているという点で非常に魅力的だったからです。

ボランティア先の決定に関しては、ウェブ上で多くの機会を模索し、ウガンダ現地の NGO と提携を持つ日本の NPO を経由しての参加となりました。

また、ウガンダの歴史背景という点からです。私の今回の目的の一つである「説得力のある論文制作」を達成する上でも、ウガンダはもともと注目をしていた国でした。

1962 年にイギリスから独立して以降、度重なる紛争を経験している場所であること。さらに、「元女性兵士の社会復帰」に卒論研究テーマを絞りつつあった中で、ウガンダでは紛争を通じて、多くの女性兵士が生まれた場所であるということに着目し、私の研究テーマに関連する情報を得る場所として最適だと考え、ウガンダを選択しました。



地図 1: ウガンダ共和国の位置

2. ボランティアでの活動内容

ウガンダでの滞在中、所属をしていたウガンダ現地の NGO から派遣される形で、主に二ヶ所でボランティア活動に関わりました。首都カンパラ郊外のナンサナ地域の職業訓練学校と首都カンパラ中心街に位置する小学校での活動でした（地図 2）。活動中は英語を使用しながら

ら、生徒たちと一緒に過ごしました。



地図 2: 首都カンパラでボランティアをした 2 つの学校の位置 (©Google)

2-1. 職業訓練学校での教員としての経験

職業訓練学校での活動には約 4 ヶ月間携わりました。郊外の貧困層が居住するコミュニティで運営されている私立の学校で、小学生ぐらいから 30 歳ぐらいまでの生徒がスキルを習得するために通っていました (写真 1; 写真 2)。



写真 1: 職業訓練学校のすぐ近くに居住していた 6 人家族 (母親は仕事で不在であった)



写真 2: 6 人家族の暮らしていた家の中の様子

学校の運営体制は営利目的というわけではなく、現地のコミュニティの青年がほぼボランティアで運営している学校でした。生徒の多くは女性であり、美容と服飾のクラスが大半の生徒を受け入れているという構成になっています。

そういった状況の中で、私が携わったボランティア活動の内容は、パソコンの基礎的な使い方の指導です。ウガンダでもインターネットが多く地域で普及し、パソコンなどの機器に関する知識は就職をする上で必須条件になりつつありました。

そのため、Microsoft Word、Excel、PowerPoint での学習を通じたパソコン基礎スキルの習得をするための授業が開講されており、私は指導教員の一人として派遣をされました。このプロジェクトを選択した理由として、Office のソフトについては日本での授業でもよく使用していたこともあり、それらの経験や知識から貢献できることがあるのではないかと考えたからです。

授業は、もう一人の現地職員と共に行うスタイルでした。当初おこなっていた授業内容は上記ソフトを用いて授業をしているものの、文字の入力や文章の編集といった基礎的な学習をテキストに沿って行うのみで、応用できる有効なスキルが身につかないのではないかと考えました。

そのため、ドリルを私自らが作成し、練習問題を通じてそれぞれのソフトでよく使うスキルの定着を目指すような授業スタイルに変更していきました。例えば、Excel のグラフ作成を学べるように、ある村の人口や職業といった仮想の条件設定をし、それに基づいて生徒が解答を作成していくといった内容にしました。在籍中に習得したスキルを活かして企業のイン

ターンシップに合格できた女性も輩出できたので、非常に嬉しかったです。

さらに、パソコンの授業に加え、日本語・日本文化に関して授業をしてほしいと学校の校長先生から依頼されました。依頼の理由としては、郊外のコミュニティになると中国人やインド人が多く居住する首都とは異なり、外国文化に接する機会が無いため、生徒の外国人や海外文化への寛容性を促進させたいとのことでした。

そのため、授業としては15分ぐらいの長さとなっており、日本語の文法やメカニズムなどの細かい話よりも、簡単な挨拶やよく使うフレーズに焦点を絞り進めていきました。さらに、プロジェクター等の機器がなかったため、画用紙にイラストを描き、日本文化に関連する物事に関して紹介をしました。

最初は私に対して怪訝そうな顔をして受けていた生徒も多かったですが、次第に私に日本語で挨拶をしてくれる生徒も増えたことが非常に嬉しく感じました。

2-2. 小学校での教員としての経験

職業訓練学校とは別に、都市部の私立小学校でも日本でいう3年生ぐらいのレベルの算数の講師として、約1.5ヶ月間活動に携わりました（写真3）。



写真3： 現地小学校で、算数の授業を行っている様子

授業の前半は黒板で問題の解き方、定理の説明を行い、後半は実際に生徒達が問題を通じて学習するという時間になっていました。私自身が小学生の頃に授業の内容についていけなくなっている友人もいたと記憶していたので、出来るだけ丁寧に指導しようと心掛けました。

しかし、生徒によって授業への熱量は異なっており、積極的な参加をしてくれない生徒はいました。それでもできる限り全員とコミュニケーションを図り、包括的な授業実施ができるように取り組みました（写真4）。



写真 4: 授業後に一緒にサッカーをする様子

海外から来ているボランティアは私の他にドイツから来ている女性の方もいましたが、アジア出身の先生は他にいなかったもので、私に興味津々で生徒が話しかけてくれたのは非常に楽しかったです。

一方、よく目にしたのは叩く・殴るなどの暴力を伴う生徒同士の喧嘩でした。一度喧嘩が始まると暴力の応酬が止まらず、大きな怪我に繋がりがねなかったもので、喧嘩を見かけるとすぐに私が仲裁に入り止めました。

日本の学校教育においても友人同士の喧嘩、先生の指導としての暴力などを私も当事者として目の当たりにしてきましたが、それと比べても暴力の頻度がかなり多いという印象を受けました。(他のボランティア仲間の学校でも暴力は多発しているとのことでした。)

当然個人差はあるものの、容易に暴力を振るってしまうことに繋がる要因の一つは、家庭内等での両親から受けた教育的側面の暴力ではないかと私は考えました。

それらの暴力が子どもたちの生命を脅かすものであればかなりの問題ですが、大小問わず習慣的な暴力がある家庭も少なくないと現地の人々の話からは伺えました。

私にとっては単純に子どもたちの怪我に繋がるリスクがあったことと、暴力の伴う教育の弊害に関してエッセイや本などで読んだことがあったため、問題視をしていました。赴任期間中で何か問題提起をし、行動に移すまでにはいたりませんでした。改めて教育における暴力の問題について考えさせられるきっかけとなりました。

3. その他の気づきや学び

ボランティア活動をする一方で、卒業研究のテーマ以外の軸でもより深くウガンダを理解するために、かつ知識の幅を広げるためにも、ボランティア以外に以下のような調査も行いました。

3-1. 中国（人）に対する現地の人々の印象

ウガンダへ行く前、日本の国内メディアを中心にアフリカに対する中国の支援に関して多くの批判的な記事や文章を目にすることが多く、まるで現地の人々は中国の支援に対してあまりよく思っていないかのように書かれていました。

実際に現地に着くと、中国のプレゼンスの大きさは至るところに感じられ、道路、空港などのインフラ整備や小売店、テレビ番組の内容など多岐にわたっていました（写真 5）。



写真 5：エチオピアで飛行機の乗り換え時に目撃した、中国政府系列の企業によって建設中のボレ国際空港の建物

その一方で、日本における報道で目の当たりしたアフリカ大陸における中国の活動に対する一方的な中国批判については、本当かどうか疑念を感じ始めました。

それで、現地で中国、中国人の印象について簡単なヒアリングをしてみました。具体的に質問項目を用意したという訳ではなく、日常会話の中でボランティア先の人々や相乗りタクシーで乗り合わせた人と気兼ねない会話をする中で尋ねていました。

その結果は、どの方々も中国の支援はウェルカムという感じであり、中国人に対する印象についても悪くないという回答がほとんどでした。理由としてはインフラ整備に伴い、現地雇用を生み出していることが大きな理由として挙げられることが多く、次に聞かれたのはお客として現地のお店等にお金を落としていってくれるという理由でした。

このように中国の経済協力へのポジティブな反応が聞かれたのとは反対に、インド（人）に対する現地の人々の印象はあまり良くありませんでした。その理由としては現地雇用を生み出さず、インド人だけでビジネスを完結させて利益を生み出しているという点に不満を抱いているようでした。

統計学的に意味のある調査をした訳ではないので、強いエビデンスにはなりません。日本や他の地域でメディアを介して得られる情報と現地で得られる生の情報では異なっている点があると実感することができました。

3-2. 現地の生活を支える産業構造について

現地に到着して以降、ウガンダの人々の生活を支えているモノはどこの国の資本が多いのか気になり、見かけるたびにメモをして下記の通りまとめておりました（表 1）。

表 1: 乗用車・IT 関連サービス等の主要企業と資本国（2017 年当時、筆者メモから抜粋）

産業	企業名	国
自動車	トヨタ、ホンダ等	日本
バイク	カワサキ、スズキ等	日本
通信会社	MTN	南アフリカ
	airtel	インド
	Vodafone	イギリス
	africell	イギリス
銀行	Century bank	イギリス
	Stanbic bank	南アフリカ
	Dfcu Bank	ウガンダ
	Finance trust bank	ウガンダ
通信 (スマートフォン、携帯)	Samsung	韓国
	HUAWEI	中国
	Tecno	中国

シェア等は把握しきれませんでした。特に製造業や IT 技術といった製品分野は海外企業に依存している印象を受けました。

さらに、走っている自動車の 8 割～9 割ぐらいは、日本車という印象を受けました。しかし、その大半は中古車であり、メンテナンスも最小限であったため、ショックアブソーバ等が機能せず、乗り心地はそれほど良くなかったです。

また、ガソリン等の資源関連はアメリカ、オランダ、ロシアといった世界中で高いシェアを誇る企業が占めており、ウガンダでの石油採掘プロジェクトもフランス資本のトタルが中心に担っているという状況でした（写真 6）。



写真 6: 現地のガソリンスタンド

一方で、飲料メーカーや銀行部門では現地の企業のシェアも高い印象を受け、産業によってはアフリカ地域内やウガンダ国内の企業が力を見せていますが、海外勢力のプレゼンスが経済においてかなり強い印象を受けました。

ここで示した内容は調べたうちの一部ですが、何気なく生活している中でも疑問や興味を持って行動する姿勢は新しい学びに繋がることがわかり、非常に有益だったと思います。この時の習慣が今でも自分の中に根付いていて、仕事で役立っています。

4. むすびに

ここまで読んで頂いてありがとうございました。せっかくアフリカに行けるチャンスを得ることができたので、ボランティア内外でも色々チャレンジすることができました。

一点残念だったのが、渡航期間の途中で咳により体調を崩し、現地の病院で処方された薬で薬疹となったことがきっかけで途中帰国せざるを得なくなったことです。処方された薬の量が、日本で処方されるよりもかなり多かったことが後に判明したため、その辺りの確認も

慎重にするべきだったと考えております。

そのため、志半ばでボランティア活動や論文に関わる調査も切り上げることになってしまい、少々悔いが残る結果となってしまいました。結果、体調不良も薬疹も大事に至ることはなく、熱帯病に詳しい医師をご紹介頂くなど大石先生や他のアフリカ地域専攻同期には大変助けてもらいました。改めてありがとうございました。

卒業論文に関しては上記した通り、「元女性兵士の社会復帰」をテーマに設定して執筆しました。目指していた内容・質には至らなかったかもしれませんが、ウガンダ現地で得られた書籍等の情報も交えながら自信を持って書き切ったと思います。

このウガンダでの経験を元に私の進路は大きく変更し、自動車業界に就職することになりました。国際協力の分野ではなくメーカーを進路として選んだ理由は、当時の能力では現地の問題解決に貢献できる能力や経験が足りないことから、まずは何かに貢献できる人材になるまで社会で揉まれてこようと思ったからです。

前節で記したように、日本の産業界の中では、自動車製造の軸からであればウガンダや他アフリカ諸国のビジネスに関われる可能性が十分にあるだろうと思ったのも、この業界を決断する要因となりました。

しかし、現在就職から1年半を迎える段階で退職をし、イギリスの大学院のビジネススクールに入学することになりました。理由は長くなるので割愛しますが、こうした決断力や行動力にも当時の思い切ったチャレンジ精神が繋がっていると信じています。

Ⅱ. 東京外国語大学から協定校へ、協定校から東京外国語大学へ From TUFS to Partner Universities, from Partner Universities to TUFS

英文編／English Part

東京外国語大学は、サハラ以南アフリカに 8 校の協定校があります (2021 年 3 月時点)。ここでは、協定校ごとに、日本からアフリカに向かった留学生とアフリカから日本に行った留学生の体験記を紹介します。いまだ、全ての協定校との間での双方向の学生交流は実現していません。今後、アフリカから TUFS への留学生が増えていくことで、交流の可能性は更に広がっていくと期待しています。

TUFS has eight partner institutions in Sub-Saharan Africa as of March 2021. In this section, we will introduce the experiences of international students who went from Japan to Africa and those who went from Africa to Japan for each partner university. We have not yet achieved a two-way student exchange with all of our partner universities in Africa. As more and more students from Africa come to TUFS in the future, we expect that the possibilities for exchange will expand even further.

1 . University of Ghana \Leftrightarrow Tokyo University of Foreign Studies

Report on My Study at Tokyo University of Foreign Studies

Charles Acheampong Agyebeng

University of Ghana

Stay period at TUFSS: from April 2018 to July 2018

I wish to begin this report by expressing my esteemed gratitude to all the hands and minds that were involved in the making of this opportunity of a lifetime. The hard work and efforts that were put into this has not been in vain, as it has been the happening that has impacted my life considerably. Again, I wish to assure that if the intention of instituting such a program was to impact change, educate and enlighten its beneficiaries or create an avenue for participants to develop their capacities, then be very assured that the program did nothing short of that.

The 1st of April was the day I arrived in Japan, eager to have a feel of the most fascinating culture I have ever come across. Now I write this with a sense of pride and joy, in that, to some extent, I have been able to gather most of the what Japan has to offer in the limited time as three months. It has to be said that, this chance to study abroad for me is an experience unlike any other. This is because I have come to understand much more both academically and socially than I ever have. I have made new friends from various parts of the world, all thanks to this program.



Photo1: With Dr. Kirikoshi of ASC-TUFS, who has been conducting fieldwork in Ghana.

The courses I enrolled in here at TUFSS have broadened my understanding of the academic circle more than I can express. In sum, I took six courses Topics in Global Issues, Topics in Introduction to Statistic for Social Sciences, Topics in City and Narrative: Film, Survey of International Development,

Topics in International Relations and Elementary Japanese Language Studies. The abovementioned courses amount to 17 hours (10 classes per week) including Japanese Language Studies. I say with pride that, before I arrived in Japan, all I understood in Japanese was “konnichiwa”, “hai” and “iie”, however, through the Integrated Japanese 101a, now I am able to make daily life conversations, read and understand some basic compositions as well as being able to read and write about 150 kanjis. More so, courses like Topics in city and Narrative: Film and Global Issues has taught me numerous academic analytical skills that will prove worthy both in my final project writing as an undergraduate and also in my future studies. Most especially, Topics in International Relations bought a new dimension to my understanding of the international system. Through the opinions and experiences of the authorities and field workers we interviewed via skype, I am spurred to continue with the studying of international relations. These encounters add to the motivations that gingers me to become a diplomat and an individual who wants to dedicate his life to the service of my nation and mankind as whole.



Photo2: Visit to the headquarter of the MARUBENI Company, which provided Charles financial support for his stay in Japan.

Being in Japan did not only mean that I learn about the Japanese culture alone, I also expanded my understanding of the African continent from the seminars organized by the African Studies Centre On 11 April, 2018, I attended a lecture presented by Dr Alex de Waal on the history and the current situations of multilateralism in Africa. The lecture informed me of the Pan African Movement and their role in the decolonization of the African continent. Also, it presented the challenges facing the continent after independence as well suggesting viable solutions for the forging of a better future. In addition to these, on 20th of the same month, I took part in the 13th seminar of the African Studies Centre which was titled, South Korea-Africa Encounter via Culture and Arts: The Case of Seoul African Festival. This was a talk presented by Dr Ohsoon Yun, currently the Executive Director of the Seoul African Festival. This talk expressed the efforts of the organizers in propagating the truth narrative of African

to Koreans, Asians and every individual who has interest in knowing about the African culture. More so, on June 13, 2018, I was present at the “ASC-TIAS Seminar” which presented on the achievements and challenges of Olympics and Paralympic in African countries. This was joint seminar with Tsukuba International Academy for Sport Studies.



Photo3: Mr. Charles playing game during lunch break at TUFU.

I took part in extracurricular activities with the mind of improving both my study of Japanese language and culture. I joined the TUFU Aikido Club from which I have learnt a lot. With the Aikido club, I had the opportunity to attend the 56th All Japan Aikido Demonstration which was held on the 30th of April. Through the activities of the Aikido club, I have been able to develop some valuable though basic life principles like punctuality, confidence and respect for both authority and peers. I have also been exposed to other cultures than the Japanese culture as the club students from Russia, Mexico and Spain. I made new friends and enjoyed exercising while reducing stress. I felt privileged to have been a part of such an amazing community of people who are dedicated to improving themselves.

I also used the avenue provided by the Musashino International Association (MIA) where international students can have host families. The family MIA assigned me to have been of great help to me and my daily living in Japan. I spent every weekend with the Hasebe Family from 29th of April to the 17th of July. Every weekend they took me sightseeing in and around Tokyo. They made my life here most enjoyable and I really appreciate their efforts. More so, on the 16th of June, I volunteered for MIA's Musashino Family Exchange Party. Through this volunteering, I learnt more about Japanese calligraphy and also origami making.

Finally, from 6th to 8th July 2018, I attended the 26th “Day of the African child” in Kumamoto. This three-day celebration saw the gathering of African students studying in Japan, the Ambassador of Mali, Mrs. Aya Thiam Diallo, some Africans living in Japan, Japanese high school students in Kumamoto and some Japanese citizens interested in African affairs. The agenda that was under discussion for this year’s celebration centered on the Sustainable Development Goals and the Convention on the Right of the Child. I took part in the discussion on the state agriculture in the world and the similarities that can be found in agricultural production in both Japan and Africa, challenges and solutions. What I enjoyed

most and found fascinating from this engagement is the energy and dedication that the Japanese use in their efforts to build better relations with Africans.

In sum, this experience is one of the most eventful, amazing and educational parts of my life. Without a doubt, I can say that I now have a comprehensive understanding of my field of study, I have acquired a new language and made life-long friends from different countries and backgrounds who have shaped my knowledge of life. I am most grateful for taking part in this exchange program and I wish to express my appreciation and gratitude to TOYOTA GHANA Company Limited, the African Studies Centre (Tokyo University of Foreign Studies), the International Programmes Office of University of Ghana, JICA and Student Exchange Division (Tokyo University of Foreign Studies) for the daily support and assistance they provided during my exchange period. I really appreciate their assistance and kindness.

Throw Away the Book, and Let's Enter the Village: Recommendation of Fieldwork during Studying Abroad

Yuki Ide

Tokyo University of Foreign Studies

Stay period at University of Ghana: from August 2018 to June 2019

1. Introduction

What type of image comes to mind when you think of an "exchange program"? Dorm life with international friends? Tough classes that you cannot keep up with unless you work until the middle of the night? High-achieving students? ...You would not be wrong, for the most part. The student exchange system between the Tokyo University of Foreign Studies and partner schools is such a typical exchange program. This system allows for transferable credits and thus makes possible long-term foreign study without taking a leave of absence. Being an exchange student is also a type of brand because only students who have passed the university selection process are sent.

However, I am sorry to disappoint, but I was astonishingly not that interested in any of the things mentioned above (not that they are bad or meaningless; it's just a matter of taste). What I wanted was to "immerse" myself in Ghanaian society, not to wrestle with books at University of Ghana, where only the elite gather. Usually, students who want to do this do not choose the exchange program in the first place. They take a leave of absence from college and apply to an internship or volunteer job.

However, I dared to use the exchange program system to go outside the university to do fieldwork. This, in fact, I think, gave me a big advantage in conducting meaningful and safe fieldwork (Fig. 1). In this chapter, I would like to explain how to twist the exchange program system of a "demanding" university to increase one's degree of freedom in the field using my own life as a foreign student as an example.

I hope you will consider this as one way of spending your time while on an exchange program rather than just studying, and I would be very happy if you take an interest in the depth of Ghanaian society, which takes in even selfish obroni ("foreigners" in local language, thus me) and turns us into "relatives."



(Fig. 1) Kofi, who came to the Tokyo University of Foreign Studies as exchange students from the University of Ghana, together with his grandma. I placed my full confidence in Kofi and his family and, through their guidance, was able to expand the reach of my work. Having things like this makes exchange programs worthwhile.

2. Foreign study life

2-1. What sort of country is Ghana?

The Republic of Ghana, where I was doing my foreign study, is located on the coast of West Africa. It is a diverse country with 44 ethnic groups (or over 90 if classified in finer detail) in an area of about two-thirds the size of Japan. In terms of climate, the southern part has a moist (frankly, fatally hot and humid) tropical monsoon climate, while the northern part has a dry savanna climate (where you cannot live without the shea butter prepared by local moms!). Naturally, livelihoods differ depending on the region and ethnic group. In the south, cacao and cassava (an indispensable tuber for making staple dishes) are cultivated, and in the north, grain cultivation and livestock farming are widespread (Fig. 2, Fig. 3).



(Fig.2) Cacao field in the East Region in south Ghana. Cacao fruit grows right on the trunk.



(Fig.3) In the Upper East Region in north Ghana during the dry season. When the grain is harvested, the baobab fruit is ready to eat.

Ghana is famous for being the first country to gain independence from British colonial rule in 1957. Naturally, the people of Ghana are quite proud of this fact. However, there are also areas where you might find an unexpected craze for all things British, with a torotoro (a minibus frequently used by average people) waving the British flag and folks bragging that their English is “British English” (even though their accent and phrasing are completely different!).

What surprised me the most was that its first president, Kwame Nkrumah, lived in a castle (Osu Castle) built by the colonial powers on the coast as a base of control. Is such a thing not usually demolished or treated as a painful reminder? However, the Ghanaians were able to take advantage of things that had been imposed upon them during the colonial era as needed and make them their own (Fig. 4). That is something I like about Ghana.



(Fig. 4) Elmina Castle (World Heritage Monument) in Cape Coast in south Ghana. The former slave trade site has become an important tourism resource for the locals.

2-2. First half of foreign study: Life at the University of Ghana

Based on my own experience, the classes at the University of Ghana are basically packed. If you do not memorize the textbook and fully copy the professor's opinion, you will get terrible grades. Of course, free discussion is not at all allowed, and reports do not require originality. I think that other people may differ in their opinion, but I did not like the classes. However, such lesson formats seemed to be a microcosm of authoritarian Ghanaian society, which was quite interesting. Thus, I observed the relationship between the teachers and students while absorbing knowledge through books (Fig. 5).



(Fig. 5) The symbol of the University of Ghana: the library. It boasts the largest collection of books in West Africa.

However, if days at the University of Ghana are supposedly tedious, that was not the case for me. I was blessed with friends. Many Ghanaian college students live in dormitories on vast campuses in the capital. Students generally do not schedule anything outside of class. Playing around or doing

extracurricular activities is rare (naturally, there are some more active students, but they seem likely to be wealthy).

My friends were no exception. Together we would just repeat a normal life of going shopping, cooking and eating, cleaning our rooms, washing the laundry, sometimes enjoying Korean movies, and going to class when it was time. The only major form of entertainment (for the large percentage that are Christian) is going to church once a week, as they, above all, love to dance and pray with roaring music. I did not like this sort of amusement park church so much, but I loved my friends, so I always followed them.

The church was not the only place they took me. They were very active in introducing me to their families and acquaintances and took turns taking me to the suburbs every weekend. Fortunately, the time spent talking to and cooking with their families was far more enjoyable and meaningful than classes, where I would just be reading textbooks (Fig. 6).



(Fig. 6) Felicia, a friend of mine, returned to a relative's house in the suburbs almost every weekend to take care of her nieces. In this photo, she is teaching me how to make my favorite banku (sour dumplings made from cassava dough and maize powder, a local staple).

As long as you have a textbook, you can absorb knowledge by yourself. As that was the case, I decided, why not relocate outside the university and get more into the community? That is why I spent about six out of the 10 months of my foreign study period off campus and in the field (including my internship).

2-3. Second half of foreign study: Field work in rural areas

I stayed mainly in two places: the mountainous area of the Akuapem Hills in Ghana's Eastern Region, where I was an intern, and my second home, Manso Adubia. It is a rural village enclosed by tropical rainforest about three hours from Kumasi, the regional capital of the Ashanti Region in central Ghana. I made Adubia Village my main field of work, conducting research on a form of "family" that

transcends kinship.

The image of African families is that they are traditionally quite large. However, the effects of urbanization and globalization are definitely pushing their way into rural Ghana. Many people are going back and forth between urban and rural areas to go to school, get a job (migrant work), go to the hospital, or other necessities of life. So, has the old-fashioned large family shrunk or disappeared? Is Ghana destined to become like Japan and be a society of distant and isolated persons? Personally, I do not think so.

In the first place, Ghanaian people have a very broad definition of "family." People who are close to each other, despite not being connected by blood, call each other "Brother" and "Sister" and treat each other like family members. On the other hand, sometimes, people even move out to the city and live together while relying upon unfamiliar blood ties. Encountering cases such as these, I found myself asking, "Is the originally flexible large Ghanaian family becoming increasingly fluid and 'expanding' as people move about?"

I considered this awareness to be the result of field work conducted at each place of stay (Fig. 7). If I had not gone out to towns and villages, I would not have realized that the whole picture of "family" in Ghana could not be grasped in terms of the fixed and closed Japanese family. The reality of towns and villages brilliantly destroys Japanese assumptions and images of Ghanaian society and forces our eyes open. Touching the realities of life in fieldwork yields not only research but, sometimes, a turning point in one's own life.



(Fig.7) Ellen and her mother make the staple food fufu (rice cake made from cassava and kokoyam). As is often the case in Ghana, Ellen is adopted. She is on good terms with her adoptive mother and her real mother, who lives in the neighborhood (as of May 2019). The flexible view of family in Ghana society greatly changed my own.

3. Benefits of being a University of Ghana student

Although I called myself a University of Ghana student, I was actually only on campus for four months, but having this status made a lot of sense.

First, despite contradicting the title "Throw away the books," you can easily obtain interesting local literature at university libraries and bookstores. Before my foreign study, I thought that there was hardly "any" information about Ghanaian family system written by the Ghanaian people. However, this was incorrect. It is not there was not "any" information; it just had not reached Japan. In the latter half of my foreign study, when I lived in a rural area, I occasionally came to the university and was able to procure various documents, which was of great help to my field work.

Another advantage of having access to information is that it is easier to find good places for field work or internships. It would probably be difficult to determine where to work in Africa while in Japan.

I hear that even if you can find such places, you have to go through sites that charge high commissions, endure exploitative practices, and deal with unsafe management. However, if you are locally based as a student, you will not be bothered by such problems when searching for a place to pursue an activity.

If you go over to Ghana as a student, you will get a lot of local tips. You can pick a location after checking on what activities are actually taking place there. Moreover, introductions may be provided by JICA volunteers, Japanese company personnel, or local friends from the university (this method avoids the frustration of not getting replies to your inquiries). Instead of paying a fee, you may even get paid depending on the terms and conditions. Furthermore, it is possible to participate in community-based activities through a local NGO that might not have a homepage or similar communication tool but is doing wonderful things (Fig. 8). You will not feel pressed into choosing a location while still in Japan.



(Fig. 8) I visited the JICA volunteers in each region to see their activities. In some cases, those who finished their terms started NGOs and continued their activities, and it will be interesting to intern with such an organization.

Some people may worry, "Won't freely engaging in activities this way get you expelled as an exchange student?" However, the University of Ghana was very supportive in this regard. The person in the foreign study department who heard my plan to move to a rural area and work unhesitatingly replied, "No problem!" and told me, "Just tell us where you are so that we can protect you even if you leave the university." Moreover, the dormitory fee I paid for the first year was promptly returned even though I had to go to several offices.

A big point is that even if you operate alone, you are protected by the university. In Ghana, which is out of Japan's sight and full of local police corruption, the only means of self-defense is to connect with reliable people. However, can the people around you (Ghanaian, Japanese, or any other) really be trusted? I do not know. To be honest, I think it is a situation where crimes such as date rape are likely

to occur. However, a good deterrent to crime is to have a clear local affiliation with some place in authority. I think this is very important.

However, it is rude to universally consider the local population to be untrustworthy. To anyone on the receiving end, you are a foreigner of uncertain identity. If you cannot let go of your prejudices, you may not gain any trust yourself. When I was doing field work in the village, whenever I went to a public institution, I was often asked, "Where is your letter of introduction?" Ghana's public offices are so authoritarian that they take great care of paperwork (which makes it annoying that their management is so messy; the running gag is that even if a document has been heavily critiqued and rewritten multiple times, it ends up immediately tossed out!). At such times, I would solve things in one shot by saying, "I'm a student at the University of Ghana," and showing my student ID card. Thus, belonging to a local university is very advantageous for conducting surveys smoothly.

On the other hand, precisely to the contrary of government offices, once you join a village community, you are no longer a stranger. You are a member of an expanding "family." In Ghanaian society, with its open ties, even if your hair is straight and you have single eyelids with your yellow skin, you can live together and be a "family" (Fig. 9).



(Fig. 9) With my family in my second home, Manso Adubia.

4. Conclusion

There are various forms of foreign study. You can work on field work as I did, or you can spend a lot of time studying at the university. Enhancing your hobbies and club activities also may seem like fun. In fact, there is almost no such thing as "must be XX" or "should not be XX." For example, in my case, even though I deviated a little from the curriculum I was not deported. Furthermore, even though I was betrayed by a person and it made me lost my faith in humanity for a temporary period of time, it could not kill me (However you DO have to take measures to prevent injury to yourself and others as much as possible). Even if you fall off the rails of the world a little, you can proceed in the direction that your heart's bells ring. I am sure you will be fine; the ship of life does not strand easily.

2. Protestant Institute of Arts and Social Sciences <=>

Tokyo University of Foreign Studies

Essay about My Stay in Japan

Shukulu Murekatete

Protestant Institute of Arts and Social Sciences (PIASS)

Stay period at TUFS: from October 2018 to July 2019

I came to Japan last year at the end of September. I studied and stayed in Japan for ten months. I was an exchange student at Tokyo University for Foreign Studies (Photo 1). My life in Japan is divided into two parts. Mostly I spent my time studying, I was taking courses of international relational and area studies and Japanese language. During weekends, holidays and free time, I did different things related to social life. Below are some of the things that described how my life in Japan was.



Photo 1: In April 2019, with cherry blossoms at TUFS

For the first time in my life, I learned Japanese which is very different from my mother tongue in term of the structure of the sentences and letters. But the most thing I liked about the Japanese language is how it is full of harmonious spirit and respect. The time I spent studying Japanese it was a good time for me to learn more about Japanese culture, especially the norms and values of Japanese society. Even though studying Japanese was quite difficult for me, and it required to spend extra time studying it privately, but I enjoyed it, and it helped me to get a lot of new vocabularies with a short period of the time (Photo 2).



Photo 2: In September 2018, conversation with ASC staffs after the arrival in Japan

Due to coming to Japan, I got the opportunity of learning the history of Japan especially during World War II and post-war reconstruction of the country. Something that surprised me is how Japan developed economically at a high level. This helped the country to recover from the destruction of the war. The success story of Japanese economic development could be a good lesson for all countries that are still struggling with war recovery.

History of Southern East Asia, before I came to Japan, I knew little about the history of southeast Asia. But after attending different classes, I learned a lot about it. For example, before I attended the class on peacebuilding in theories and practice, I did not know the conflict in Philippine in a place called Mindanao, and how Japan supported in solving the conflicts. I like the approach of Japan used in Mindanao for helping people to solve the country's problem but, at the same time, helping them to develop economically.

Also, it was a great experience for me to visit different shrines in Japan and know about Japanese religion Shintoism. I went to different shrines such as Yasukuni Shrine, Asakusa and many others. But mostly I liked Kurayami festival as part of religious practice (Photo 3). I liked the whole idea of Kurayami. I enjoyed different performances during the festival. Even though I belonged in different religion, I appreciate the different practices of Japanese religion and I learned a lot from it.



Photo 3: In May 2019, Participation in Kurayami Festival at Fuchu City in Tokyo.

Not only Shintoism, but I was also blessed to visit different temples around Japan and it was a good time for me to learn more about other religion. I remember in my higher school, I learned about Buddhism but I could not understand the practice of this particular religious group. But, after got to Japan and visit different temples, I got to understand different practices of the religion that I learned many years ago in my higher school. One of the popular temples that I visited is the golden temple in Kyoto.

Apart from studying in the class, I spent some of my time doing an internship in a nongovernment organization called Munakata Foundation. In this grant organization, I learned a lot about NGOs such as how to run the organization, founding process, how the organizations are getting donations and the means they are using to make them well known. This was a good time for me to learn practical things rather than theories.

Still talking about my stay in Japan, I was blessed to get time to visit different places in Japan. Not only different places in Tokyo but also outside of Tokyo. I went to places like Osaka, Kobe, Kyoto, Okinawa, Hiroshima and other areas that are surrounding Tokyo (Photo 4). For example, I went to the peace museum in Hiroshima to learn about the Atomic bomb. I was shocked to see how people suffered from the Atomic Bomb. I met one survivor of Nuclear Atomic Bomb, and he shared with me his testimony during the period they dropped the Atomic Bomb in Hiroshima. I learned a lot within a very short period. Before I came to Japan, I did not know much about the Atomic Bomb in Japan.



Photo 4: In November 2018, Visit to Okinawa with Prof. Sasaki from PIASS

Another thing that I enjoyed a lot during my stay in Japan was spending time with different groups of people. Such as the group of old women from Tachikawa called Connecting Children from African and Japan. From this group, I was surprised by how these people are active even though they are old, and they are eager to try new things like learning a new language like English. As a young person, I realized that it is possible to learn something new even though someone is his or her seventies or above. This encouraged me to be always active and not to consider age as an obstacle to getting to your goals

in life.

In addition to all the above is that I enjoyed cultural exchange with Japanese students as well as international students, and having friends from different countries. This was very good for me because there are stereotypes that I had before meeting new people from other countries that changed through interacting with different people from different places. I realized how good diversity is because I got the new insight into different things from different places of the world from people whom I was talking to. This helped me to open my mind and see how we are interconnected despite the different backgrounds, cultural or nationalities (Photo 5).

Despite the challenges that I met a new person in the place. Like the challenge of winter because it was very cold for me. And it was my first time to experience winter. But my Stay in Japan was full of more interesting things and I benefited a lot from it in different aspects such as academic and social. Things I learned in Japan are the ones of the precious gift that I have ever had in my life. I would like to thank anyone who contributed anything so that I could be able to come and stay in Japan for ten months. I will always remember the good opportunity gave me in my life.



Photo 5: In November 2018, exchange meeting with her supporters and TUFS students

Report on My Stay in Japan

Elie Rodrigue Icishatse

Protestant Institute of Arts and Social Sciences (PIASS)

Stay period at TUFS: from October 2018 to July 2019

My name is Icishatse Elie Rodrigue. I am 22 years old and I am from Burundi. I studied and lived in Japan (Photo 1).

From September 23rd, 2018 to July 17th, 2019, I stayed, in Japan, at Tokyo University of Foreign Studies. From my home university - Protestant Institute of Arts and Social Sciences in Rwanda, I was at TUFS as an exchange student under ISEP (International Student Exchange Program). I was invited by the African Studies Center which conducted a fundraising for my airplane tickets and living expenses. In addition, I was a recipient of JASSO scholarship.

In this report, I will discuss two main points: on one hand, my studies at TUFS, and on the other hand, my life in Japan as a foreign person.



Photo 1: Rodrigue with Japanese souvenir which one of his supporters gave him.

First of all, as my major is Peace and Conflict studies, I was interested in classes related to international relations, peace - building and the history of Japan as a country which experienced a dramatic change, in terms of Peace loving, from the end of the Second World War (Photo 2). During the Autumn semester which started in October 2018 and was completed in January 2019, I took classes on International Organizations and Human rights, Theory and Practice of Peace building and Development Cooperation and Japan. I caught a lot of lessons especially in the class on Human Rights which was my first class on such a topic. As I am from Burundi, a country that experienced political crisis recently, in 2015, I realized how human rights violations were inflicted to innocent Burundians.

They didn't have any governmental institution to help them and, at a certain point of time, even the international community couldn't intervene and help. This fact was discussed in the class as my fellow classmates, under the instruction of our Professor, realized that the sovereignty of the state, sometimes, is a block to the relief of those whose human rights are violated.



Photo 2: Having seminars on the topics of peace and conflict with high school students.

During the winter period, I took a class on the Asia - Pacific war. This class was very important for me as I was eager to know about the history of wars into which Japan was involved. I didn't know that Japan used to colonize many countries. Surely, I have already learnt about Hiroshima and Nagasaki atomic bombs, but I haven't learnt the war history which led to them. During the class, which was run as seminar with different speakers and different topics, I learnt about the memory issue in Japan, the Okinawa issue with US military bases, the comfort women issue and the victimhood sense which was promoted after the A-bombs. During the last sessions of the class, we watched a movie together about the A-bomb and we conducted online discussions about the movie with Students in America. I liked the session very much.

During the spring semester, I took classes on cross-cultural issues of collective memory in Japan, the Allied Occupation of Japan, International cooperation, Social movements and Democracy in Postwar Japan and the Theory and Practice of the United Nations. I enjoyed the United Nations Class because I got to know some details about the organization which is famous even in Burundi, my Country. For instance, I was shocked to learn that the right of veto which is famously spoken on media is not included in the charter of the United Nations. Also, I enjoyed the end term work which was about to draft a resolution on plastic waste. I represented China, a country which used to monopolize the global imports of wastes before the ban of plastics waste importation in January 2018. I have never done a similar work during my university studies.

All in all, the classes at TUFUS were very interesting and satisfying with updated academic

information. Despite the good atmosphere reigning inside the classrooms, the professors were very humble. They listened to students' questions, suggestions and comments, they all presented a clear plan of the class during the first session and the plan was followed with few exceptions. Requirement readings were at the center of the education at TUFS which was very good for me because I also wanted to improvement my book- reading capabilities.

Second, in order to grasp some Japanese cultural understandings, I took classes on Introduction to Cultural Studies, Japanese Religion and Popular Culture, and Japanese Performative Culture. Also, I took Japanese language classes at JLC (Japanese Language Center). I still remember how was wonderful for me to learn and research about Takarazuka during the class on Japanese Performative Culture. I was more interested in the songs, dances and costumes of Takarazuka actresses than the gender ideals around Otokoyaku. My research, which was the end term paper, has the goal of investigating on the areas of interests in Takarazuka.

With regard to JLC classes, I completed two levels: 100 and 200 level. I enjoyed Kanji because some of them have interesting meanings which can be drawn from the combination of different Kanjis. For instance, I learnt 親 - おや (Parent). The kanji is made of three different kanji: 立つ (to stand), 木 (tree) and 見る (to see). If I can try to make sense of this kanji, a parent looks (見る) at his child standing (立つ) on a tree (木) and says あぶない。

Also, I enjoyed the Honorific Expressions (けいご) which are けんじょうご - Humble form for and そんけいご - Respect form. In Burundi, we don't have such rich structures to express the respect and the humbleness.

Outside the classrooms, I joined Choeur Soleil, a chorus club at TUFS, and LETS, an association that bring together students who speak and learn different languages in order to exchange knowledge.

As I am concluding, allow me to share what I did outside TUFS. I traveled in many places in Japan: Hiroshima, Okinawa, Osaka, Kobe, Kyoto, Ichi, Miye, Kanagawa and Shizoka. In Hiroshima, I visited the Hiroshima Peace Memorial Museum and, in Okinawa, I joined a nonviolent protest in front of Henoko base. Also, I participated in Kurayami festival and visited many Churches, Shrines and Temples such as International Christian University (ICU) Church, Ise Jingu, Meiji Shrine and Golden Temple. At Ise Jingu, on May 1st, I joined ceremonies to welcome the new emperor of Japan, at Oi Baptist Church, I participated in the commemoration of Genocide in Rwanda and, at Jindaiji temple, with a classmate from Portugal; I visited a pet cemetery which is a culture Burundians don't have. Furthermore, I stayed in families in Osaka and Nagoya. I ate and learned to cook different Japanese meals such as Nabe and Okonomiyaki. I interacted with local groups such as the Connecting Children of Africa and Japan. All in all, I can confirm that I lived in Japan and lived with Japanese (Photo 3).

I want to address my sincere appreciations to my Professor Kazuyuki Sasaki, to African Studies Center, to donors in the crowdfunding, to JASSO scholarship administration and to all my friends in Japan.



Photo 3: In May 2019, Rodrigue at Kurayami Festival at Fuchu-shi

Essay on My Stay in Japan

Octave Gahirwe Kabera

Protestant Institute of Arts and Social Sciences: (PIASS)

Stay period at TUFS: from October 2019 to July 2020

I still remember the first time I went to Japan; last year towards the end of September. I was very excited to visit the country and even more excited to meet new and a diversity of people. My stay in Japan was from September to July. Which is long enough to learn and experience a few things, but at the same time it felt like a short stay.

Thanks to the efforts of Prof. Sasaki, Prof. Takeuchi and the African Studies Centre, crowd-funding members and TUFS, I was able to go to Japan as a TUFS exchange student from Rwanda. During my stay in Japan I experienced a lot of good things and new perspectives of life which I learned from a variety of people of different cultures and age groups. I learned very important things which can help me improve my life, both in my daily experiences and with my academic studies.

My experiences

Most of my friends were from different countries such as; France, Spain, UK, USA, Brazil, Nigeria and New Zealand to name a few. Thanks to TUFS I was able to make such friendships which I never thought I would be able to.

To my surprise, I met some very interesting Japanese people which I later befriended. I was surprised because before coming to Japan I was under the impression that Japanese people were quiet and a bit shy, but after a few days of spending a bit of time with my Japanese friends, the opposite was true. Each of them were very interesting, some ranging from very active and outgoing to a few others that are more reserved but just as much of good company.



Photo 1: Friends at a Halloween party (October 2019)

When I was in TUFS I stayed in one of the dormitories which were reserved for international students. There I met lot of students from other countries and we would often explore the cities of Japan, shrines, temples and in a few occasions' festivals.



Photo2: At a festival with a few of my friends (October 2019)

Food and cultural festivals

Someone once told me that the best way to fully experience a culture is through the food and language. Unfortunately my Japanese is not good enough to have long conversations with local people, so I tried the next best thing. Food! During the first few weeks in Japan before intensive classes started I was on a mission to get fat on Japanese food. Although I didn't get as fat as I wanted to be, I thoroughly enjoyed the tastes of Japanese cuisine. What I came to realize is that sushi and sashimi were incredibly tasty but with a bit of soy sauce, my taste buds would be in a frenzy of delight. Sushi and sashimi are just a few of the food I enjoyed there. The most memorable of the foods I tried in Japan were okonomiyaki and tempura.



Photo 3: Tempura in Okinawa (December 2019)



Photo 4: Sashimi in Okinawa (December 2019)



Photo5: Okonomiyaki



Photo6: Fish dish I really enjoyed

During my stay in Japan I went to a few festivals such as the chestnut festival. I had a lot of fun meeting new people and eating some very delicious chestnuts. It is only then where I saw parades which seemed very Japanese and different types of foods being sold. This made me appreciate how beautiful the Japanese culture is.



Photo7-8: Chestnut festival in Fuchu (October 2019)

Trips to Okinawa and Hiroshima

Okinawa

During the times when I wasn't studying I had the pleasure of going to Okinawa. I was very happy to go because at that time winter was approaching and it was very cold in Tokyo, but prof. Sasaki planned a study trip to Okinawa and mentioned that it would be warmer there.



Photo9: The beautiful blue Okinawa sea

While in Okinawa we learned about the army bases in Okinawa and a few cases of how the Okinawa people are distressed by this. However, I was glad to hear that some locals would protest every week. As a student of Environmental Science I knew that the building of new army bases would negatively affect the natural environment, so something needed to be done to ensure that the environment and peace were fought for. In order to this, people would protest and slow down the building of these army bases and fortunately I had the chance to join the local people in protesting. I just hope our efforts and the efforts of the protesting locals are not in vain and that peace and understanding can be achieved.

Hiroshima

Hiroshima was one of my favorite places in Japan; i enjoyed its presence and happy people.

Despite my enjoyment and wish to one day return there, it was a bit of a sad but fulfilling trip. What made it sad were the stories which I read about the effects of the A-bombs and how people suffered. It was quit depressing but very insightful. My hearts go out to those still affected directly or indirectly and to those who have overcome the pain of what had happened.

After visiting the museum two friends that we met in Hiroshima took us out to okonomiyaki and it was great! It was my first time trying okonomiyaki and I was told that Hiroshima has the best okonomiyaki in Japan.



Photo 10: In Hiroshima with friends and Pastor Harima.

In Tokyo

In Tokyo I would sometimes travel to different parts of the city such as Shibuya, Shinjuku and Kichijoji, but my favorite place was Kichijoji because it was closer and had everything I needed from bigger cities such as Shibuya and Shinjuku. Seeing such tall buildings and a more urban life than I'm used to in Rwanda was a nice surprise and worth the experience.



Photo11: Tokyo metropolitan tower

Weather (winter)

I love the changing seasons but i think winter was the worst thing I've experienced in Japan! I'm naturally used to warmer weather so winter was very difficult for me to cope with. I did enjoy the beauty of snow but not so much the feel of it.

My school life

Life in TUFS was often busy in between classes and club activities. At PIASS (Protestant Institute of arts and Social Sciences) I study environmental sciences. With this course, I was a bit worried if I would find any courses related to my field of study but I was glad to found a few.

In the first semester I took about 11 courses which were all very interesting including Japanese 101. The courses which I found most interesting in the first semester were my Japanese courses, globalization and social change and world geography. The courses which I highlighted were very

engaging. The manner with which the lecturers would conduct the class felt very professional and personal. The classes tried to get each and every student to give their own opinions and views on the courses. The classes never felt like lectures but more like conversations.

I had some trouble being early for classes in the first few weeks but once I got used to the campus, I learned how to manage my time for almost each class and although I'm no longer in Japan, I wish to experience the teaching methods of TUFS.

I was looking forward to the second semester, but unfortunately for everyone covid-19 left the world stuck and at home. The pandemic did not allow for classes to be open so the TUFS students (new and old) had to take classes online. Although it was inconvenient to meet the new students joining the second semester and physically join clubs for school activities, studying online was not so bad and I could enjoy classes and still learn a lot through video. I appreciate the lecturers for making the classes interesting even in that situation.



Photo12: TUFS campus

Club activities

Towards the end of the first semester I joined the QUATRO club for dancing. The main club I was in was house dancing. As an African, dancing is something I do almost all the time and joining that club not only made me want to dance but also meet new people. I met a lot of very talented Japanese and international students, each with amazing dance moves!

The other club I joined was a basketball club. This was my favorite club but unfortunately due to covid-19 it had to be closed and we could no play.

Despite the missed opportunities caused by the pandemic, I had a lot of fun in Japan and I learned a lot about myself and gained a new understanding of the world while I was there. I shall never forget the courses I took and the teachers who shared their knowledge with me and allowed me to share mine with them.

TUFS for hosting me, putting me on JASSO scholarship which really helped and the African Studies Centre for making sure I was alright and enjoying my stay in Japan. I would like to show my

appreciation to the crowd-funding members for making it possible for me to go to Japan and last but not least Prof. Sasaki for sending me to Japan blessing me with that opportunity to learn, explore and make new connections.

Thank you all!



Photo13: Me and my friends that I miss so much !

My Stay in Japan

Hélène Mikanda Alinethu

Protestant Institute of Arts and Social Sciences: PIASS

Stay Period at TUFS: from October 2019 to July 2020

My name is Hélène Mikanda Alinethu; I am a 20 years old Congolese lady. I studied and stayed in Japan for 10 months. I am a student at the Protestant Institute of Arts and Social Sciences, in Peace and Conflict Studies, program of Peace-building and Development.

From September 24th, 2019 to August 3rd, 2020, I stayed in Japan, Tokyo, at the Tokyo University of Foreign Studies "TUFS". I was there as an exchange student under the ISEP "International Student Exchange Program"; from my home university, I was invited by the African Studies Center which conducted a fundraising that supported me for my airplane tickets and living expenses. Apart from that I was supported by JASSO as one of their scholarship recipients.



Photo: With Prof. Sasaki and Octave, at Shuri Castle, Okinawa.

In this report, as I am going to talk about my stay in Japan, I would like to thank first of all those people who made my stay in Japan possible and enjoyable, those who supported me throughout the whole process. This report will be talked about into two main parts; at first I will talk about my life at the university as a student, and lately I will talk about my life as foreigner in Japan which will include my social life and adventures.

First of all, I am a student in Peace and Conflict Studies and while in Japan I was interested in learning classes related to peace-building, war and postwar history of Japan, history of reconstruction of Japan, international relations, Japanese culture and religion. During the first semester, also called fall semester, I took seven classes which are; Oral communication for Japanese language lessons, introduction to gender in contemporary Japan, intercultural communication, international law, and diplomatic relations of postwar Japan, China's economic reform and globalization, and International protection of refugees.

I learned a lot in classes that I took for this semester especially in the class of international protection of refugees; it was my first time to have a class on this topic and things that we did in the class were related to some kind of cases happening in my country, Democratic Republic of Congo. This class talked about refugees and their rights, asylum seeking, and many other interesting topics; the most interesting thing to me was about the rights of refugees because this took me back to my country where I see different cases of discrimination of refugees, and this made me understand that it is not easy to leave one's home and be expected to feel comfortable at an outside home; therefore, it is not easy to a refugee, all we need is to make them feel comfortable and we should let them find peace at our host places.

About the classes that I took on history of Japan, I learned a lot about the Japan's international relations with other countries especially those from Asia; the history was such interesting as I learned about historical relations between Japan and Asian countries, and how that still have some impacts and still affecting Japan's international relation and globalization with the world. Another interesting thing was to learn about gender in Japan, as a foreign woman from Africa, it was really great to know about gender in Japan.

During the second semester, also called spring semester, I took again seven classes based on my interest; the classes I took are; Topics in the news media and its role in global society, topics in religion and popular culture in Japan, topics in global business and leadership-innovation, introduction to intercultural communication and language education, Japanese performative culture, gender and globalization, and social movements and democracy in postwar Japan.

In this semester I learned a lot about the Japanese culture, religion, war and postwar history, reconstruction and development in Japan. It was so interesting to take all those classes on Japan because I got to know that as my country is right now, Japan also went through hard time and they did so much effort to develop fast, they lost, but still they persevered till they reached the goal. I also got to know about religions and culture in Japan; was such interesting to see how religion is also involved reconstruction and that, they, on their own ways support the development process through various ways.

To understand well the Japanese culture, I took a class on Japanese performative culture and a class on religion and culture in Japan; from which I got to know about different values, norms and I also got to see the beauty of Japanese culture. I learned about the Takarazuka performance and was so interesting to see how women perform the dances, songs, and put on costumes no matter the gender ideals around the place. I did a research on that as a way to understand well the gender ideals and roles

in the Japanese society with regard to the meaning of the Takarazuka performances.

To deepen my knowledge on the Japanese culture, I tried to learn Japanese with regard to JLC classes; I started just one level, 100, which I could not achieve, but kept doing my best in the oral communication class. The thing that I liked the most in learning Japanese was the polite way the language is spoken; I found that Japanese is the most polite language and most of the words I could hear every day apart from "arigatou" was "sumimasen" and "irashaimase"; the language was different and hard to learn for me even though I really love it. During the classes, I did not only learn from the lectures; I also learned from the lecturers and my fellow students through their shared experiences and knowledge.

The second part of this story is about my life outside the university; outside the classrooms, I joined LET'S, an association that brings together students from different places and who speak and who are interested to learn different languages in order to exchange knowledge; I also joined a bible study group at TUFS, a group of numbered students who are Christians and who are open to welcoming other people who are not Christians.

Talking about my social life in Japan; I had a great social experience in and outside school; I got more experiences from the friends I met in Japan, and many of them were from different countries all over the world; this is the greatest experience I have ever had in my life, living with youths from more than 50 countries in the world. Apart from that I visited so many places in Japan, apart from Tokyo; Hiroshima, Okinawa, Kobe, Osaka, Kyoto, Kanagawa, Ibaraki, Chiba, Saitama, Shizuoka.

Okinawa is the place where I stayed for many days, and I visited the Himeyuri Peace Museum, the Okinawa Prefectural Peace Memorial Museum, and also different US military bases where I joined a nonviolent protest in front of the Camp Schwab in Henoko. In many of these places I visited, I also participated in Church services, I visited different Shrines and Temples; I usually went to church at the International Christian University.

At my visit in Kyoto, I tried the Japanese traditional dressing "Kimono". Apart from just visiting, I stayed in families in Osaka and Ibaraki. I also tasted some Japanese dishes, among which I liked Okonomiyaki and Takoyaki. On January 13th, I joined an international restaurant for children with some Japanese and international students, where we cooked different kind of foods, and I made Congolese Ugali made with maize flour. Within the first academic term, I also started to interact with students of the Ikubunkan Global High School, with whom we organized seminars on Africa and Japan.

I also did my internship at the Munakata Foundation, where I usually did researches about different issues in Africa and presentations about my findings, and sometimes I wrote some proposals to the Foundation basing on what could be done. I lastly visited Hiroshima where I wish I could spend more time; in Hiroshima I learned about the Japan A-Bomb, read some testimonies of survivors and also learn about the Japanese understanding of what happened during and after the war; I also learned about the Japan reconstruction and it was also interesting to learn about the atomic bomb from history in the Hiroshima Peace Memorial Museum. Apart from that, I learned about the social life in Hiroshima and got the chance to visit just for some minutes, thanks to the pastor and some friends, we had a great

moment in Hiroshima, and we could also try and enjoy some dishes.

To conclude, I will say that my stay in Japan was beyond my expectations; I learned a lot from the ten months experience I got from Japan. Not just as a student, but also as a professional; I have improved my skills and knowledge and for me, my stay in Japan was a dream come true. All these could not have been possible without the support of different people who made all the things that I have said above possible.

I want to thank all the crowd funding group with each person involved in it, I want to thank the African Studies Center, I want to thank Sasaki Sensei, I want to thank Baptist community in Japan, the TUFS and JASSO administrations, all my Japanese and international friends I met in Japan and those I met in Rwanda; you all made my stay in Japan enjoyable and possible, and everything you did for me will never be forgotten; your support changed me, and I will always be grateful.

My Study in Rwanda and after Returning Home: The Post-genocide Reconciliation and Some People I Met in Rwanda

Chika Umetsu

Tokyo University of Foreign Studies

Stay period at PIASS: from October 2018 to July 2019

1. Introduction

My name is Chika Umetsu, and I am a fourth year student in the School of International and Area Studies at Tokyo University of Foreign Studies (TUFS). I was an exchange student in Rwanda from October 2018 to September 2019. Even 10 months after I came back to Japan, sometimes memories in Rwanda suddenly comes to my mind. Whenever I throw out a huge amount of food at my part-time job in Japan, I remember the children begging for 100 Rwandan Francs (JPY10) in the city of Rwanda.

Drinking a cup of coffee, I recall the clerk who worked at the coffee shop I frequented. When I eat a banana or boiled egg, I remember the girl who worked at the kiosk where I ate breakfast (they knew my name, although I never introduced myself) (Photo 1). Writing this report about my experience in Rwanda is making me want to return there right now.

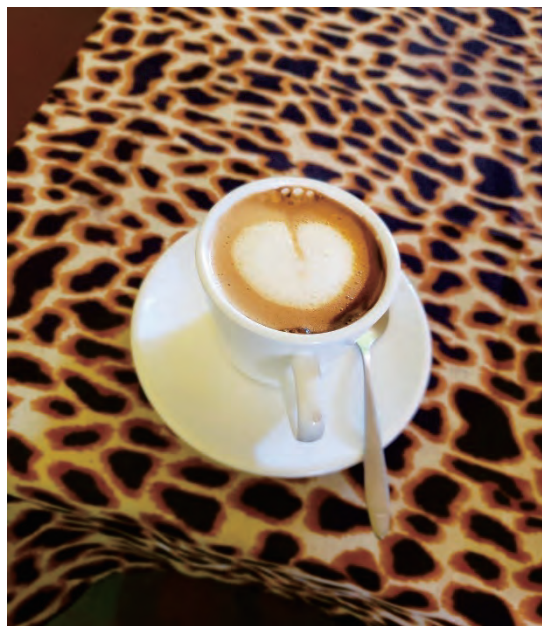


Photo 1: Caffe latte at the coffee shop in Huye. Although I did not introduce myself, the clerk here called me by name. In Japan, Ethiopian coffee beans are common; however, it is great to see Rwandan coffee beans occasionally.

I majored in peace building at TUFS, learning about the causes and factors of violent conflicts and social issues, and how to resolve them. I decided to study in Rwanda because I thought I could learn peace building practically, considering the country remains involved in post-genocide reconciliation.

In Rwanda, I studied in the Department of Peace Building and Conflict Studies at the Protestant Institute of Arts and Social Sciences (PIASS) (Photo 2) as an exchange student. In addition, I did an internship at a local NGO involved in post-genocide reconciliation activities, assisted a cooperative women's reconciliation group, and worked as a staff at a Japanese social business group selling custom-made clothes made of African fabric to mail-order customers in Japan (Photo 3).

I would like to share some of the most memorable experiences in Rwanda..



Photo 2: The Alternatives to Violence Project workshop. It aimed at developing nonviolent conflict resolution abilities. Students from different departments in addition to the department of Peace Building and Conflict Studies participated. We learned technical tips and knowledge to solve problems without violence in the workshop, but also we might pay more attention to our attitude toward other people and problems as participants in the nonviolent workshop.



Photo 3: Atomic bomb exhibition organized by JICA volunteers. I invited other students to visit there together and we learned a lot.

2. Difficulties of apology and reconciliation

With the help of Dr. Kazuyuki Sasaki (Note 1) I participated in the activities of a cooperative women's group called Umucyo Nyanza (in Kinyarwanda, "Umucyo" is "light" and "Nyanza" is the name of the area where they live and work), which Dr. Sasaki and his wife Megumi support. Umucyo Nyanza comprises women either who are victims or whose husbands are perpetrators convicted on murder or accomplice. The aim of Umucyo Nyanza is to reconcile and to earn income by working in cooperation with other members to grow flowers, make book jackets, clothes and small items, and sell them (Photo 4).



Photo 4: The women of Umucyo Nyanza usually work very peacefully with smile. I saw them crying just once. It was during the commemorative ceremony. Their cry made me sad too.

Former exchange students from Japan also participated in this activity; however, I think the activities during my stay were different. In the past, the main target of the activity was women; however, when I was there, they started working with incarcerated husbands (see note 2).

Several women members visited the prison for the first time as the activity of Umucyo Nyanza, speaking with their incarcerated husbands. I was allowed to accompany them on this important occasion. I heard that any victims had never visited the prison before and the workers in the prison were surprised too.

The most impressive part of the visit was when those incarcerated said, "I am grateful that my wife tries to reconcile on my behalf." and "I myself would like to apologize and participate in the reconciliation." Organizations such as Umucyo Nyanza, which visit prisons, are rare, and thus, they

Note 1: He has been involved in the reconciliation project in cooperation with local NGOs in Rwanda since 2005. In 2011, he was involved in the establishment of the Department of Peace Building and Conflict Studies at PIASS. He teaches at the university.

Note 2: Women took a main part of the activity for reconciliation, but the target of the activity extends to their children, their husband, and the community they belong to. The children's activities began in 2017. And the activity for men has started recently because more men will return from the prison to the community soon.

wished they could get a chance to participate in the reconciliation process in the prison.

However, it is obvious that some victims do not want to see the perpetrators. When considering reconciliation, striking a balance between the two sides is more difficult than I had imagined. I had connections with those who experienced the genocide. Although it is impossible to know their whole feelings, it was easier to feel part of them in Rwanda than in Japan. It is all the more reason why I had to be more careful not to be too heavily affected by one side's feelings.

3. Perpetrators and victims

During my stay, the women's own perception toward perpetrators and victims seemed to have changed. They visited a genocide memorial museum with their own will. However, one of them fell ill of trauma.

Her husband was in prison as a perpetrator. However, she also had Tutsi relatives, some of whom had been killed during the genocide. She was in a difficult position. Her illness became the catalyst for other members changing their perceptions of the perpetrators and victims.

One woman who was a victim said, "I think that we, as victims, have often told our story and received care. However, I also think that speaking and care are perhaps necessary for the side of perpetrators too." Personally, this made me realize that the genocide in Rwanda was an atrocity in which those who experienced the genocide cannot be simply classified into two sides, which means I cannot tell who is wrong and who is hurt.

Even someone classified as a perpetrator may have had relatives that were killed. In addition, with their husbands incarcerated, the women might also be carrying economic, social, and/or psychological burdens; therefore, in a sense, they too might be victims.

4. How do you forgive?

Although I more often thought about the side of perpetrators during my stay in Rwanda, upon returning to Japan, I began to think of difficulties of some victims to "forgive." In Japan, I had issues in one of my friendships. Despite receiving an apology, I found it very difficult to forgive.

Although my problem is tiny compared to the issues of Rwandan victims, my own difficulties with forgiveness prompted me to think of how the Rwandan people managed to forgive. It will take time, but I will try to repair my friendship, while reflecting on those in Rwanda who achieved reconciliation.

5. A single word which expresses my stay in Rwanda...

The one word that expresses my experience as an exchange student in Rwanda is "love." Although it was too direct and I felt slightly embarrassed, I thought about love and felt a lot of it from those around me (Photo 5). At the first training session for a local NGO, the staff spoke of "Love yourself."



Photo 5: The maid of the house owner, Clemantine, and her child Cyntia. Through the wall, I heard Clemantine’s voice scolding Cyntia, their laughing, and praying. When I was there, they moved to Uganda. I do not know their new phone number, so it is difficult to get in touch. I wonder if Cyntia started going to elementary school. I wonder if Clemantine laughs with her jolly voice like she did before.

Even if you want to help other people, or partake in reconciliation, you cannot take care of others if you do not care about yourself. Although it seems an obvious thing, I want to remember these words, because I often put myself last.

I also felt love from the Japanese exchange students who stayed in Rwanda in the same period as me, other PIASS students, students from other African countries who I ate with, the land owner, their maid, and her daughter, who lived at the same compound for half the year (Photo 6; Photo 7).



Photo 6:

A farewell party hosted by the international student community. In the latter half of my study year, we ate lunch and dinner together. We usually ate rice, beans, potatoes, cabbage, cassava, and so on. Occasionally, when meat was served, someone always became a “meat keeper” to dish out the meat so that everyone had an equal portion. Some students usually go back to their room soon after they finish eating, but when meat is served, they stay at the place to eat for a long time, waiting for leftover meat.



Photo 7: Japanese exchange students. I had a very valuable time with students from Japan as well as from African countries. We discussed many things about Rwanda and about the social problems in Japan.

When COVID-19 has spread since 2019, many students with whom I spent time in Rwanda sent messages to me, worried about Japan and me. It pleased me greatly that although my student exchange period had ended, there were still people in Rwanda who cared for me and with whom I wanted to catch up as well.

6. After returning home

Soon after I returned to Japan, Octave and Hellen came to Japan as exchange students from PIASS. I met Hellen frequently, particularly for meals, coffee, shopping, and so on. Honestly, when studying in Rwanda, we did not have so many conversations.

However, we had more opportunities to talk in Japan. We talked about Hellen's family, her home country of the Democratic Republic of Congo, and the relationships within the community of international students at PIASS, of which I had been unaware during my stay in Rwanda. My impression of Hellen also changed from when I had met her in Rwanda to when we met in Japan.

There are so many things that I still want to do and places I still want to go with Octave and Hellen in Japan, so I hope that they will visit Japan again. (Photo 8).



Photo 8: Climbing Mt Takao with Hellen, who came to TUFSS as an exchange student in 2019–2020, and Mako Iino, who was an exchange student during the same period as me. I wanted to take them to my hometown, Yamagata; however, we had to postpone this due to the spread of COVID-19. Hellen and I talked about many things and she told me particularly about her family. I would like to visit her hometown and meet her unique family.



Photo 9: My friend Rachel, who always asks, “When will you come back to Rwanda?”, whenever I contact her. If it were possible, I would go now, to chat with her while drinking ikivuguto (It is fermented milk like yogurt to drink).

7. Conclusion

I have a Rwandan friend who asks, “When will you come back to Rwanda?” every time I contact her (Photo 9). I kept saying that I would visit in summer in 2020, but I am very disappointed to be unable to visit due to COVID-19.

All I can say to her now is “I’ll come after the situation improves”. I just hope that a day will come soon when I can tell her about a concrete plan to visit her.

3. University of Pretoria \Leftrightarrow Tokyo University of Foreign Studies

My Stay in Japan

Wendy-Rose Govender

University of Pretoria

Stay period at TUFSS: from April 2018 to July 2018

My stay in Japan has been one of the most enriching experience of my life. I fell in love with the culture and amazing food they have to offer. When first arriving in Japan, I didn't know what to expect and my Japanese wasn't very good. I adapted quickly to the culture and environment in Japan and got to experience new outlooks, customs and activities. I got to experience Japan, understand the people, its traditions, and its culture, I've learnt so much in just three and a half months of living here. TUFSS has helped me in my studies as well as encourage me for further studies.

I chose courses in Greek and Roman Mythology, English Literature, Religion and Culture in Japan and Japanese level 100. In Greek and Roman Mythology, I learnt about Greek stories and I was tested on them every Friday. In English Literature we read the novel, Bliteldale Romance and we discussed topics about the novel in each class. In Religion and Culture in Japan, I learnt about Buddhism and how it has affected the country of Japan and the lives in Japan. I was happy in my choice of subjects and learnt a lot through my semester. The lecturers were enthusiastic about their subject and I felt that the classes were very interesting. Japanese level 100 was my hardest class but it was very fun to learn a new language and the teachers taught me in a way that I could understand. I had eight hours of class per week which helped me have time to go sightseeing.

I also made a lot of international friends and we have become very close. To name some countries they are from are Brazil, Singapore, Philippines, Hawaii and America. We spent most of our time traveling around Japan and I got to learn different cultures from each one of them. I got to hear my Philippine friend, Victoria, sing a song from her country in her language during some Karaoke as well as my Hawaiian, Audrey, who made food for us from her home country.

Together we were able to travel to Chiba and have fun at Disney Sea and Disney World. We also did a lot of traveling around Tokyo. We went to the Ghibli Museum and a lot of other museums in Ueno. We also traveled around Shinjuku, Harajuku and Shibuya many times. We did a lot of shopping was able to use our Japanese language skills as much as we could. I was also able to experience traditional festivals such as the Fuchu City Festival which is held every year. My family from South Africa also came to visit me during my stay in Japan. They spent a week in Tokyo and I was about to eat out with them when I had the free time. I was lucky enough to celebrate my birthday in Japan and spent it bowling with some friends and family.

During this semester, I wanted to join a club to make a lot of Japanese friends. I join RAMS cheerleading club because it looked like fun. I've practiced with them for three months and I made a

lot of amazing friends in the team (Photo). The RAMS cheerleading club were friendly from the beginning and I have a lot of fun practicing with them. We practice about five to six times a week and I learn so much from them. I was also able to compete in the Kanto Championship with RAMS. It was a lot of hard work and determination but I gave my best and we worked hard together as a team. On some weekends we go to other universities to practice and I met a lot of cheerleading friends. It was a very hard team to join since they taught in Japanese but I adapted and it became easier as time went on, I was also able to learn a lot of the Japanese culture through this club. Also, there were many times when they would translate for us. I'm glad I joined their club; I have made a lot of memories with them and I am going to miss them a lot.



Photo: With RAMS club mates.

The most favorite thing about staying in Japan is the food. I love the different types of food Japan has to offer and I make sure to try something new every time I eat out. There are so many restaurants around Tokyo that we eat out at a new place every time. My favorite food to eat is Sushi and Ramen noodles. Almost every day we would try a different Ice cream flavor and my favorite dessert here is milk pudding.

I'm grateful to TUFs for giving me such a wonderful time studying abroad. I don't have any regrets and I had so much fun living here. I was able to make a lot of new friends and learn a lot of different cultures. I have a better understanding and appreciation for the nations people and their history.

I am also thankful to Yazaki Corp. for their financial support as well as Prof. Takeuchi and Mr. Myoi from African Studies Center - TUFs, and Ms. Kawakita of Centre for Japanese Studies, University of Pretoria who helped in making it possible for me to be able to study in Japan. They have given me a once in a lifetime opportunity. I will forever cherish the memories and friends I have made in Japan.

A Network Built on a Johannesburg Street Corner Corner Connecting to the World

Naoto Mihara

Tokyo University of Foreign Studies

Stay period at University of Pretoria: from July 2018 to June 2019

1. Introduction

How do you do. I am Naoto Mihara, a fourth-year student who was majoring in Africa in 2015.

Saki Takayama has already written in detail about the life and academics at the University of Pretoria, so in this article, I would like to talk about the cultures and networks in Johannesburg, South Africa. I feel that interacting through foreign study with diverse cultures and lifestyles and the lives of people in another place was about learning new living scenarios (Fig. 1). I also feel that I was able to learn the importance of building human networks.



Fig. 1: A stylish-looking older man selling sunglasses in Soweto Township.

2. Fashion culture and networks

In this section, I will describe how the network I formed in Johannesburg, South Africa, became a catalyst for connecting with people all over the world and led to a documentary (video) attracting worldwide attention, and I will talk about the lessons I learned from the milestones leading up to that point.

Video: *The Fashion Culture in South Africa by The Unknown Vlogs*

(Source URL: <https://www.youtube.com/watch?v=gYGoxIyh7T0>)

It was on the street corners of Johannesburg that I built a diverse network of people with local street culture as its backbone, represented by photography, dance, fashion, and BMX (motor cross bikes). It was built by taking walks on the street. You would think it would be better to walk with one of the locals or avoid walking altogether in order to reduce the chances of running into criminals. However, it is here that you learn about the fashion consciousness of young people in Johannesburg, how “cool” it is that they make street culture the backbone of their networks, and how they are so straightforward in talking that they might just pull you over while you are walking.

Starting with small comments such as "Hey, nice style" and "Take a picture," I became more and more connected to these fashion-obsessed youngsters. The first thing I learned from these young South African fashion lovers is a DIY[A1] mindset. Naturally, I and many other Japanese, especially those of my generation, tend to shell out money for things that look cute or cool.

However, the first impressions they shared upon seeing clothes I was wearing were "How did you make it?" and "Where did you buy the fabric?" For me “making” something and “buying” something were not equivalent ideas, so this was a new revelation. The youth of Johannesburg have the mindset of making their own things, like their own versions of the Birkin bag from Hermès (Hermès of Paris, a high-class French fashion brand) out of fabric they have purchased.

3. Communication tools

What is good about the fashion culture and networks in South Africa is that they are very compact and dense. As a result, my friendships spread widely, and I was able to connect with many of South Africa's most famous designers, photographers, and artists.

My hub for building friendships was the “Court Order” consignment store (Note 1), which was the wholesaler for clothing I imported from Japan. Various people who formed the backbone of my network gathered there, interacting with each other while talking about their shared fashion and sneakers over coffee (Fig. 2). I became acquainted with Akoo, an Indian from South Africa who is the boss at Court Order, and we would eat dinner at his home (Fig. 3; Fig. 4).



Fig. 2: My friend Steve, a designer for the Pessimistic brand (appearing at 3:56 in the video)

(Note 1) Court Order is a consignment store, and in addition to the one in Johannesburg, there is another in Cape Town. It sells fashion-related products but is also a community store with a coffee counter (Instagram URL: <https://www.instagram.com/courtorderza/>).



Fig. 3: My friend Akoo, owner of Court Order



Fig. 4: Court Order and me

One of the most informative friends I met at Court Order was a nonwhite youth who expressed the anguish and aspirations of other nonwhite and black [A2] people through illustrations. His name is Seth (a.k.a. “African Ginger”). I feel that I learned a lot about the pains and passions of South African youth, which are born of social structures still defined by skin color, as told by Seth using art as his tool (Fig. 5; Fig. 6).

Presumably, what troubles many students at the Tokyo University of Foreign Studies is that they know there exist people in dire straits and difficult situations, but they do not know what to do about it. However, there are countless ways to take action. I think that what is important is to discover what suits you.



Fig. 5: Illustrator Seth a.k.a. “African Ginger”



Fig. 6: One of the works by Seth. You can view his Instagram page at https://www.instagram.com/african_ginger/.

4. Cape Town fashion culture

I think that South Africa's fashion culture has been able to reach the depths it has because of the close connections between networks in Johannesburg and those in Cape Town.

My own network grew explosively as a result of meeting Regan, who works at Orphan Street Clothing Store (OSCS) in Cape Town and is the same age as his boss; Francesco from Italy, who is a friend of Regan and manages a rooftop bar; Seeraj who works at Levis South Africa; and Alex at Baseline Skate Co. (Fig. 7; see Note 2 for the stores).

Francesco's network, in particular, spreads out both domestically and internationally, connected through a pro-skater and photographer from New York and Braai (a BBQ gathering in South Africa). This was the first time I had ever seen a person who was as good at social communication as Francesco, and I learned a lot about mindset and behavior (Fig. 8).



Fig. 7: At the Orphan Street Clothing Store (OSCS); the person on the right is the author, and the person on the left is Regan Paulsen.



Fig. 8: Francesco's Instagram page: <https://www.instagram.com/francheeze/>

When my girlfriend came to Cape Town, we served Francesco Japanese food at his house, and he served us Italian food. (Thanks to Francesco) I was able to get my name out a little in Johannesburg and Cape Town, which led to more and more requests to shoot photos from several local brands through Instagram and to becoming increasingly immersed in South Africa's fashion culture.

(Note 2) Levis is a jeans brand that originated in the United States. It has stores around the world, and Seeraj handles press for the Levis South Africa home office (Cape Town). Baseline Skate Co. is a skateboard store typical of Cape Town. Alex is a clerk there, and we became close enough that he hung out with me and my girlfriend when she came to Cape Town to visit.

5. Networks are connecting to new networks

Meanwhile, I was suddenly contacted by a British cameraman and filmmaker through Instagram. He said, "I want to make a documentary about fashion culture in South Africa. Can you introduce me to a designer? I heard that you are familiar with the fashion scene in South Africa."

When I asked how he got my name, it turned out to be Akoo, the boss of Court Order. The British man, Toby, was the exclusive cameraman and filmmaker for the world-famous fashion icon Icy Kof (Note 3).

I introduced him to two designers, one from Johannesburg and one from Cape Town. One was my friend Steve from Pessimistic (at 3:56 in the video), an internationally competitive quality brand. The other was Anees from Young and Lazy (at 8:47 in the vide), who has been featured in magazines such as Hypebeast. It was at this moment that a network built on street corners in South Africa was connected to one in the United Kingdom. Currently, I am working to connect a network built in South Africa to red hot Tokyo.

6. Self-definition

I feel that young people in South Africa must define and appraise themselves to a greater degree than in other countries. One reason is that the unemployment rate in 2019 is up to 29%, and there is a chronic lack of jobs. By definition, this means that one in three people are unemployed. However, I feel they have the ability to define and appraise themselves.

As no one has given anything to them, they define themselves, building networks and getting work in different fields and areas. I feel that it was really valuable that I got to learn about this hungry spirit, which is useful in any occupation, through real-life experience in the course of my life studying abroad.

7. Self-image

I feel that it is important to build human networks, whatever realm you find yourself in. Increasing the diversity of human networks leads to diversification of one's possible self-image. Thus, you can push the boundaries of your existence, break away from stereotypes relying on a particular culture, and observe others' behavior in depth.

I feel that observing others contributes to determining one's values and priorities as well as defining one's own role and identity. I think it is important to come into contact with a wide variety of

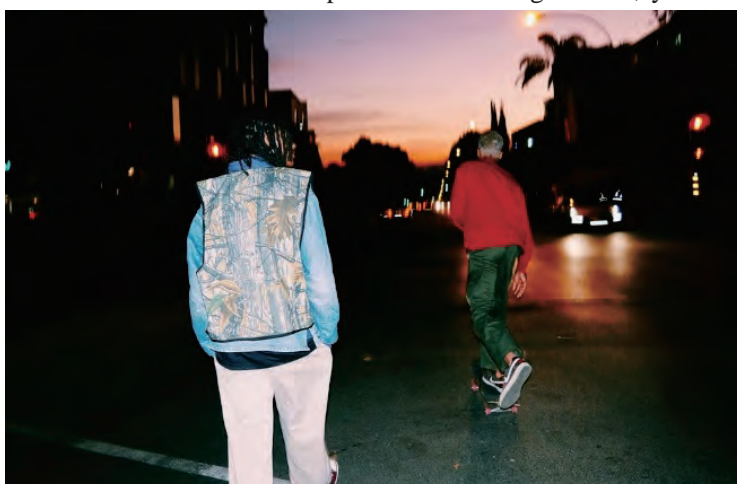


Fig. 9: Friends on skateboards in the evening in Johannesburg CBD.

(Note 3) Icy Kof's Instagram page: <https://www.instagram.com/icykof/>.

identities and life scenarios when you are young. I encourage you all to step out of your comfort zone (Fig. 9).

Thank you for reading through to the end.

4. Tokyo University of Foreign Studies => University of Zambia,
University of Zimbabwe and Eduardo Mondlane University

Studying and Working in Africa: Studying in Zambia and Working in Sudan

Riho Ikeda

Tokyo University of Foreign Studies

Stay period at University of Zambia: from November 2016 to September 2017

Hello everyone. My name is Riho Ikeda, and I am a fourth-year student majoring in Africa. I enrolled in 2014, the same year as Sae Torii, who introduced us her wonderful life in Cape Town the other day.

In this page, I would like to write about my two experiences in Africa –studying and working – in the form of a comparative account. If you have never been to Africa, if you are interested in but have not made your first step, or if you are thinking about which future course you take, I hope you enjoy this column and use it as a reference.

1. First off, I would like to explain when, where, and how I spent my time in Africa.

My first experience in Africa had started with a foreign study I did in Zambia that lasted about ten months from the autumn of my third year in November 2016 to September 2017. I am sure it seems like I had a great motivation to study abroad in Africa, but as far as I can recall, I chose Zambia simply because I thought it should be the real deal when we learn. Another reason was because it seemed really fun based on what I was told by one of my seniors at school, who had already studied in Zambia.

After wrapping up a most enjoyable time in Zambia, the country I chose as the setting for my second excursion to Africa was Sudan (Fig. 1). I took a leave of absence during the fall of my fourth year in September 2018 and have been working at the Embassy of Japan in Sudan as an assigned diplomatic staffer (Note 1), the same as Ms. Torii. I heard about diplomatic staffing from a veteran Tokyo University of Foreign Studies alumnus I met in Zambia and decided to apply, since there seemed to be a lot of merit to students getting practical experience.



Fig. 1: Locations of Zambia and Sudan

Note 1: Staff assigned to Ministry of Foreign Affairs diplomatic establishments abroad are sent to Japanese embassies around the world as employees of the International Exchange Service Association to assist administrative work. For details, check out the website of the International Exchange Service Association: <http://www.ihcsa.or.jp/japanese/zaigaikoukan/hakenin-01/>

I chose Sudan because I was interested in the culture and history of the country, which is located at the intersection of African and Arab cultures and has experienced many conflicts, so I wanted to know more about it.

2. Language, religion, and culture

Next, I will introduce some basic information regarding how the language, religion, and culture of the two completely different countries of Zambia and Sudan.

First, I will start with Zambia. Zambia gained independence from the United Kingdom in 1964, and its official language is English. Particularly in the capital city of Lusaka where I lived, most Zambians speak English. At the beginning of my stay, I had a hard time adapting to their unique African-accented English, but once I got used to it, there I was. Schools teach in English, and all classes at the University of Zambia (Note 2), where I studied, were also conducted in English. In addition, there are more than 70 tribes in Zambia, each with their own local language. The language most commonly used in conversations between Zambians is not English but one among major local languages such as Nyanja, Bemba, and Tongan. Due to the influence of its former colonizer, the United Kingdom, the majority of the people are Christian, and all go to mass on Sundays. The capital, Lusaka, is relatively developed, with many large shopping malls and plenty of South African chain supermarkets and apparel shops. Due to the high altitude of the entire city, the climate is relatively mild, making it a very comfortable and recommendable city for Africa novices like me at that time (Fig. 2).



Fig. 2: Zambian food. White corn flour kneaded in warm water and garnished with steamed nshima. Excellent.

Next is Sudan. Sudan was the earliest African country to gain independence (from the United Kingdom), which it did in 1956. However, despite this, its official language is Arabic, and its main religion is Islam due to the influence of earlier Egyptian rule. Sudanese people pray toward the holy city of Mecca five times a day. A loud call to worship (reading aloud from the Quran) is broadcasted in cities for each worship services, the first of which begins around 4 am each day. At first, the daily

Note 2: The University of Zambia is a national university in the Republic of Zambia. It is located in the capital city of Lusaka. It has an exchange agreement with Tokyo University of Foreign Studies including a foreign exchange program. Public website (English): <https://www.unza.zm/>

broadcasts would wake me up every day, but once I got used to it, I could fall asleep even if there was an explosion (Fig. 3). However, it was also difficult to get used to the scheduled days off on Friday and Saturday peculiar to Islamic countries. Before I did, every time I heard the phrase "see you next week" at the end of Thursday, I was engulfed by an unexpected feeling of happiness. This was despite the fact that I make up work on Sundays . . . One of the most famous Islamic culture is the tradition of Ramadan (fasting). The schedule is set every year depending on the Islamic calendar and the phases of the moon, and that year, it was 30 days from the beginning of May. During this period, we are not allowed to eat or drink anything, including water, everyday from sunrise to sunset. I also tried it, but I could not handle it even for a day and gave up.



Fig. 3: A landscape of Sudanese homes.

3. Life while studying abroad / Being an embassy staffer

“Africa” might just be one word, but my experiences living in Zambia and Sudan differed completely in terms of language, religion, and culture. Here, I would like to talk about my experiences while studying abroad in Zambia and my life in Sudan as an embassy staffer.

At the University of Zambia, I was in a development studies course, leaning about various fields of development in Africa as well as the present state of development, the processes and problems thereof, all with a focus especially on Zambia. Pursuing such studies on campus was undeniably interesting, but my most enjoyable and memorable experience in Zambia were the days I spent outside the university. My biggest privilege as a foreign student was that I could make use of any weekdays when there was no class, such as when the university was closed due to student strikes and term breaks (breaks between semesters). I visited some towns where Japan Overseas Cooperation Volunteers worked, to learn about their activities (Fig. 4), and assisted the field work of NGOs (Fig. 5). These experiences observing Japanese living overseas and working at the forefront of international cooperation was quite irreplaceable for me.



Fig. 4: Visiting an elementary school in Zambia, where Japan Overseas Cooperation Volunteers were assigned. Everyone loved the camera.



Fig. 5: A local volunteer weighing a child at a screening for children under five, sponsored by a Japanese NGO working in Zambia.

Through my exchange program, I was able to meet and talk with Japanese residents from various backgrounds, such as UN agencies, embassy, government-affiliated organizations, private companies, and NGOs, and I realize the various ways of international cooperation. Thus, this turned out to be a very significant time for me to think about what I wanted to do in the future. My everyday life was always with the constant water and power cuts, but these experiences also provided with opportunities to cultivate survival skills. I am now confident that I could live anywhere in the world.

My main job in Sudan is to make arrangements for business travelers (airline tickets, hotels, vehicle, etc.), just as Ms. Torii described in her article, as well as to handle a wide range of tasks such as assistance in accounting, events, and other general matters. Assigned embassy staffs do not play a leading role in diplomacy; they work behind the scenes. I feel a great sense of accomplishment when other embassy staffs are able to complete their work without delay, and when events end up with

success (Fig. 6). This work is full of joy and rewarding, and at the same time I was able to acquire the business skills required as a member of society.

Additionally, I fully enjoyed shopping, spending time with friends, and exploring my hobbies on weeknights and my days off.



Fig. 6: Photo with embassy staffs. There are 25 local staffs, compared to 12 Japanese staffs.

4. Peaceful Zambia / Turbulent Sudan

One of the biggest concerns for anyone heading to Africa is probably the local security and state of affairs. From my perspective, Zambia and Sudan represent polar opposites, and I feel that being able to see the political changes in Sudan is a particularly valuable experience.

Zambia has experienced no conflicts since its independence, and I had an impression that its citizens are peace-loving and gentle (Fig. 7). According to overseas safety information from the Ministry of Foreign Affairs, except areas bordering Angola and the Democratic Republic of Congo, the travel risk level throughout Zambia is "Level 1", which is the lowest, requiring only the normal level of caution for overseas travel (being careful of pickpockets and luggage thieves, avoiding walking alone at night, etc.).



Fig. 7: Team Japan vs. Team Zambia baseball tournament. I participated as a scorekeeper.

On the other hand, Sudan has been experiencing a turbulent period of history since I was assassinated. The dictatorship of former President al-Bashir, which had lasted about 30 years, was overthrown by popular protests. Anti-government demonstrations spread from the city of Atbara last December 19 (2018) in response to soaring prices. On April 6 (2019), the army finally took action. Former President al-Bashir was eventually forced to resign, and the coup d'état was successful. However, negotiations between those desiring a transition to civilian rule and the Transitional Military Council established after the coup could not easily reach an agreement. Then, on June 3, militias fired at people holding a sit-in demonstration in front of the military headquarters with live ammunition, which developed into a dire situation with more than 100 people dead within a few days. At this point, the travel risk level according to the Japanese Ministry of Foreign Affairs was raised up to "Level 3" throughout the country, and many Japanese residents, including JICA staffs, were forced to evacuate. Actually, I was one of them and am currently waiting in Japan for the situation to improve. The political change in Sudan over the last six months has definitely left its mark on its history, and as one of the people who witnessed the entire situation, I must share what I saw and felt from the position of the diplomatic corps (Fig. 8).



Fig. 8: A photo taken during a Nile River cruise. You can see the confluence of the White Nile and Blue Nile.

5. Looking back

Although I have outlined two types of my African experiences, I am not conclusively advising you which is better. Being able to use your time freely as a student will put your independence and proactivity to the test, while working gives you the opportunity to acquire skills. Being a membership in a foreign organization also offers a bird's eye view of the country, however, there will be constraints on your time. The answer depends on what kind of experience you prefer to spend your time on and which ability you would like to develop.” (Fig. 9).



**Fig. 9: Victoria Falls, a World Heritage Site in Zambia.
I am completely overwhelmed by the vast natural
wonder!**

It is my best pleasure if you would feel Africa interesting through this column. Thank you so much for letting me share my experience with you!

My Experience in Zimbabwe

Shoyo Sugiyama

Tokyo University of Foreign Studies

Stay period at University of Zimbabwe: from February 2018 to December 2018

1. Introduction

My name is Shoyo Sugiyama. I have been a member of the International Sociology Department and the African Regional Studies Department at the Tokyo University of Foreign Studies for four years. After completing my third year, I took a year off from TUFS to attend the University of Zimbabwe, as an exchange student, from February to December in 2018. As information regarding Zimbabwe, especially those related to student exchange, is very scarce in both Japanese and English, I have written this article in hopes it may be of use to the reader. If you happen to be interested in Zimbabwe, or studying in Africa, I would be delighted if you stayed to read my personal epilogue of the time I spent in Zimbabwe.

2. Zimbabwe

First, let me talk about Zimbabwe from my personal perspective. After the turmoil following the 2017 ousting of President Robert Mugabe, Zimbabwe has transitioned to a new system under President Emmerson Mnangagwa, who has been in power since the 2018 general election. Despite civil unrest, such as assassination attempts and deaths during the protests in the lead-up to the elections, when I left Zimbabwe in December 2018, I felt that the country was returning to a much calmer state.

Zimbabwe is often associated with hyperinflation (Photo 1). During my time as an exchange student, I faced some problems in buying daily necessities using US dollars and proxy currencies (called bond notes, eco-cash) for various transactions. However, the current economy is far from stable (at the time of writing, in January 2019, commodity prices, including gasoline, have risen sharply), and the situation remains unstable; therefore, I recommend caution when travelling around the nation.



Photo 1: A 10-trillion Zimbabwe dollar note in use in 2008; of course, this is not currently in use.

The level of safety in the country is excellent. One can walk around at night in the city of Harare (Photo 2) without running into any problems (although, I would not recommend it), and if one has the misfortune to cross into any, aid can immediately be sought and found from those around. This is not to say that one must abandon his sense of caution, but I personally did not experience any danger during my stay.



Photo 2: Photo of the city of Harare. Jacaranda trees in bloom in September.

3. University of Zimbabwe

Considering the lack of information on the internet, I wish to discuss a little about the University of Zimbabwe. The University of Zimbabwe is the largest university in Zimbabwe, featuring various faculties of both liberal arts and natural sciences, and is home to an immense number of students. While some of the dormitory equipment and Wi-Fi was slightly problematic, most of facilities were maintained well and was available (notably, a wide range of sports facilities, including basketball hoops, soccer courts, running tracks, and even a martial arts gym, and swimming pool). Therefore, I faced no particular issues or shortcomings when studying at the school. The university library, in particular, was outstanding, as it housed valuable literature such as official documents dating from the Rhodesian period, ethnographies, and demographic data of the country, and was a valuable source when searching for materials.

There were no Asian students studying at the undergraduate level, though there seemed to be a few studying post-graduate. There were however quite a large number of international students coming from other parts of Africa, such as Lesotho, Mozambique, and South Sudan, to study the field of medicine. Therefore, I think that, unless you search for it, there is little opportunity to meet with exchange students to talk or study.

4. Preparation for study abroad

I did not do anything special to prepare, as I recall it was only two weeks before departure when I

managed to gather all the documents I needed. It should be noted that I had been trying to receive my vaccinations a year prior before I went to study abroad (I believe I started around May). Items that proved to be useful are the following; electric pots, origami, electrical connectors, and instant foodstuffs. I did face some struggles because I had forgotten to pack a portable water boiler/immersion heater. As there is no hot water on tap in Zimbabwe, one must fill buckets and heat water using those devices. There is the option to purchase portable water boilers/immersion rods on arrival; however, my advice is to bring one with you.

In addition, one should exercise great care when applying for a student visa. Upon securing my visa, I had all the necessary documents per the listing on the Zimbabwe Immigration Ministry website; however, when I arrived in Zimbabwe, the local immigration office requested a form not listed in the visa application (a criminal background check was required), which became problematic. Therefore, my advice is to contact the Embassy of Japan in Zimbabwe prior and proceed with great care during the application process.

5. My Life as an Exchange Student

I lived in a college dorm. My lectures ran from February to May and August to November; with the rest being holidays, where I visited neighboring countries (I visited Rwanda and Mozambique, and a little of South Africa and Zambia), or enjoyed homestay with my friends from the University. (photo 3A, 3B).



Photo 3A: My homestay environment



Photo 3B: Another scene from homestay

At the University of Zimbabwe, I studied sociology, psychology, anthropology, African philosophies, and social research methods. My classes were challenging, with the latter two being especially difficult, and I struggled writing papers in English at the end-of-the-semester exams. I took 12 units over the course of the year; with the one leaving the greatest impression on me being African philosophies. According to my professor, the traditional philosophy of Africa starts with the assumption that “it is absolutely impossible to understand everything in the world.” The words which left a strong impression on me were the following; ‘Do you have any idea how arrogant the western premise

ideology of “Dismissing ignorance” is?”

Often, the university lectures would finish in the morning or early afternoon, and with no classes on the weekends, I had a lot of free time. I spent my free hours walking through the city of Harare, participating at the University’s Tae Kwon Do Club, and receiving lessons from a local wire artist (Photo 4). University life in general was not too busy, so other students too used their free time to play sports, drink, and generally enjoy their youth.



Photo 4: With a master wire artist

6. Conclusion

Drinking beer with friends at a local tavern in town. Taking a mid-summer anthropology lecture in the auditorium. Learning wire art and African philosophy in Zimbabwe. My humble experiences in interacting with the kind and noble people of Zimbabwe. All of these experiences and memories are with me. Given its geographical and political conditions, it may be difficult to recommend Zimbabwe as an ideal destination. However, for me, studying in Zimbabwe was an excellent decision, perhaps the best I made in my life. Although I do not recommend Zimbabwe lightly, if you are interested, I highly recommend studying or simply visiting the country. I am most certain you will have a fulfilling experience.

Great Mozambique Adventure

Ryohei Shiozaki

Tokyo University of Foreign Studies

Stay period at Eduardo Mondlane University: from May 2018 to February 2019

Introduction

Good afternoon. I am Ryohei, a major in Latin American Studies specializing in Portuguese-speaking countries. I spent about eight months studying abroad in the African nation of Mozambique (Fig. 1).

I thought of writing about why I went to Mozambique and how it made me feel. Since I am someone with strong personal feelings, my account of my experience begins before my travels.



Fig. 1: Location of Mozambique.

-Table of Contents-

1. “Studying abroad is like a vacation!”
2. “Why didn’t all of you shoot for Harvard?”
3. I wanted to study abroad, but I did not want to take any classes
4. A rough start (the start of my exchange program)
5. Eduardo Mondlane University

6. The police
7. Homestay
8. Even if you believe the same thing, what you experience is completely subjective
9. If you want to make something popular, you must determine demand and capacity
10. Seeing is believing

1. Studying abroad is like a vacation!

I wasn't attending school at the time, just stuck working and taking exams. Finally, after what seemed like a year-long winter, I suddenly felt, "Now is the time!" so I enrolled in the Latin American (not African) Portuguese program at the School of International and Area Studies at the Tokyo University of Foreign Studies. Thoughts had been growing over that long winter such as "Latin America looks interesting" and "I want to work at the United Nations!" Deciding that I wanted to get into the U.N. and thus wanted to study under a professor whose background included working there, I chose to enroll.

By the way, back then, I came up with an idea: choose Spanish to get into the UN because it would be great if I could speak one of their official languages. Portuguese was my second choice. At that time, it was a major shock that I was being exiled to an island, but when I think about it now, I could not have reached Mozambique without doing so (Equatorial Guinea is the only Spanish-speaking African country).

Upon admission, I immediately made an appointment with my professor. The conversation was as follows (although there are some places where I had to make it up a little):

"I want to get into the U.N. What should I do?!"

"Join a foreign-owned company as soon as you can and use what you earn to go on to a foreign graduate school. Get an MBA (Master of Business Administration). Then take the JPO test (Note 1)."

"What should I do if I'm thinking of studying abroad?"

"Studying abroad is like going on vacation! If you have that kind of time, then you should go to graduate school early and get an MBA."

Conversing this way, while there were parts that seemed reasonable, I'd give an uncomfortable "Hmmm?" Then I had a thought.

"Why do I want to join the U.N.?"

It wasn't a case of "I want to do something!" I just thought, "I want to see if I can get into the U.N."

Note 1: Abbreviation for Junior Professional Officer (Junior Professional Officer): non-regular professional staff dispatched from a country to an international organization such as the U.N. for a certain period of time based on an agreement between the international organization and the country's government.

I realized that if the U.N. is as I imagined it to be, then I didn't want people like me to be in the organization. I started to realize that I just wanted the U.N. as a way of accomplishing something.

I wanted to dig deeper into my interests. On top of that, I wanted to think more and more about what types of steps I should be taking in my life. That is what came to mind (when I told the professor, "I just realize that the U.N. is just a means to me," she became furious).

2. "Why didn't all of you shoot for Harvard?"

I started attending seminars my third year. I was in Hyoduk Lee's seminar as part of the Contemporary World Theory course at the School of International and Area Studies. In that seminar, I encountered a question that had an outsized personal impact on me.

"Why didn't you all shoot for Harvard? Right now, if you get out of Harvard, there's a life with annual income of about 30 million yen waiting for you, right? In such a world, it's amazing that Harvard wasn't one of your options when picking out a university. Perhaps society is structured in a way that doesn't let you see those options."

I was shocked. It was as if I'd been hit by a single shot from outside my perception, diagonally above where my consciousness could not reach. Maybe I had messed up, or, assuming I had chosen that option, I might have ended up playing a game on rails that society had laid out for me. It was scary.

"If 'undergraduate studying abroad is a vacation,' then I would make it a meaningful one."

I would study abroad for one year without getting a degree, and in doing so, I would make it something more meaningful than just a degree or something along those lines. If the words I said before matched the question posed to me in this seminar, then I'd spend a year in the place that seemed the farthest from me now and look back at my present self objectively from there.

3. I wanted to study abroad, but I did not want to take any classes

"So, you want to go to the place that seems the farthest? How about Africa?"

While I was thinking about this is when Mozambique came up. Of the five Portuguese-speaking countries in Africa, I felt that Mozambique was the easiest to reach (I have heard rumors that there were quite a few people in the Portuguese department who were studying abroad in Mozambique). There was another reason for choosing Mozambique, but I will skip it because it is long (if you are interested, click here: "Why I chose Mozambique").

Now, what to do about Mozambique? I wanted to go, but I did not want to take any more classes, and I wasn't confident in my Portuguese. I also did not want to spend time in classes I did not understand. That is what I thought.

However, I wanted to stay there for a long time. I mean, I wanted a visa. Student visas are the quickest way to do this, but I did not want to take classes.

"Ummm."

When I talked with a someone who seemed to have a connection to Mozambique about this problem,

she said, "As a research student, how about directly asking a local professor? There seems to be some research you want to do." It turns out that I met someone doing local field work! (What!)

Through that person, I got into direct contact with local professors and administrative staff and, after occasionally negotiating over the phone on WhatsApp (Note 2), managed to get a letter of acceptance.

4. "A rough start"

Because of the hectic nature of everything in the lead-up, I eventually jumped on an airplane in the middle of figuring out with the university where I was going to live. I could not get answers to questions such as "What will my address be? What is the rent? What about food?" before I departed, and then I arrived . . .

"Please call us when you arrive, okay? Then come to the university."

I had received such an email from the office of my host university before arriving, so I purchased a SIM card at the airport and made a phone call.

"We closed at 3:30 PM, so everyone has already gone home. Go straight to the dormitory."

"...Okay. (Yeah, they're already closed ... Bit scary to go straight to the dormitory alone ...)"

Confused by the sudden change, I handed my phone to the taxi driver and had the office direct me to the dormitory. I then suddenly found myself dropped off by the taxi in front of a towering 11-story building (Fig. 2). There was no elevator.

With the help of the driver, I carried my large bags up to the 11th floor. On the way, I passed by a person who seemed to be the dorm mother, who exclaimed, "I didn't hear that a new exchange student was coming!" Me: "Oh My Goodness ..."

Nevertheless, the top room had a vacancy. Having been told this, I managed to get into the dorm. I gave myself a breather. I had brought only the minimum amount of luggage, so I wanted to do some shopping, and I consulted with my roommate (it was a double room). This was because there was only one key.

"You can go out. I will leave the key with the first-floor security guard."

I was relieved by what he said, so I asked another student who was nearby for directions and went to the supermarket. By the way, Maputo is the



Fig. 2: The towering dormitory. At night, it has the overwhelming feeling of a haunted mansion.

Note 2: WhatsApp is the world's largest free SNS application, offered by the American WhatsApp company and allowing for messages to be exchanged in real time. It can be installed on a mobile phone or other device and can be found even in developing countries.

capital city of Mozambique, and it is quite developed and has pretty much everything, from local shops to Aeon Mall-like shopping centers.

Then, I got back. I retrieved the key from the security guard and went to the 11th floor. However, the key DID NOT work. I went back to the first floor and said that I thought it was the wrong key. However, the response I got was, “That is the only key. You’re probably not using it right.”

Since that could have been the reason, I went back to the room, but it still didn’t work. I went to the first floor again and complained that this was definitely the wrong key. The response I got was, “That’s the only key. I don’t know [what’s wrong].”

Well, what could I do? Wait? So, I waited 45 minutes for my roommate, and when I ran into him, he said, “Sorry, I forgot to leave it [the key].”

I was lucky he came. Together, we returned to the room. As I had made two and a half trips back and forth to the 11th floor at this point, I was feeling a bit woozy. When we got to the room, he said, “Did you eat? There is a school cafeteria on the second floor, so you should go get dinner.” I invited him to go with me, but he did not come.

I entered the dining room with a tense look, and all eyes turned toward me at once. I wondered, “Maybe this dorm was not originally for exchange students.” (A staff person later explained to me that other dorms for international students had filled up, so this place had to house local students.)

“Blah-blah-blah . . . yadda-yadda-yadda . . .”

At this point, I was already feeling crestfallen, but I still wanted to eat, so I got in line. Everyone else was carrying some kind of punch card, but of course, I did not have one. What was I supposed to do? I wondered while I waited for my turn. When it came up, I said to the receptionist, “I just got here today and don’t know how things work. I am a foreign university student.”

“×●～!= : ※ ? ♪ =cinco!”

I had no idea what he was saying, and all I caught was the “cinco!” at the end (phonetically, “cinco” means “5” in Portuguese), so I thought he meant five meticals (Note 3, approximately 10 yen), which seemed very cheap, and I handed over five meticals. When I did this, he responded more harshly (angrily), “×●～!= : ※!!!!!! ? … ×●～!= : ※ ? ♪ cinco!”

He shouted at me again, but still, the only part I caught was “cinco.” “So, I’m giving you 5 meticals!” I shouted back. A student who could not bear to watch this finally took control of the situation (I was told later that “trinta e cinco” (phonetically, “trinta e cinco” means 35 in Portuguese) was what the person was telling me (or maybe it was 25), which, regrettably, was not quite as cheap). Luckily, that day, they let me eat for free, so I managed to survive on kindness.

Note 3: Meticals are Mozambique currency and were introduced in 1980. 1 metical equals 1.72 yen (rate as of March 31, 2019).

Later, I climbed back to the 11th floor, and needless to say, I fell asleep (Fig. 3). Right then, I really wanted to return to Japan. How often would I have to go to the 11th floor?



Fig. 3: Nighttime view from my dorm room. The height made it quite beautiful. However, the first night it made me feel empty inside.

5. Eduardo Mondlane University

The place I was staying at was affiliated with Eduardo Mondlane University in the capital city of Maputo (Note 4, Universidade Eduardo Mondlane). It is the largest of Mozambique’s public universities and, supposedly, the most difficult. It is a comprehensive university, offering a wide range of disciplines, from the humanities to the natural sciences and medicine.

Many of the exchange students are from East Timor (where the official language is also Portuguese), and I got the impression that there were only a few exchange students from various other countries. However, they had a system for receiving exchange students, and new arrivals were given a mentor called a “padrinho” (Fig. 4).



Fig. 4: My padrinho.

Note 4: Public website URL: <https://www.uem.mz/>

The students from East Timor were great, and as we were all from Asia, there was often a sense of companionship. They treated each other like family, and I was often invited to various gatherings. At the invitation of some East Timor students, I got to play soccer (Fig. 5). Even though I had almost no experience, I said "I can play soccer!" because I wanted friends, but suddenly, I found myself thrown into a serious match with spectators and referees.



“Kagawa! No, Honda!”

Fig. 5: Soccer with exchange students from East Timor.

It ended up being neither. I obviously could not catch a pass from my friends and was substituted. My lie was easy to spot (however, they were great and invited me, saying, “Let’s practice together!”). By the way, every Sunday, soccer league matches were held on campus.

6. The police

Public safety in Maputo is not considered to be very good. It is said that you should be especially wary of the police, and the number one thing is to not run into them at night. If you are out at night (which, naturally, you should not be) and run into them, you will inevitably be asked to show your identification.

In Mozambique, you are legally required to carry an ID card at all times, but if someone tells you, “Hand it over for me to see,” and you do give it to them, something bad may happen. If you are very unlucky, a cop might say, “Give me money if you want it back.”

When I was asked to show my ID, I was always careful not to hand it over. However, the police often try to take it by force, and then the situation turns into a fight resembling a bread-eating contest at a sports event (Fig. 6). Eventually, this ends in getting a lecture from the police, who say, “Enough already. You have our respect . . . “



Fig. 6: Illustration of a bread-eating contest. Police trying to take my ID (passport) are like a person trying to catch and eat anpan (bread pastries with bean-paste filling).

7. Homestay

In the beginning, I tried doing some field work. A friend's family home was near a location I wanted to check out, and they let me stay there for about a week.

The location was in Xai-Xai, the provincial capital of Gaza Province, which is located next to Maputo.

Mozambique's largest city is its capital of Maputo. The second is Beira, which is the capital of Sofala Province, and the third is Nampula, which is the capital of Nampula Province. However, it feels as if the only place with any noticeable development is Maputo.

A 30-minute drive into the outskirts of Maputo reveals a wide stretch of grass. Many of the fields show signs of slash-and-burn farming, and the differences in development are obvious. Xai-Xai is located about four hours' drive from Maputo.

Mozambique is famous for its beaches, but looking at the ocean from Maputo is stunning. It is almost brown. However, if you go to Xai-Xai, you will see a beautiful sea (Fig. 7).



Fig. 7: The shops are lined up on the opposite side, creating a relaxed atmosphere.

Compared to Maputo, Xai-Xai has no skyscrapers, and the view is completely different (there was a Kentucky Fried Chicken still). About 30 minutes by a shapa passenger bus from the center of Xai-Xai and then about 20 minutes on foot from there is where my friend's parents lived. Though I thought, "Do I really want to go to the rural countryside?" it turned out to be a relaxing place.

The next day, I decided to go to the house where my friend's sister lived, and after finishing my planned work, I left the house around 4 pm. I did so having been told it would take me about an hour on foot.

On the way, I saw someone waving their hand. From what they were saying, they seemed to be my friend's family. I sat there for a while and had some rice because it was time for dinner. After staying about 30 minutes, I headed out again. At this point, it was pretty dark.

On the way, I encountered the family again, and the same thing happened.

"Why don't you try saying, 'Nadziha'?"

My friend had said this to me with a mischievous look in his eye, and without thinking, I humorously said this to the family I had just met. They burst out laughing. Without realizing it, I had blurted it out rather boisterously, so I asked them what it meant, which turned out to be "delicious" in the local Shangana language. Stroking my heart, I vowed to continue using it.

This meeting went on again a total of three times after these two, and finally, I headed home, relying on the light from my friend's cell phone. When I finally arrived, it was pitch black. The dinner calling out "Come on, eat!" to me was already my fourth. It was delicious, as I had to say (Fig. 8) (I recall that it took between two and a half and three hours to get home).



Fig. 8: A curry-like dish made with cassava leaves and called matappa is common. It contains coconut.

There was no electricity in my friend's sister's house, so we used candles at night. There was a toilet and a bath (though it was just some warm water for bathing) outside that were surrounded by straw. Naturally, there was no ceiling, so I bathed under a sky full of stars (Fig. 9). This was truly a great experience.

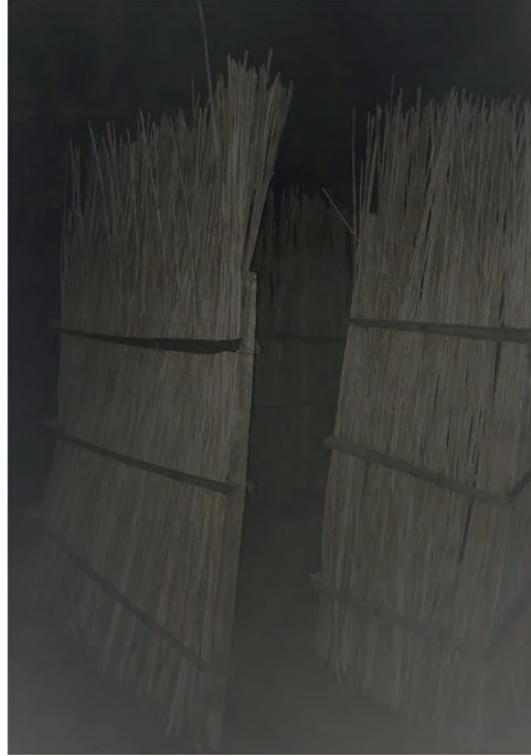


Fig. 9: Shower room space. The toilet was the same way.

8. Even if you believe the same thing, what you experience is completely subjective

When you live in a dormitory, you are often asked to lend money.

Sometimes, someone would ask me to lend 10 meticals (approximately 20 yen) to ride the shapa (passenger bus) because they had no money. I would be asked to do this two more times before getting my money back. I'd be told, "I'll pay you back any day now," but on the promised day, the money was not there. Gradually, those friends might start to feel guilty or stay away from me.

The amount of money was not the problem. I just would have liked if they had said something like, "Sorry for being late," or "I can't pay you now, but I'll pay you ~." However, there was one thing that concerned me. They, my friends, treated me to a meal many times. There were many times I would have a full stomach from whatever he cooked.

"I'm always feeding you, so is it okay if I don't return your money?"

I thought, if he said that, I would be at a loss for words. It would be an exchange I would rather not have. However, it never came to that. It probably never even came to his mind.

This was just one individual example, so I cannot make a generalization, but I think between the

two of us there was a different sense of the value of money. We may mutually recognize the coins and notes in front of us as money, but the implications associated with them probably differ in regard to many factors, including the environments in which we live and traditions that have been passed down to us.

There are shared concepts in the world, such as “religion” and “capitalism”; however, if you ask someone other than me, they might not recognize them in exactly the same way. This situation made me strongly aware of this.

9. If you want to make something popular, you must determine demand and capacity

I was not very serious about attending the university, so I interned for three months at a company called Nippon Plant Fuel Co., Ltd. that I had been interested in for a long time (Note 5).

In simple terms, it is a company that is working on "using IT to solve problems facing agriculture." This includes disseminating new products in cooperation with farmers, which is something I participated in (Fig. 10).



Fig. 10: One shot from my internship. On many occasions, I went to Boane, an hour's drive from Maputo, and had many meetings with farmers. It was a really valuable experience.

It is often said that ICT (Information and Communication Technology) is rapidly spreading in Africa, and that is true. A lot of people have smart phones, and feature phone users can easily use interpersonal money transfer technology. That is why there are so many people in Africa working in business and international cooperation using this technology.

However, what you have to be careful about at now is, "Is there demand? If not, is there a possibility that demand can be created? If so, is there the local capacity to support the solution?"

No matter how good a project or how efficient a product is, it will not work without the help of the

Note 5: This link leads to an article about the business of Nippon Plant Fuel Co., Ltd. in Mozambique: JETRO Area / Analysis Report, "An App that connects villages, Japanese companies embark upon an 'Electronic Agricultural Cooperative Platform' (Mozambique)," November 29, 2018

locals. Even if a business is conducting a project that they think is good for locals, if those locals do not want it, the project will never even make it to the starting line.

Local people have tended to accept outside projects as "help" without refusal. However, I was keenly aware that just getting the okay did not necessarily mean you were actually at the starting line.

Furthermore, no matter how well something works theoretically, anything that exceeds the capacity of the local people will not work in the first place—it is like having only a recipe but no pot or ingredients. As I mentioned above, the world that the locals perceive is often different from the world that we perceive.

I realized that no matter how good an idea is, it will not succeed unless the little differences and capacity are carefully determined (Note 6).

10. Seeing is believing

Now the word “Africa” is seen everywhere. TICAD 7 (The 7th Tokyo International Conference on African Development), hosted by the Japanese government, will be held in Yokohama in 2019, so it will be even more exciting.

Many people who come to “Africa” do not even know where “Mozambique” is. I think there are so many people like that. There is no other place like this—55 countries that can easily be lumped into one word: “Africa.” Before studying abroad, I would easily fall into saying “Africa.”

On the other hand, the people of Mozambique saw me and shouted "Chinese!" many times. Every time I walked around the city, I'd hear a voice saying "Nihao! Ching-chong, ching-chong!" When I responded, "I'm Japanese!" they'd laugh unapologetically, saying, "Oh, are you Japanese?" From their point of view, Asians are mostly Chinese.

In "Africa," the area where "we" from East Asia lived was collectively regarded as "China." This is what is going on—it is like the flip side of the fact that we lump 55 countries together and call them “Africa.”

Few of those specializing in the Latin American region go to Mozambique. It has been called the "stray Portuguese department." However, I am really glad that I spent a precious year of my student life in Mozambique. It was a very valuable year for me, during which I sharpened my image of "Africa" and gained some perspective on things I had taken for granted.

I wrote at length, but now here is the end.

If you want to go to Mozambique, or if you want to go somewhere else in Africa, follow your instincts. Please go, by all means. No doubt it will be an important time.

*If you have any questions, please contact me at any time. I am waiting for you!

Ryohei Shiozaki E-mail: iverson3.ori@gmail.com

Note 6: In that sense, I think that the mobile phone-based m-pesa money transfer technology, which has become popular from Kenya, is superb in terms of grasping demand and capacity. See the following link for m-pesa: <https://af-tech.jp/m-pesa/>



2021年3月22日発行

編者：大石高典、神代ちひろ

発行者：東京外国語大学（国際社会学部アフリカ地域専攻、現代アフリカ地域研究センター）

執筆者：内田 歩、飯野真子、池田梨穂、井出有紀、梅津知花、川口里紗、川瀬康太郎、河野賢太、塩崎諒平、杉山翔洋、高山咲希、田口暢亮、鳥居紗衣、西川佑太、野間 武、深澤智子、宮城 由、三原尚人、山城典子、吉田菜摘、Charles Acheampong Agyeng, H el ene Mikanda Alinethu, Wendy-Rose Govender, Elie Rodrigue Icishatse, Octave Gahirwe Kabera, Shukulu Murekatete

協力者：坂井真紀子、武内進一、緑川奈津子

この冊子は、2020年度採択大学の世界展開力強化事業～アフリカ諸国との大学間交流形成支援～「アフリカにおけるSDGsに向けた高度イノベーション人材育成のための国際連携教育プログラム」により作成した。

Published on the 22nd March, 2021

Edited by Takanori Oishi and Chihiro Kumashiro

Published by Tokyo University of Foreign Studies (African Area Studies, School of International and Area Studies and African Studies Center)

Contributors: Charles Acheampong Agyeng, H el ene Mikanda Alinethu, Wendy-Rose Govender, Elie Rodrigue Icishatse, Yuki Ide, Riho Ikeda, Octave Gahirwe Kabera, Naoto Mihara, Shukulu Murekatete, Ryohei Shiozaki, Shoyo Sugiyama, Chika Umetsu

Collaborators: Makiko Sakai, Shinichi Takeuchi, Natsuko Midorikawa

Note: This booklet is printed as part of Inter-University Exchange Project, *Innovative Africa: Educational networking Programs for human Resource Development in Africa's SDGs*.

